

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 23

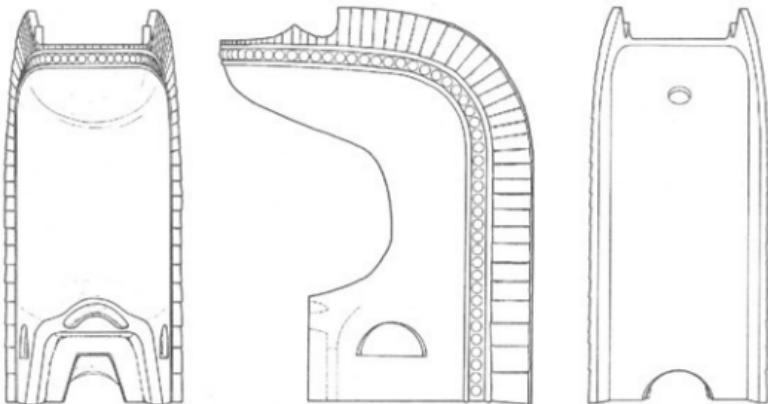


平成五年五月

奈良国立文化財研究所

飛鳥・藤原宮発掘調査概報23 正誤表

頁		誤	正
6	第1表	藤原宮期以前	藤原宮直前期
45	1行	構検出	出
56	第3表	軒丸平	軒丸瓦
63	14行	北側柱	棟通りの柱
65	4行	往目	注目
65	8行	「秦人マ佐口／三野國加口」	「秦人マ佐亡／三野國加亡」
66	5行	i i	i
72		第39図差し替え	
73	2行	黄灰粘土	黃灰色粘土
74	第4表 左下隅翻		その他
81	23行	凝灰質砂岩	凝灰岩質砂岩
82	20行	磚	埴
86	4・5行	軸受付	軸受材
写真 5	キャブ ション	藤原左京九条四坊	藤原京左京九条四坊



第39図 坂田寺出土鶴尾復元図

目 次

平成四年度発掘調査地一覧	2
I、藤原宮の調査	4
1、東方官衙地区の調査（第67次）	5
2、内裏西外郭地区的調査（第70次）	19
3、西方官衙地区の調査	23
ア、第68次西・第69次東・第69次西調査	23
イ、第66-15次調査	34
ウ、第66-16次調査	37
エ、第69-6次調査	37
オ、第69-7次調査	38
カ、第69-8次調査	38
4、宮南面西門・内濠・外濠の調査（第69-4次）	38
5、宮外周辺の調査（第69-9次）	39
6、宮東南隅の調査（第66-14次）	41
II、藤原京の調査	42
1、左京二条三坊の調査（第66-17次）	43
2、左京六条一坊の調査（第69-3次）	43
3、左京九条四坊の調査（第69-11次）	44
4、右京一条一・二坊の調査（第69-10次）	46
5、右京二条一坊の調査（第69-2次）	47
6、右京二条二坊の調査	48
ア、第69-1次調査	48
イ、第69-5次調査	48
7、右京七条一坊の調査（第66-12次）	49
8、本薬師寺の調査（1991-1次）	53
III、飛鳥地域の調査	58
1、石碑遺跡の調査（第11次）	59
2、坂田寺の調査（第8次）	68
3、山田道の調査（第5次）	76
4、飛鳥寺の調査（1992-1次）	79
5、飛鳥寺南方遺跡の調査（第1・2・3次）	87
6、小墾田宮の調査（1992-1次）	97

写真図版

平成四年度発掘調査地一覧

* 本書に未収録

遺跡・ 調査次数	調査地区	面 積	調査期間	調 査 地	所有者等	備 考	執筆 担当
藤原宮67	6 AJN-C	2,000m ²	3. 4. 17 ~5. 4. 6	橿原市高殿町326-2 365-1他	中浦忠太郎 国有地	計画調査	川越
68西区	6 AJG-T・U	480m ²	3. 12. 6 ~4. 2. 6	橿原市四分町293他	橿原市	団地建設	深澤 島田
66-12	6 AJH-S	350m ²	4. 1. 8 ~2. 19	橿原市高殿町5-2他	橿原市	宅地造成	黒崎
66-14	6 AJD-P	13.5m ²	4. 2. 5 ~2. 6	橿原市高殿町27-1	橿原市	溜池改修	伊藤
66-15	6 AJG-T	800m ²	4. 2. 12 ~4. 13	橿原市四分町284-1他	橿原市	同地建替	深澤
66-16	6 AJH-P	70m ²	4. 2. 24 ~2. 25	橿原市飛驒町86-1他	橿原市	歩道建設	黒崎
66-17	6 AJN-N	60m ²	4. 3. 23 ~3. 31	橿原市膳大町サイ田 659-3	関本淳子	住宅建設	佐伯
69東区	6 AJL-E・F	620m ²	4. 6. 8 ~7. 29	橿原市四分町294他	橿原市	団地建設	島田 深澤
69西区	6 AJL-F	820m ²	4. 8. 6 ~10. 7	橿原市四分町295他	橿原市	同地建替	深澤 島田
70	6 AJF-T・U	750m ²	4. 9. 30 ~11. 27	橿原市醍醐町蔭田5-6	国有地	計画調査	黒崎
69-1	6 AJQ-F	72m ²	4. 4. 13 ~4. 16	橿原市醍醐町字長谷川	大西勝則	住宅建設	橋本
69-2	6 AJE-Q	24m ²	4. 4. 24 ~5. 1	橿原市醍醐町178-2	森田弘	納屋建設	橋本
69-3	6 AJD-H	12m ²	4. 5. 19 ~5. 20	橿原市木之本町89-1	飯田寿美	住宅建設	島田
69-4	6 AJH-Q	95m ²	4. 8. 5 ~8. 25	橿原市飛驒町67-1他	橿原市	歩道建設	黒崎
69-5	6 AJP-R	60m ²	4. 8. 27 ~9. 3	橿原市醍醐町272-1	森田弘	土地造成	黒崎
69-6	6 AJH-P	4m ²	4. 9. 16	橿原市飛驒町89-2	米田恵子	住宅建設	黒崎
69-7	6 AJH-P	7m ²	4. 9. 16 ~9. 17	橿原市飛驒町89-7	松井延枝	住宅建設	黒崎
69-8	6 AJH-P	4m ²	4. 9. 16	橿原市飛驒町89-6	関淳	住宅建設	黒崎
69-9	6 AJM-A・B・C	580m ²	4. 10. 13 ~12. 2	橿原市飛驒町・四分町	奈良県	道路建設	深澤
69-10	6 AJP-R 6 AJQ-C	42m ²	4. 11. 9 ~11. 13	橿原市醍醐町	奈良県	歩道建設	佐伯
69-11	6 AMF-B	230m ²	4. 11. 17 ~12. 7	橿原市南浦町・南山町	橿原市	道路拡幅	安田
69-12※	6 AJL-E・F	729m ²	4. 12. 3 ~5. 4. 21	橿原市四分町・櫛手町	奈良県	道路建設	

69-13番	6AMH-J・Q	850m ²	4. 12. 8 ~5. 3. 15	明日香村雷字稻葉綱手・ 竹ノ花	奈良県	道路建設 街丘北方第3次	
69-14番	6AJD-H	35m ²	5. 2. 25 ~3. 2	橿原市木之町89-1	飯田寿美	住宅建設	
69-15番	6AJG-T	230m ²	5. 3. 16 ~4. 15	橿原市四分町294他	橿原市	同地建替	
石神遺跡 第11次	6AMID-U	680m ²	4. 7. 8 ~12. 22	明日香村飛鳥字唐木 215-1・227-1	明日香村	計画調査	山本
山田道第5次	6AMH-F	440m ²	4. 8. 10 ~9. 28	明日香村雷～奥山	奈良県	道路建設	安田
坂田寺第8次	5BST M	330m ²	4. 4. 7 ~7. 23	明日香村祝戸21-2	山本弘次 ・雅宏	住宅建設	西口
飛鳥寺 1992-1次	5BAS-T	270m ²	4. 7. 6 ~9. 10	明日香村飛鳥51-1	大島昌司	住宅建設	伊藤
小畠田宮 1992-1次	5AOH-I	18m ²	4. 9. 25 ~10. 1	明日香村豊浦15-1-3	古田繁雄	納屋建設	黒崎
飛鳥寺南方遺跡 第1次	5AKB-B	60m ²	4. 12. 1 ~12. 14	明日香村飛鳥字蔵ノ下	奈良県	下水道建設	大脇
飛鳥寺南方遺跡 第2次	5AKB-B	90m ²	5. 1. 12 ~2. 4	明日香村飛鳥字蔵ノ下	奈良県	下水道建設	大脇
飛鳥寺南方遺跡 第3次	5AKB-B	155m ²	5. 2. 15 ~3. 10	明日香村飛鳥字蔵ノ下	奈良県	下水道建設	大脇
奥山久米寺跡 1992-1次	5BOQ-N	25m ²	5. 2. 8 ~2. 12	明日香村奥山字西垣内 671	米田誠宏	住宅改築	
本薬師寺 1991-1次	6BMY-C	22m ²	4. 3. 10 ~3. 27	橿原市城殿町285・286	城殿区共有 北村正実	計画調査	安田
本薬師寺 1992-1次	6BMY-C	450m ²	5. 2. 25 ~4. 15	橿原市城殿町282・283	西田佐芋	計画調査	

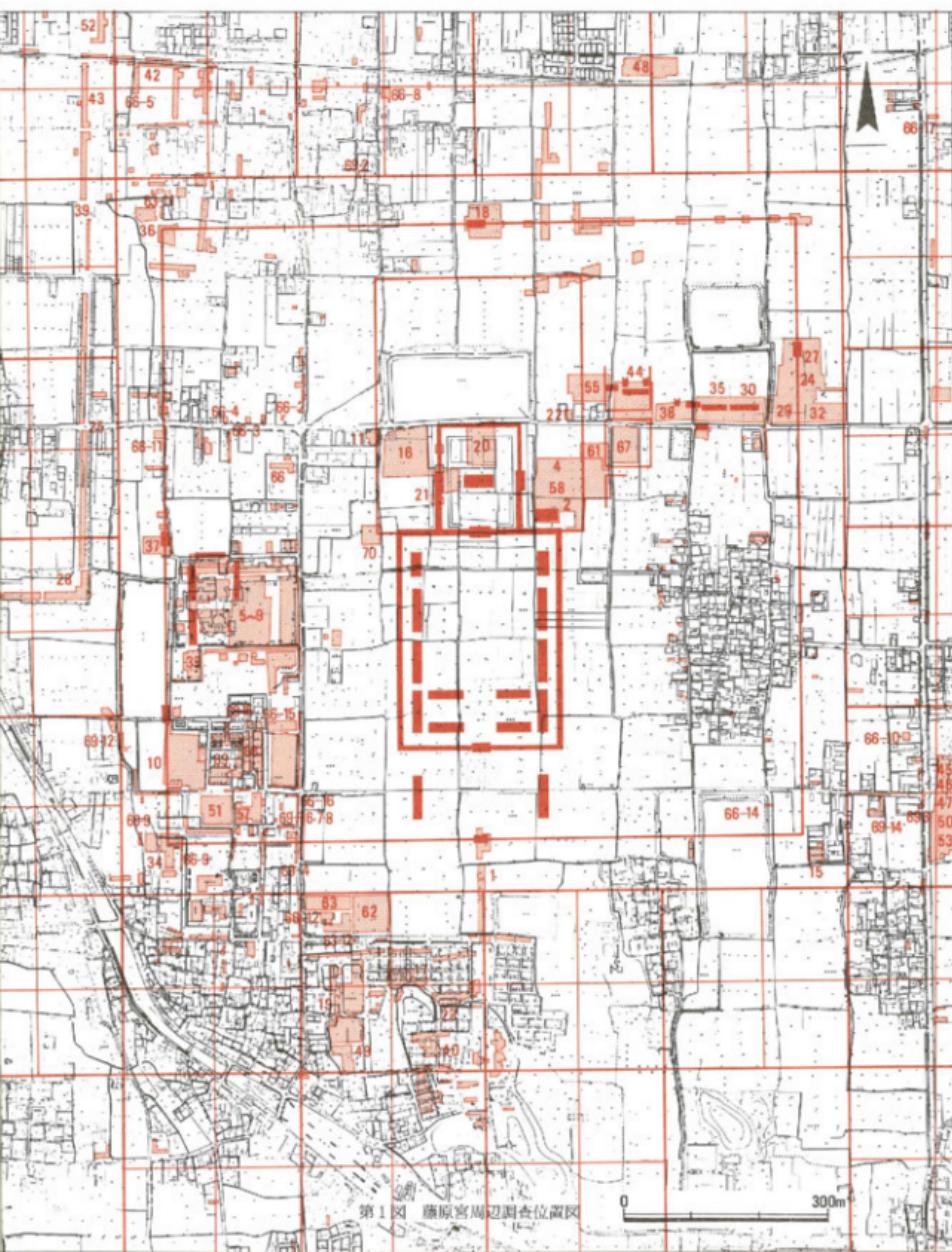
凡　　例

- 本書は奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、原則として平成四年一月から同年十二月までに行なった藤原宮跡・藤原京跡および飛鳥地域での発掘調査の概要報告である。各調査の報告は、原則として各現場の担当者が行った。
- 発掘調査地一覧には、平成四年度の調査地をすべて示した。
- 発掘遺構図に用いた座標は、平面直角座標第VI座標系による座標値であり、遺構図では「-」符号を省略している。高さはすべて海拔高で示す。
- 本文中では『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』を『報告』、また『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』を『概報』と略記した。
- 遺構図には、個々に遺跡あるいは土地(割りごとの)連番号を付け、番号の前に、SA(集地・辦)、SB(建物)、SC(回廊)、SD(溝・濠)、SE(井戸)、SF(道路)、SK(土坑)、SS(足場)、SX(その他)などの分類記号を付けた。
- 7世紀の土器の時期区分は飛鳥I～Vと表す。詳しくは『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II P. 92～100を参照されたい。
- 本書の編集は樋木義則が担当し、伊藤武が助けた。

表紙カット：藤原宮第69-9次調査出土土塙

裏表紙カット：坂田寺第8次調査出土土製小仏像

I、藤原宮の調査



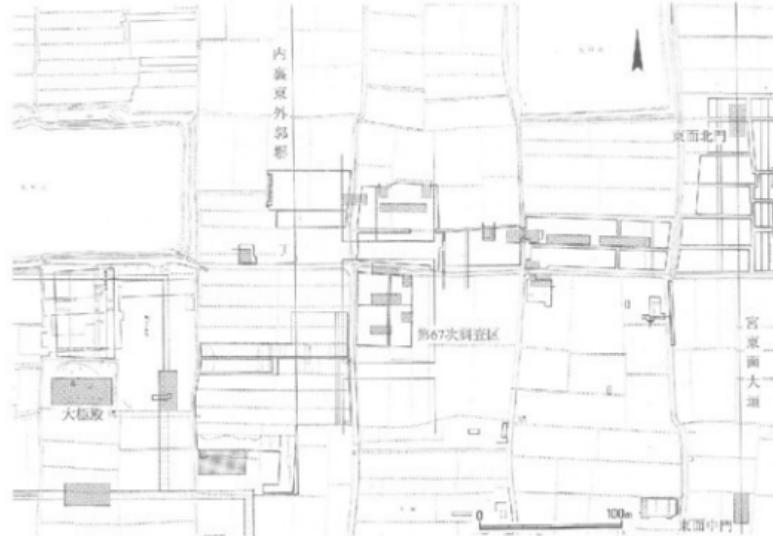
1、東方官衙地区の調査（第67次）

（平成三年四月～五年四月）

当調査部では、昭和六十二年度から内裏に東接した官衙の実態を把握すべく順次計画的に調査を進めてきた。その結果、本調査地を含む内裏の東に接した官衙地区には、掘立柱塀で方形に区画された同規模の官衙が南北に4ブロック配置されていたこと、一つの官衙ブロックは東西約66m、南北約72mの規模であること、各ブロック間には、幅約13mの道路が存在していたことなどが判明している。今回の調査地は藤原宮大極殿の東方約200mにある2筆の水田であり、これら4つの官衙ブロックのうち、南から二つ目の区画を対象とし、区画内の建物配置の把握を主目的として実施した。

遺構

層序 調査区の基本的な層序は、南部では耕土・床土・暗褐色砂質土・淡黄褐色微砂となり、遺構検出面は、地表下0.3m前後にある暗褐色砂質土層上面である



第2図 藤原宮東方官衙地区調査位置図

る。一方これに対して北部では、耕土・床土・灰褐色土・明灰褐色土・砂礫混り茶褐色土・淡黄褐色微砂の順になり、地表下0.6~0.7mにある砂礫混り茶褐色土層上面が遺構検出面となる。

遺構の時期 検出した遺構は四条々間路、掘立柱建物17棟、掘立柱塀4条、石敷、石組溝5条、素掘溝10条、井戸1基のほかに土坑、小柱穴、東西・南北方向に掘られた小溝多数がある。これらの遺構は時期のうえで、藤原宮期(宮直前期を含む)、藤原宮期以前、藤原宮期以後に大別されるが、後述のように、宮期以後の石敷やその痕跡が検出され、その保存のため、それらの直下にある他の遺構については充分な調査を行っていない。

藤原宮期の遺構 藤原宮直前期と宮期に別けられる。

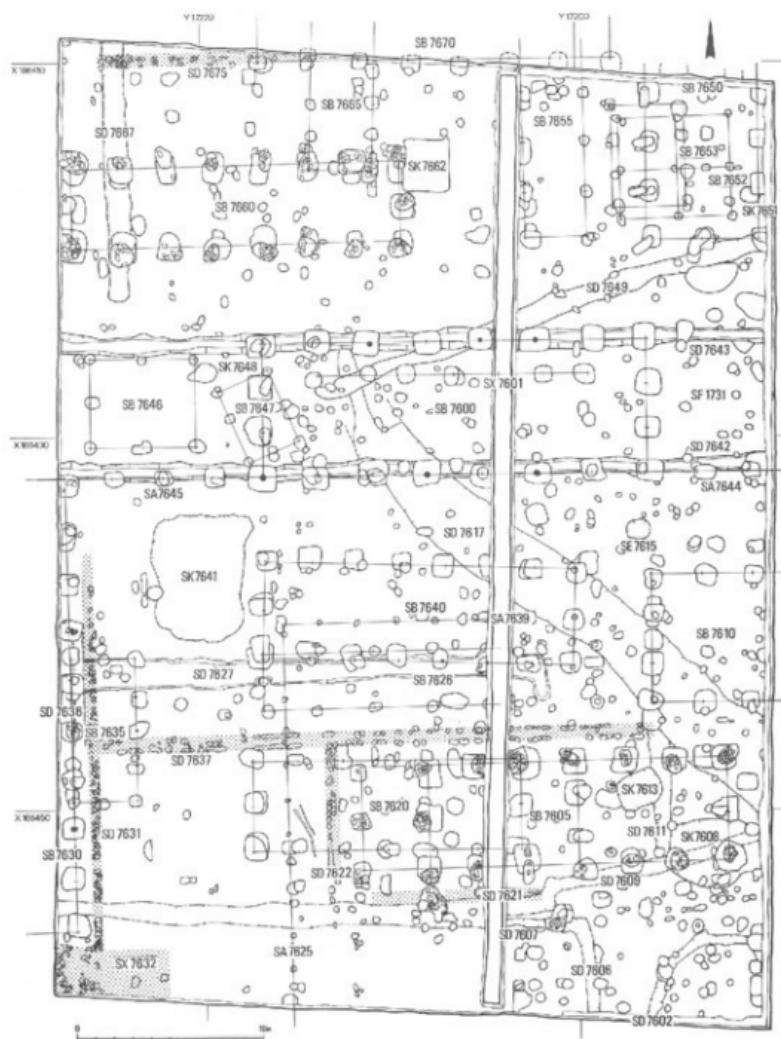
藤原宮直前期の遺構には宮内先行条坊である四条々間路SF1731およびその両側溝SD7642・7643、掘立柱建物SB7626・7635、土坑SK7608がある。

四条々間路は北と南に素掘りの側溝SD7643・7642を伴う。路面幅約6m、側溝心々距離は6.9mである。南側溝SD7642は幅0.8mで、深さは最大0.5mあり、38m分検出した。掘立柱建物2棟は調査区西南部にある。SB7626は桁行5間以上、梁間2間の東西棟で、東妻柱列は未検出である。柱間寸法は桁行が10尺、梁間は5尺等間である。SB7635は南北棟で東妻柱列の柱筋をSB7626の北側柱列と揃えている。柱間寸法は梁間は1.7m等間、桁行は北端間と3間目が2.1m、残りが

	建 物	棟 方 向	桁 行・総 長	梁間・總長
藤 原 宮 直 前 期	SB7626	東西棟	5間以上・50尺以上	2間・10尺
	SB7635	南北棟	4間・25尺	2間・11尺
藤 原 宮 期	SB7600	東西棟	7間・70尺	3間・24尺
	SB7610	東西棟	3間以上・27尺以上	3間・23尺
	SB7620	東西棟	6間・48尺	2間・16尺
	SB7650	南北棟	4間以上・36尺以上	2間・20尺
	SB7670	東西棟	7間・63尺	
藤 原 宮 期 以 後	SB7640	東西棟	7間・56尺	2間・16尺
	SB7605	東西棟	6間1庇・54尺+12尺	2間・18尺
	SB7630	南北棟	9間・81尺	
	SB7655	南北棟	3間以上・27尺	1間・11尺
	SB7660	東西棟	7間・59.5尺	2間・14尺

第1表 主要建物規模一覧

単位尺: 29.6cm



第3図 第67次調査遺構実測図 (1:300)

1.7mとなる。土坑SK7608は調査区の東南隅近くにある東西4.5m、南北3.5mの不整形な土坑で、深さは0.2mである。埋土からは飛鳥IVの土器が出土した。

藤原宮期の遺構には掘立柱建物SB7600・7610・7620・7650・7670、掘立柱塀SA7644・7645、土坑SK7641・7651がある。この時期の建物は先述の四条々間路の側溝を埋めたてて道路を廃したのちに建てられている。東西棟建物SB7600は旧路面上でしかも官衙ブロックのほぼ中央に位置しており、その規模の上からも、この区画内の正殿と考えられる。そしてSB7600を中心として、その東妻柱列と柱筋を揃えて東南方にSB7610、東北方にSB7650、西妻柱列に柱筋を揃えて南方にSB7620、北方にSB7670を各々等距離で配置する。さらにSB7600の南側柱列の東西にとりつく掘立柱塀SA7644・7645によって、区画内は北と南に二分されるなど、極めて規格性の高い建物配置がなされている。

正殿SB7600は桁行7間、梁間3間の東西棟で、柱間寸法は桁行は10尺、梁間は8尺等間である。柱掘形は一辺1.3～1.5mと大きく、深さは0.8m前後である。直径0.3mの柱根が6カ所に残る。南側柱列の西から4番目の柱がこの区画の中心点となる。建物内では北側柱列と平行に6間分の柱穴SX7601が存在することから、この建物は床張りであった可能性が高い。SB7600の南側柱列の東と西には掘立柱塀SA7644とSA7645とがとりつく。SA7644は2間分、SA7645は4間分を検出した。柱掘形は一辺1m前後であり、SB7600の掘形に比して小ぶりとなる。柱間寸法はともに9尺等間である。なおSA7645の西端の柱穴は南北棟建物SB7630の柱穴によって完全に壊されている。SB7600の南側柱列から5.4m南にある東西棟建物SB7610は梁間3間、桁行3間以上の規模である。柱間寸法は桁行が9尺等間で、梁間は中央間が9尺、両端間が7尺である。SB7600の北側柱列から北5.4mにある南北棟建物SB7650は、柱がいずれも外方に抜き取られている。柱間寸法は桁行は9尺等間、梁間は10尺等間である。東側柱列の北から3番目の柱掘形は土坑SK7651を壊して掘られている。土坑からは飛鳥Vの土器及び瓦が出土した。

東西棟建物SB7620はSB7600の南側柱列の南約15mにある。西妻柱列がSB7600の西妻柱列の南延長線上よりも0.6mほど西方に位置しており、柱筋は必ずしも揃っていない。柱間寸法は桁行、梁間とともに8尺等間で、柱穴の一部はSB7605

の柱穴により壊されている。SB7670はSB7600の北側柱列の北方約15mの位置にあり、大半は現在の市道の下にある。掘立柱塀の可能性も残るが西に延びず、また、市道を挟んだ北方の第41次調査区でも関連する柱穴を検出していないので、東西棟建物の南側柱列と推定される。柱間寸法は9尺等間で東半部の3個の柱穴については調査区壁面で確認し、柱穴からは飛鳥Vの土器が出土した。また、西端柱穴は東西石組溝SD7675下に位置し、他の柱穴の一部は南北棟建物SB7665の柱穴によって壊されている。なおSB7665は後述するSB7660よりも古い建物で、藤原宮期もしくは奈良時代と考えられる。

上坑SK7641はSB7600の南西にある。南北約7m、東西約5m、深さは約0.5mである。堆積層は3層からなり、中層は燃えさしの木片を含む炭化物層である。木箇とともに多量の上師器、須恵器、少量の瓦が出土した。土坑SK7651は先述したようにSB7650の柱穴と重複するもので、本来の平面形は梢円形を呈していたものであろう。深さは0.3mである。

藤原宮期以前の遺構 弥生時代、古墳時代、7世紀中頃から後半にかけての遺構に細分される。

弥生時代の遺構には斜行溝SD7617と小柱穴がある。斜行溝SD7617は幅約3.5m、深さ1.0mの規模で、堆積土からは弥生時代後期の土器が出土した。

古墳時代の遺構には掘立柱建物SB7647・7653、素掘溝SD7602・7649、井戸SE7615のほかに小柱穴がある。掘立柱建物SB7647は北で西に約25度振れる方位をとる。桁行2間、梁間2間の小規模な建物である。SB7653は調査区東北部にある南北棟建物で桁行3間、梁間1間の規模となる。柱掘形からは古墳時代前後の土器が出土した。井戸SE7615はSB7610の北西にある素掘りの井戸で古墳時代前期の土師器が出土した。SD7602は調査区南東隅にある弧状の素掘り溝で、幅は0.5m、深さは0.4mである。SD7649は幅約1m、深さ0.2mの斜行溝である。いずれの溝からも古墳時代中期の土器が出土した。

7世紀中頃から後半にかけての遺構には素掘り溝SD7606・7607・7609・7611・7627・7636・7667がある。これらの溝からは飛鳥II～IVの土器が出土しており、藤原宮造営前における当地域での土地利用の実態を解明する手掛りを供するも

のと考えられる。

藤原宮期以後の遺構 出土遺物が少なく、遺構の年代の決め手を欠くが、建物方位など遺構の特徴から、A・B・Cの3期に分けることができる。

A期の遺構は建物方位が北で東に振れるもので、掘立柱建物SB7640がある。柱間寸法は桁行、梁間ともに8尺等間である。調査区付近でこのような方位をとる建物は知られていないが、藤原宮の東南隅に接する左京六条三坊の調査(『概報』16・17)で検出された奈良時代の建物群が、北で東に3~8度振れることが知られており、A期の建物は奈良時代に属する可能性が高い。

B期の遺構は建物方位が北で西に振れ、柱抜き取り穴に入頭大の玉石を詰め込む特徴がある。掘立柱建物SB7605・7630・7655・7660、石敷SX7632、石組溝SD7621・7622・7631・7637・7675がある。

SB7605は桁行6間、梁間2間の身舎に西庇のつく建物で身舎の中央には間仕切がある。柱掘形は一辺1.0~1.5mと大規模で、柱抜き取り穴には多量の玉石が詰められている。柱穴寸法は桁行・梁間ともに9尺等間であるが、西庇の出だけは12尺と長い。この建物の東を除く三方には雨落溝である石組溝SD7621・7622・7637が配される。溝の側石や底石の大半は抜き取られているが、北雨落溝SD7637は水田畔下に良好な状態で残っている。それによると、石組溝の構造は側石を一石立て並べ、その間に底石を敷いただけの簡単なもので、内法幅0.4m、深さは0.1mである。建物柱心から雨落溝までの距離は南と北が1.8m、西が1.5mとなる。建物SB7605の西には南北棟SB7630がある。柱間寸法は9尺等間である。この建物の柱筋から1.2m東に雨落溝SD7631が設置される。雨落溝は石組溝で、幅0.4mで2列に敷いた底石のみが残る。北方の建物SB7660は桁行7間、梁間2間の東西棟で、柱間寸法は桁行が8.5尺等間、梁間が7尺等間である。SB7605と同様に柱抜き取り穴には多量の玉石が詰められている。SB7660の東には南妻柱列をSB7660の南側柱列と揃えた南北棟SB7655がある。

石組溝SD7675は調査区北西部にある。側石と底石の一部が残り、深さ0.1m、幅は0.4mに復原できる。この溝は他の石組溝と同様に雨落溝と推定されるが、その本体は調査区外の市道下となる。石敷SX7632は調査区の西南隅に東西6m、

南北2mの範囲で遺存している。調査区西半のSD7637以南では石が敷かれている間に石から沁み出たマンガンや鉄分が沈着して「ドーナツ」状に茶褐色に変色した石敷の痕跡（写真2）が認められることやさらに南方の土坑SK7641上にも石敷の一部が遺存することから、この時期の建物周辺は全て石で舗装されていた可能性が高い。

B期の年代については、柱掘形が大規模なことから藤原宮期まで遡る可能性は残されている。しかし宮期の土坑を覆って石敷が遺存することやSB7605の底が広底であること、さらに周辺の調査で奈良・平安時代の石組溝や暗渠が検出されていることから、ここでは藤原宮期以降の時期と考えておきたい。その廃絶時期については、SD7637の側石抜き取り跡から出土した黒色土器によって10世紀代と考えられる。

C期の遺構は10世紀以降のもので、掘立柱建物SB7646・7652、掘立柱塀SA7625・7639、土坑SK7613・7662がある。SB7646は東妻柱が明らかでない。SB7652は調査区東北隅にある縦柱建物である。SA7652・7639は直径0.2m弱の柱掘形をもつ塀で、柱間寸法は5~8尺と不揃いである。このほかに東西・南北方向に掘られた多数の小溝がある。小溝のうち南北方向の小溝には、石敷の石が多数埋め込まれていた。平安時代以降のものである。

遺物

木簡、土器、土製品、瓦類、金属製品、錢貨、石製品がある。

木簡は土坑SK7641から13点（内削屑1点）が出上した。判読できる木簡6点は全て荷札で、そのうち4点は隠岐國のものである。また他の1点も含めていずれも郡一里の表記をもち、大宝令制下で作成されたものである。

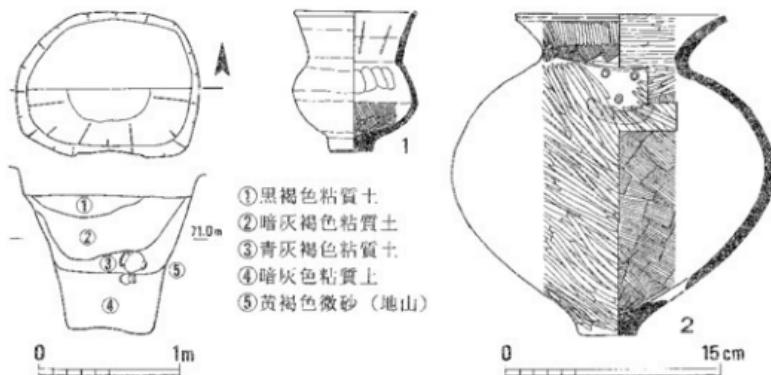
土器は弥生時代から中世に至る時期のものがあるが、ここでは庄内式土器の良好な資料である井戸SE7615出土の土器を図示した（第4図～第10図）。SE7615は湧水層を掘り込んだ井戸で（第4図）、下層③・④から完形土器が、また殆ど土器を含まない中層②を挟んで、上層①から多量の土器が出上した（第5図～第10図）。このうち口縁部か頸部のあるものでは第5図1・2・4を除く全てが一周の1/4以上を残していた。土製品には土馬、輪羽口、とりべ、土錘、玉がある。

瓦類は軒丸瓦6点、軒平瓦7点、丸瓦・半瓦のほか熨斗瓦が1点出土したが、これまでの東方官衙地区同様、出土量は少ない。粘土紐巻き付け技法のものが大半である。金属製品には鉄釘、古墳時代の耳環2点や奈良時代の錢貨「神功開寶」1点がある。石製品には砥石、石鎌、石庖」、古墳時代の石剣がある。

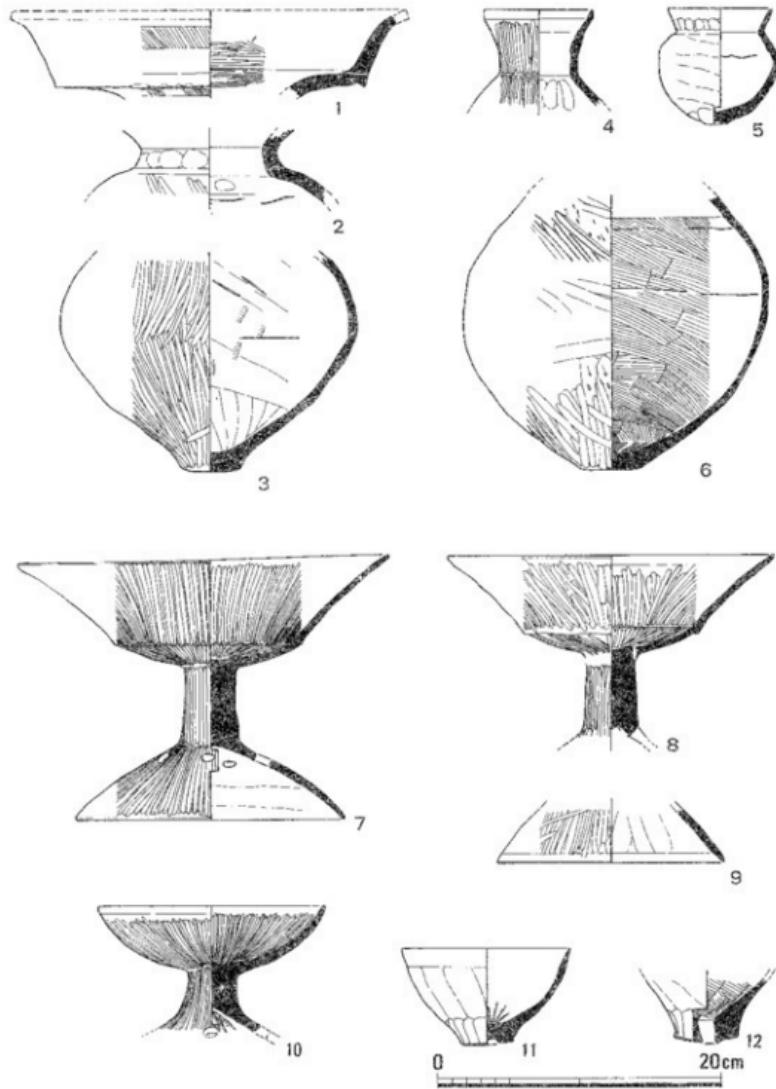
まとめ

今回の調査成果としては、まず官衙ブロック内の建物配置についての新知見を得たことが挙げられる。堀で区画された一つの官衙ブロックのはば中央に東西棟の正殿を置き、その両翼から延びる掘立柱堀によって南側に前庭を構成する。このような例は藤原宮では初見である。従来、藤原宮の官衙では長大な建物を直列または並列に配置することが特徴とされてきたが、今回の成果はそれらの知見とは異なる。こうした違いは官衙の性格や使用法を反映したものと理解され、藤原宮の官衙の建物配置を考える上で新たな資料を提供した。

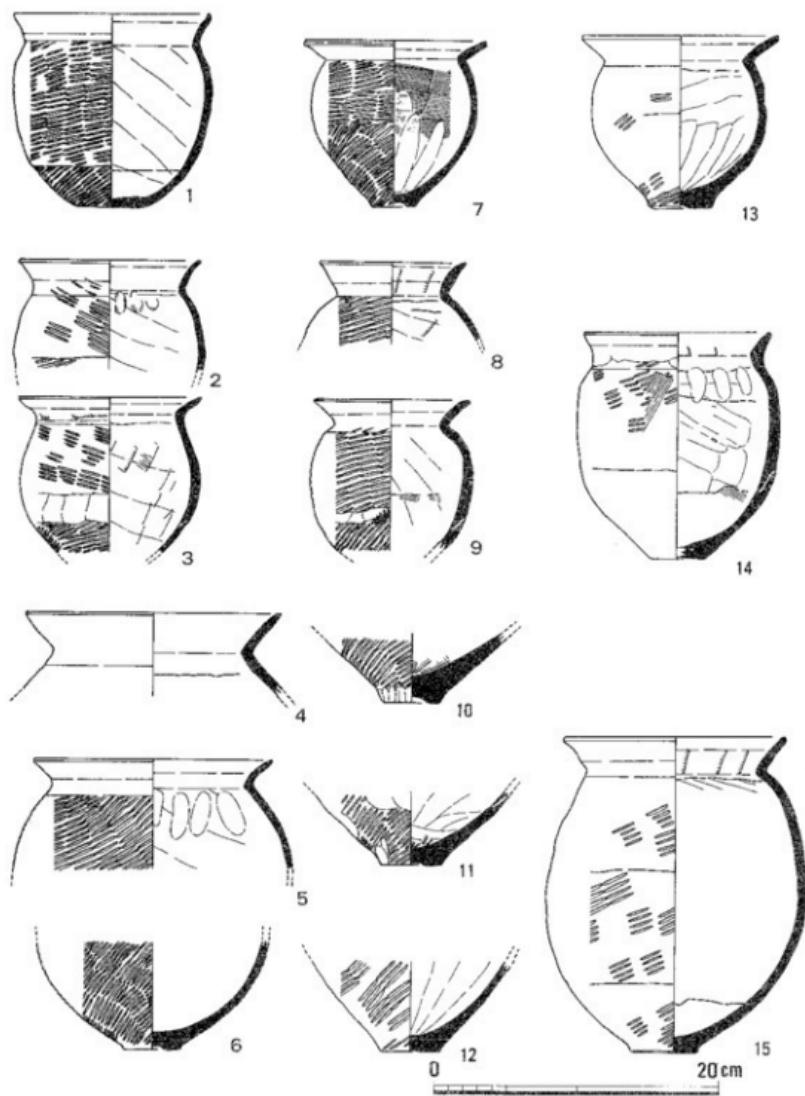
次いで石敷を伴う建物群の存在を確認したことである。これらの遺構の年代は石敷で覆われたSK7641の出土木簡から、大宝令施行以後と考えられる。年代を含めてその性格の検討については、次年度に同じ官衙ブロック南半の調査を計画しており、今後の調査の進展を待ちたい。



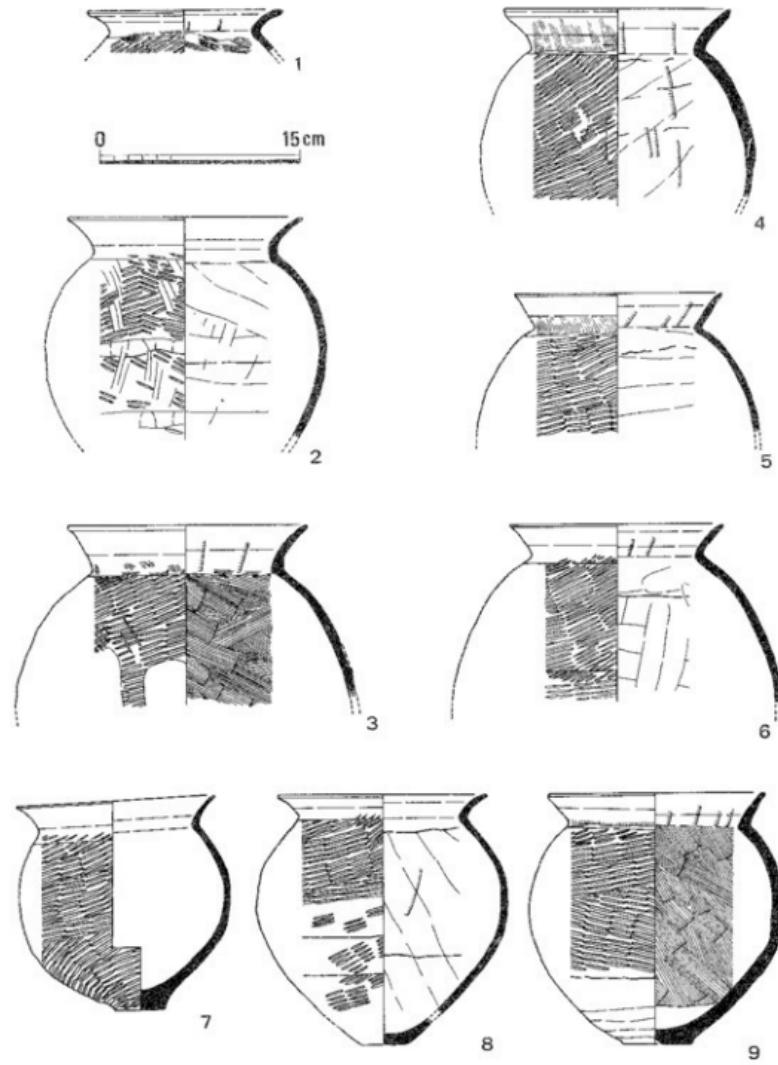
第4図 SE7615遺構図・SE7615下層出土土器



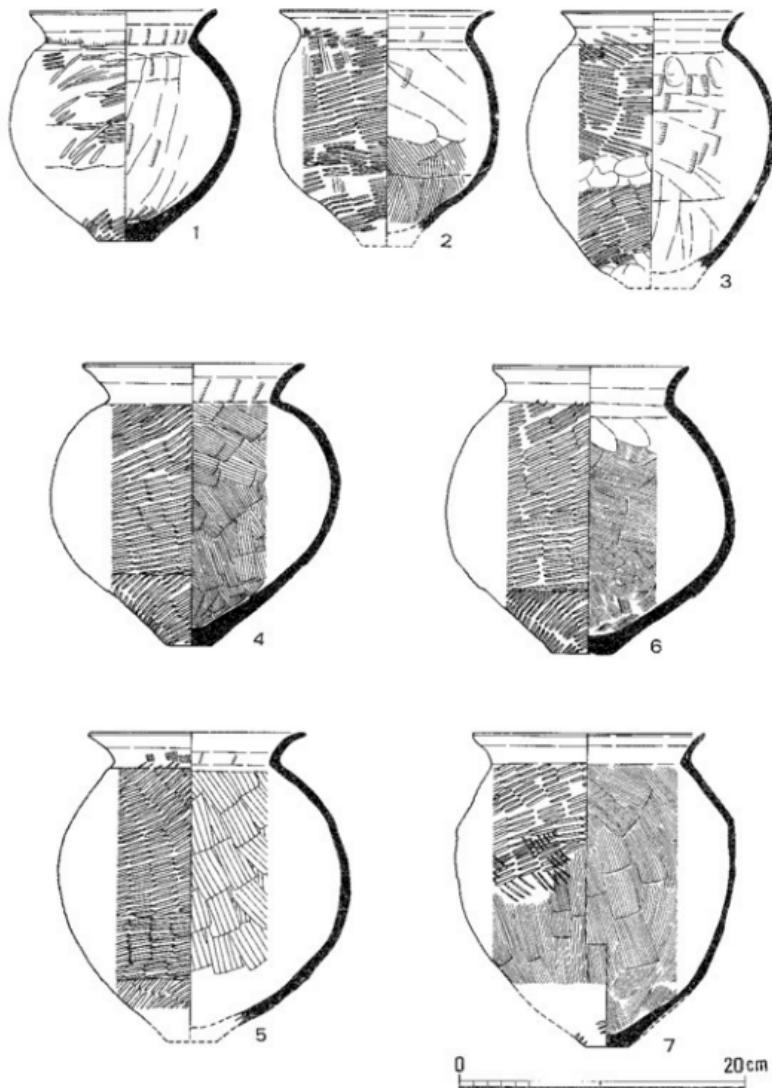
第5図 SE7615上層出土土器①



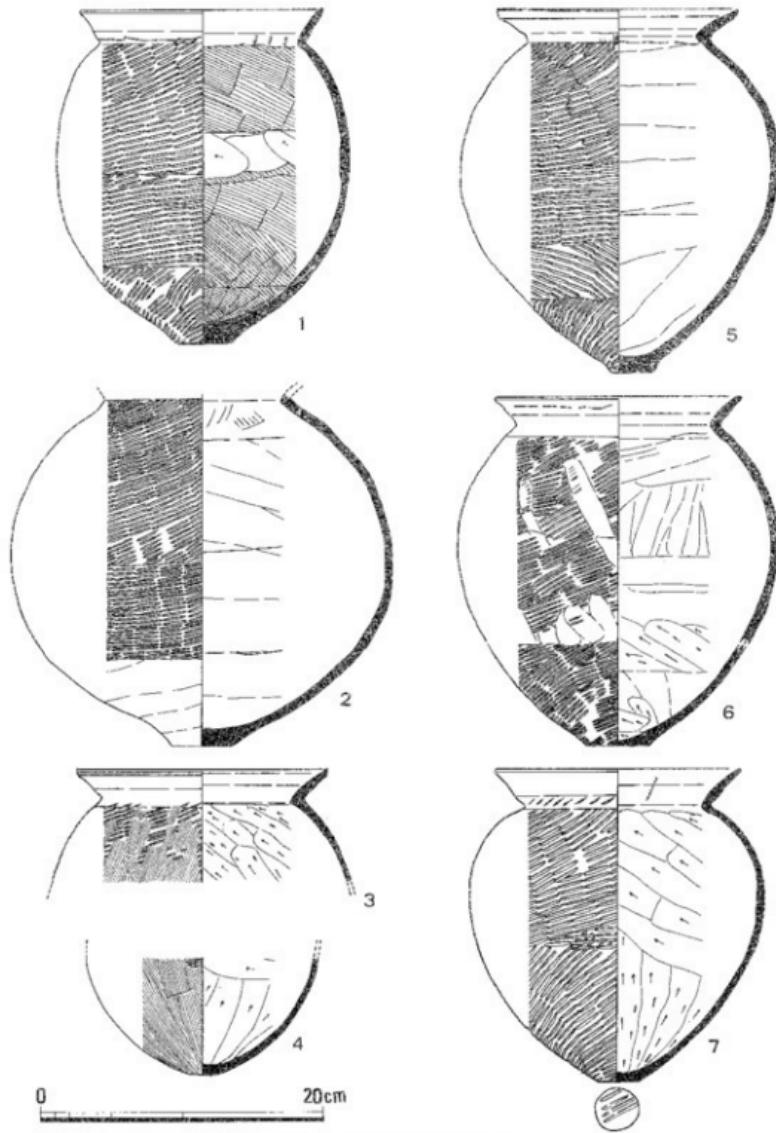
第6図 SE7615上層出土土器②



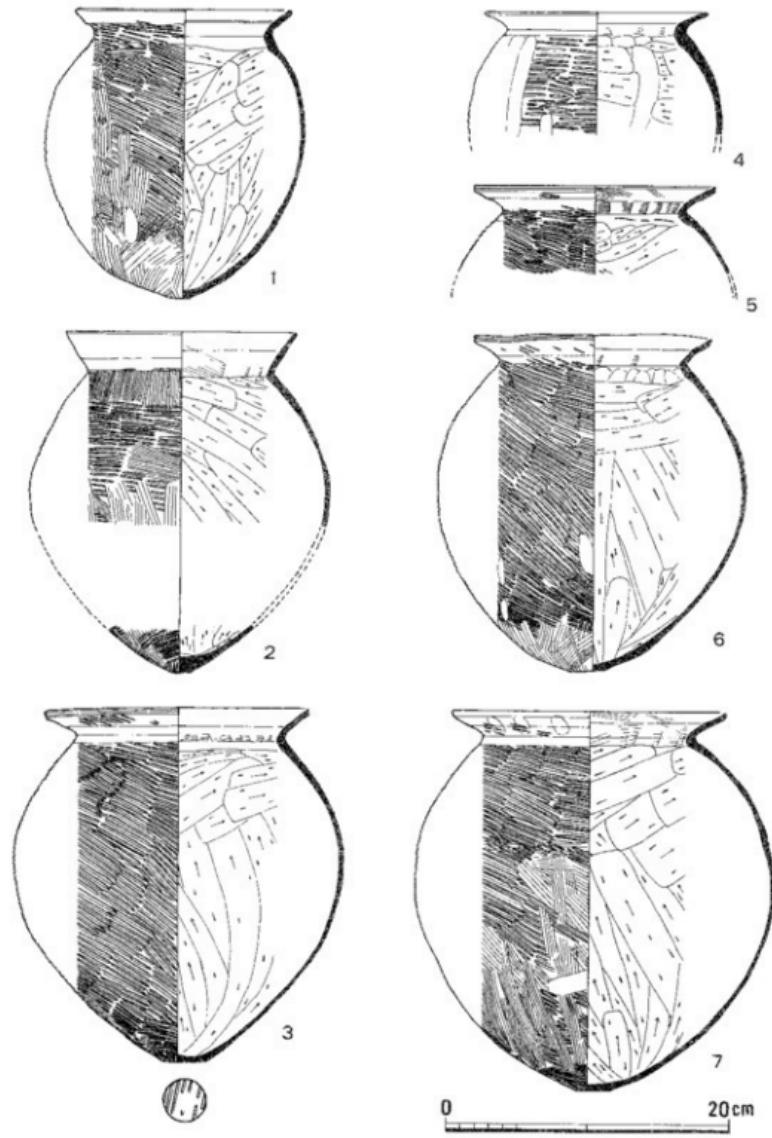
第7図 SF7615上層出土土器③



第8図 SK7615上層出土土器④



第9図 SE7615上層山土上器⑤



第10図 SE7615上層出土七土器⑥

2、内裏西外郭地区の調査（第70次）

（平成四年九～十一月）

この調査は、藤原宮の内裏西外郭地区の様子を明らかにするために実施した。この地域は、かつて第11・16次調査として昭和四十九年に調査（『概報』5・6）して以降、ほとんど発掘調査の歴が入らなかったところでもある。

内裏外郭地区を区画する施設が一本柱塀であることは、昭和四十年代前半に行われた国道バイパス工事に伴う奈良県教育委員会の調査ですでに判明していた（『藤原宮』奈良県 昭和四十四年）。その後、当研究所が実施した第2・4・11・55・58・61次の各調査で外郭の東面および西面の塀を確認し（『報告』I・III、『概報』5・18・20・21）、それから外郭塀が柱間約3m（10尺）の掘立柱塀であること、塀で区画された内裏外郭の東西幅が303mであることなどが判明した。また北面の外郭塀は奈良県の調査で既に確認されていたが、南面は未確認で、内裏外郭の南北規模については不明のままであった。このため今回の調査では、外郭塀西南隅の確認を目的として東西28.5m、南北29.5mの調査区を設定した。

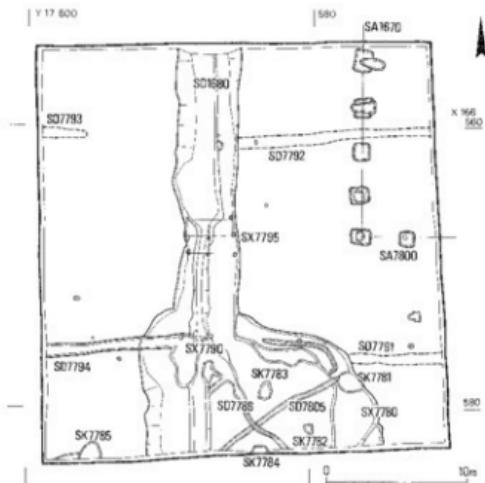
層序 調査区の基本的な土層は、上から耕上、床土、灰褐色土の順で、地表下0.35～0.4mでやや黒味をおびた茶褐色土の上面に至る。藤原宮期の遺構や中世の小溝群はこの暗茶褐色土上面で検出した。

遺構 確認した遺構には、掘立柱塀、南北溝、東西溝、斜行溝、堰、橋、池状遺構、土坑などがあり、この他に水田耕作に伴うとみられる中世の小溝が多数ある。

藤原宮期の遺構 南北方向の掘立柱塀SA1670は内裏外郭の西面を限る一本柱塀である。柱間は約3m（10尺）で、今回4間分を確認した。柱の掘形は一辺1.2mの方形で、柱は抜き取られていた。この塀が東へ折れ、内裏外郭の南面を限る東西方向の掘立柱塀SA7800となる。この塀は1間分を検出しただけだが、柱間寸法や柱穴の形状など西外郭塀と同様である。この2条の塀SA1670とSA7800がL字形に接続するところが、内裏外郭の西南隅部にあたる。

調査区の中央を北に流れる南北溝SD1680は「西大溝」と呼ばれる宮の基幹排水路で、幅は4m前後あり、深さは1mを超える。SA1670の西約9mに東岸が位置し、内裏東外郭塙の東に設けられた「東大溝」SD105に対置される大溝である。溝は二重に掘られており、上段の溝は幅4m前後、深さ0.4m、下段の溝は幅1.5m前後、深さ0.6~0.9mの規模を持つ。溝の中ほどには後述する堰SX7790が作られており、それを境に上流（南）側と下流（北）側とで西大溝の状況は大きく異なる。すなわち堰から下流側は、上記の規格ではほぼ直線的に流れるのに対し、上流側は上段溝の両岸が東西に大きく広がり、池の如き様相を呈する。

堰の下流側約8mの間、下段の溝は一定の規模（幅1m、深さ0.6m）を保って直線的に流れるが、それより下流側は逆に深い溜りとなり、溝幅も3mを超える。また堰より上流側にある池状遺構SX7780は西大溝の上段の岸が広がったもので、とくに東岸の広がりが著しい。東西16m、南北10m以上の規模をもつが、深さは0.2~0.4mほどである。池状遺構の中には西大溝の本流である幅1m、深さ0.4mの溝が明確にたどれ、さらに東岸の広がりに対応して東南から西



第11図 第70次調査遺構実測図(1:400)

北に流れる幅0.6m、深さ0.2mの斜行溝SD7786がある。

堰SX7790は、西大溝を横断するよう2本の丸太（径12cm）を0.3mの間隔で立て、それに十数個の石を絡ませて配列した遺構である。堰の周辺での下段溝の幅は約1mで、2本の丸太はその東岸に偏して存

在する。このことから現状で残る2本の丸太や配石は、下段の溝を意識して構築したものであろうが、池状の広がりは上段の溝岸と関連しているから、本来堰はもう少し高く、それだけ大きな水圧に耐えうる構築物であったはずである。現状からその具体的な構造を復元することは難しいが、下流側に散乱した石などを勘案すると、堰は粘土をmajieda石積みで、2本の丸太は樋門に関連するものかも知れない。

西大溝には橋SX7795が架けられていた。東西2間、南北2間の据立柱の橋脚跡を検出したが、西北部分は深い溜りとなり確認できなかった。東西3.2m、南北2.6mの橋脚が復元できるが、全体に柱間・柱筋は不揃いである。

堰の西方には幅0.8m、深さ0.2mの素掘りの東西溝SD7794がある。溝底のレベルからすると流水は東へ流れしており、堰の上流側で西大溝へ合流したようだ。調査区西南隅の上坑SK7785や、池状遺構内に点在する上坑状の窪みSK7781～7784からは、多量の瓦類が出土している。

藤原宮期以前の遺構 四条大路に相当する宮内先行条坊の側溝を検出した。北側溝SD7792・7793は幅0.5m～1m、深さ0.1mで、南側溝SD7791は幅0.7m、深さ0.05mである。いずれも痕跡的に残存していた。なお南側溝の西半部分は東西溝SD7794と重複しており、確認できなかった。両側溝の心々距離は約16mで、その中心は内裏南外郭堀の位置とほぼ一致する。また斜行溝SD7805は、池状遺構の底を東北から西南に走る幅0.4m、深さ0.15mの素掘りの溝である。宮期の斜行溝SD7786と重複し、それより古いことは判るが詳細な時期は不明である。

出土遺物 遺物には木簡、瓦類、土器類があり、それらは主として西大溝や池状遺構から出土した。

木簡は西大溝の下層から11点が出土した。それらは荷札や釘に関する文書木簡などである。

瓦類には多量の丸・平瓦のほか、軒瓦、面戸瓦、熨斗瓦などがある（第2表）。軒瓦では高台・峰寺瓦窯の製品が多く、丸・平瓦は粘土紙巻き付け技法によるものが大半を占める。このような瓦の出土傾向は、大極殿・朝堂院地区や内裏

外郭地区に共通する。出土瓦のうち、広端側に長さ20cmほどの浅い顎をもった特殊な形態の平瓦があり、今回の調査区が内裏外郭塀の西南隅を含むことから、塀の入り隅部に用いられた谷樋瓦である可能性が高い。類例は平城宮内裏北外郭（平城宮第20次調査）から出土している。

土器類には土師器・須恵器の他、土馬や円面鏡、漆付着の土器などがある。この他に磁石や鉄製品、曲物底板などの木製品が少数出土している。

まとめ 内裏外郭塀のうち南面の塀を今回初めて確認した。この南面塀は宮の南北2等分の位置にあたり、宮内先行条坊の四条大路の道路心とも一致する。なおこの南面塀は東へ30mほど延びて朝堂院回廊の西北隅にとりつく。これによって内裏外郭の南北長が378mであることが判明し、内裏外郭の規模が東西303m、南北378mと確定した。

先行条坊の側溝を再利用した東西溝や西大溝に架かる橋を検出し、宮の南北

軒丸瓦		軒平瓦	
6233B	6	6561A	5
6273A	7	6641C	4
B	3	E	2
C	1	F	3
D	1		
6274Aa	1	6642A	4
Ac	2	C	2
	3		6(7)
6275A	9	6643Ab	1
B	4	B	5
D	3	C	31
H	3(22)	D	2
J	2	合計	59(61)
		軒瓦合計	112(126)
6279Ab	10		
A	5		
B	1		
	16		
		道只瓦	
6281Aa	2	面戸瓦	4
Ab	1	熨斗瓦	6
A	2	谷樋瓦	1
合計	63(65)	合計	11

2等分線上を通る宮内道路の存在が復元できた。

今回、西大溝の途中に池状の遺構を作ることが初めて確認された。堰が設けられており、貯水・排水の機能を持つ人工的な池であることは疑いないが、園池か単なる遊水池なのか、その性格については今後の上流側の調査を待つべきである。また西大溝や池状遺構の埋立に多量の瓦類が捨て込まれており、内裏外郭塀が瓦葺きであったことや、その瓦が人極殿・朝堂院地区に用いられた瓦と同様であることなどが判明した。

○ 内は種別・型式不明を含む

第2表 藤原宮第70次調査出土瓦点数

3、西方官衙地区の調査

ア、第68次西・第69次東・第69次西調査

(平成三年十二月～平成四年二月、六～十月)

藤原宮の西南隅に当たる橿原市四分町では、近年、市営団地建て替え工事が引き続いて計画・実施され、その事前調査を当調査部が担当してきた。本概報では、昨年『概報』22で報告した第68次東調査区の西方で行った第68次西・第69次東・第69次西の各調査についてまとめて報告する。まず第68次西調査は第68次東調査区の西に接する位置に東西16m、南北30mの調査区を設け、また第69次東調査は第68次西調査区の西南に接する位置に東西31m、南北51mの調査区を設け、さらに第69次西調査は第69次東調査区の西南に接する位置に東西37m、南北24mの調査区を設け、それぞれ実施した。これまで周辺で実施した調査では、藤原宮期に属する小規模な掘立柱建物や掘立柱塀、藤原宮に先行する条坊遺構を検出し、特に第59次・第68次東両調査では7世紀代の遺構の下層で、弥生時代の水田遺構、溝などを確認した(『概報』19・22)。今回の調査では、藤原宮に先行する条坊遺構の有無を確認し、藤原宮期における宮西南部の利用状況を明らかにするとともに、弥生時代集落の様相を把握することを主たる目的とした。その結果、今回設けた各調査区でも上層と下層にそれぞれ遺構が存在することを確認した。ここでは上層遺構と下層遺構とに分けて報告する。

上層遺構

各調査区における層序は、おむね上から現代の盛土・耕土・床土・暗黄灰色土の順で、上層の遺構はその下の灰褐色微砂および淡茶灰褐色微砂の上面で検出した。現在の地表からの深さは1mである。検出した遺構は掘立柱建物3棟、井戸3基、道路1条の他、柱穴・土坑などである。なお第68次西調査区西端中央寄りで検出した石組井戸は現代の井戸である。

6世紀の遺構 第68次西調査区で検出した井戸SE7430は円形の素堀りの井戸で、現状で径2.3m、深さ1.4mあり、断面はすりばち状を呈する。

藤原宮期直前の遺構 第69次西調査区で検出したSF1082は藤原宮に先行する条

坊道路で、西二坊坊間路にあたる。SD3318はその東側溝で、幅1m、深さ0.2mあり、本調査区の北方で実施した第7次調査（『報告』II）や南方で行った第51次調査（『概報』18）で検出された西二坊坊間路東側溝の延長上に位置する。一方第7・51両次調査で検出した西二坊坊間路西側溝を結ぶと、その推定線は本調査区西端で検出した南北溝SD7509の位置にくるが、この溝は西二坊坊間路東側溝に先行する溝である。従って西二坊坊間路西側溝は東側溝に比べて浅く、後世の削平を被ったために検出できなかったと考えられる。

藤原宮期の遺構 第69次東調査区北方で検出した掘立柱建物SB7730は東西棟建物で、今回はその東妻のみを確認するにとどまった。梁間は2間で7尺等間、柱掘形は一辺0.7mの隅丸方形を呈し、柱の下に偏平な石を据え礎盤とする。その南で検出したSB7722は、桁行3間以上、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。梁間全長は12尺で、桁行柱間寸法は確認できる1間では4尺である。中央部で検出したSB7720は桁行3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物で、桁行全長は16尺（中央間6尺、両端間5尺）、梁間全長は10尺（5尺等間）である。柱掘形は直径0.5～0.6mの円形で、深さは現状で0.2～0.3mと浅いが、柱根が柱掘形の下端からさらに0.3～0.4mの深さに達し、建築後に柱が沈下した状況を伺うことができる。SB7720は国上方眼方位に対して北で西に約5.5度振れている。この他にも柱穴と考えられる穴を検出したが、削平が著しく建物にまとめるには至らなかった。

第68次西調査区で検出した井戸SE7431は直径1.1m、深さ1.8mの抜き取り穴を持つ。その埋上から太納を伴った井戸枠の断片が出土したことから、SE7431は内法幅1m未満の板組の井戸であったと推定できる。第69次東調査区南方で検出したSE7700は縦板組の井戸である。井戸枠の内法寸法は東西0.47m、南北0.4mで、厚さ3cmの板4枚を縦に組み、接合部には太納を用いる。現状で深さは0.8mあり、井戸枠内最下層には小型の甕が伏せた状態で埋没していた。

下層遺構

下層遺構の調査は各調査区の内部にそれぞれ1箇所の小調査区を設定して行った。その結果、各調査区において主に弥生時代中期に属する遺構を検出した。

第68次西調査下層区 第51次調査で弥生時代後期の水田を検出した地点の西15



第12図 第68次西・第69次東・第69次西調査遺構実測図 (1 : 300)

に位置する箇所に、東西18m、南北5.5m、東半が南北7mの調査区を設けた。調査区内の層序は上から順に、淡黄灰褐色微砂・淡灰褐色粘土・黒褐色粘質土・黒褐色砂質土・黒色粘土・綠灰色粘質土（地山）である。このうち黒褐色粘質土が第51次調査区でみつかった弥生時代の水田の耕作土につながる可能性があったので、この上面で特に慎重に調査を行った。しかし畔や稻株痕のような水田に直接結びつく証拠はみつからなかった。

次に地山である綠灰色粘質土の上面で遺構検出を実施した。この上面の高さをみると、ほぼ中央部が最も高く、これに比べて調査区の東西両端は0.2mほど低くなっている。調査区全面に直径が0.2～0.5mの柱穴が分布する。調査区中央と西端にある柱穴には、直径30cmを越すヤマグワとケヤキの柱根が残っていた。これらの柱穴は弥生時代中期中葉に属する。このほかに幅0.6～1.0m、深さ0.2～0.6mの溝が多数見つかった。調査区西半の溝は北でやや西に振れているのに対して、これ以東の溝はほぼ東西方向の溝である。溝底の高さから西半の溝は北流し、東半の溝は東に流れていたとみられる。これらの溝は弥生時代中期後葉に属する。

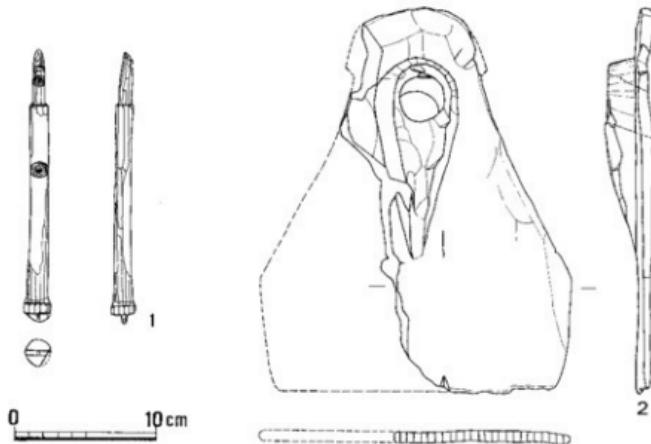
第69次東調査下層区 第68次調査下層区の南西15mに位置して設けた、東西10.5m、南北2.7mの調査区である。層序は、上から灰褐色微砂・黒褐色土・暗褐色土混黒灰色土・黒灰色土・黒灰色粘質土・黒色粘質土・黄青灰色土（地山）の順であった。調査区の中央から東にかけて、直径0.2～0.5mの柱穴が多数みつかった。また東端には幅0.6m、深さ0.1mの溝が1条ある。第68次調査区下層西端の溝と同様の規模で、また方向もよく一致している。調査区西半には直径1～1.5mの円形または不整形の上坑を重複して検出した。土坑は弥生時代中期中葉に、柱穴は同中期中・後葉に、溝は同中期後葉にそれぞれ属する。

第69次西調査下層区 第69次東調査下層区の西13mに位置する。東西・南北ともに12mの調査区の南西部に、東西4.5m、南北3mの拡張部をつけたした。さらに2.5m西に東西5m、南北3mの調査区を設けて調査した。層序は上から順に、暗褐色土①・暗褐色土②・黒褐色土・灰黄褐色砂質土（地山）である。

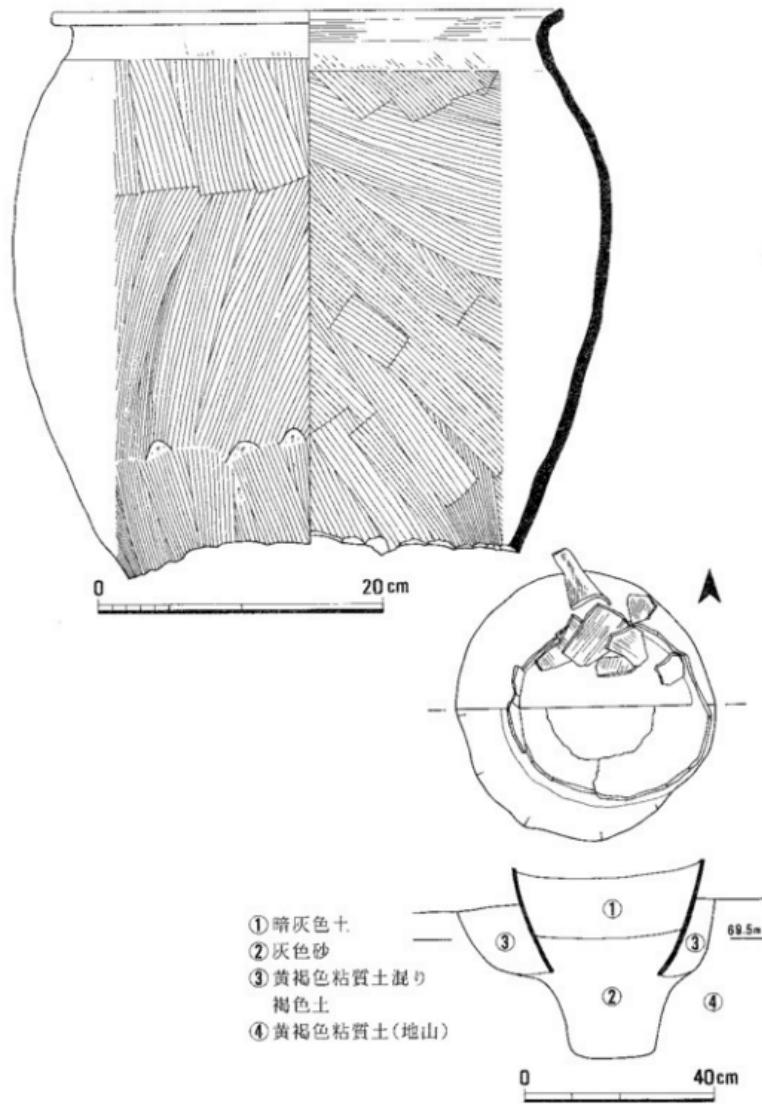
調査区の西北部で竪穴住居跡を2棟検出した。SX7572は、直径5.5mの円形堅

穴住居跡で、調査区内に全形のはば東半分があった。周壁溝は、幅0.2m、深さ0.1mである。床面は、部分的に黒褐色粘質土によって厚さ約0.1mの貼り床がなされていた。この貼り床を切って直径0.3m前後の柱穴が見つかったが、どれがこの住居跡に伴うか確定できない。北西隅にある竪穴住居跡SX7573もSX7572と同様の規模であったと思われる。時期は2棟とも弥生時代中期後葉に属する。このほか調査区の全面にわたって、直径0.2m前後の柱穴が多数みつかった。重複関係から弥生時代中期中・後葉に属すが、柱穴の大きさは竪穴住居跡のそれによく一致する。

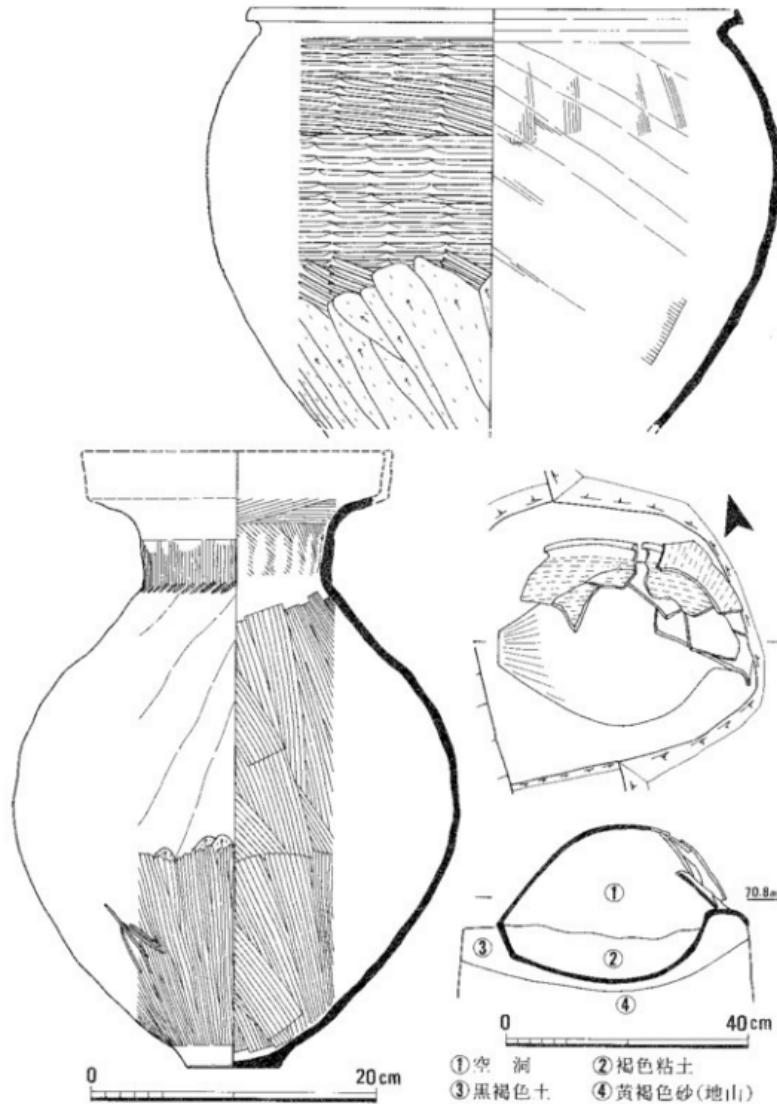
調査区東半に、一辺1.5~4mの円形あるいは不整形の土坑を多数検出した。これらの土坑は湧水がはなはだしく、かつ灰黄褐色砂質土（地山）が還元している部分に集中して掘られているので、井戸であった可能性が高い。またここには水汲み施設SE7519がある（第14図）。これは大型甕の体部下部を外側から打ち欠き、枠としたものである。掘形は上端で直径60cm前後の円形を呈し、現状で深さ0.35mの2段掘りである。据え方は、まず底に深さ18cmほど灰色砂を入れてその上に甕を据え、さらに内部に8cm灰色砂を入れてから、掘形と甕との隙間に黄褐色粘質土混り褐色土を詰めた。土坑及びSE7519は弥生時代中期



第13図 SE7589出土木器（1：4）



第14図 SE7519遺構図・SE7519出土土器



第15図 SX7520遺構図・SX7520出土土器

中葉に属する。調査区南東隅には土器棺SX7520がある（第15図）。口縁部から体部上半部にかけて幅15cm、長さ25cmを打ち欠いて口を広げた大型の壺を傾けて据ていた。口の部分は大きな壺の破片で蓋をしていた。なお壺の内部に遺物はなかった。弥生時代中期後葉に属する。

SE7589は南西部で検出した井戸であるが、大半が調査区外にあるので規模は不明である。弥生時代中期後葉の土器とともに柄状木製品や木製鉤が出土した（第13図）。

まとめ

藤原宮期の遺構は、これまでの周辺での調査成果と同じく密度が薄く、建物規模は小規模で柱径も細く、東方官衙地区で検出される建物群とは様相が異なる。検出した柱穴はいずれも浅く、他にも建物が存在したが柱穴が削平されて痕跡を残していない可能性も否定出来ない。しかし官衙にふさわしい建物であれば、柱穴は今回検出した建物よりも深いと考えられ、大規模な建物が建っていたとは考え難い。またこの近辺はSB7720に見られるように柱が沈下を起こすような軟弱な地盤であり、東方官衙地区のように整った形式の官衙が存在したとは考え難い。さらに比較的密に小規模な井戸が検出されていることも、この近辺の性格を考える上で注意を要する。

一方、下層区では主に弥生時代中期の遺構が稠密にみつかった。中期中葉に属す柱穴はこれら3調査区の全域に広く分布している。中期後葉になると、第68次調査区西半から第69次東調査区東端にかけて、北でやや西に振れた溝が集中的に掘られた。このように弥生時代のなかでも時期によって、この地域の利用形態は異なっている。ところでこれら3つの調査区は、東西75m、南北35mの範囲内にある。地山の高さをみると、北端では南端より0.2m低い。また東西南向では海拔71mを中心にして上下に0.2~0.3mの幅があるものの、大きな傾斜はみられなかった。先にみた包含層のあり方から、後世に改変された形跡がないことを考慮すると、遺構のあり方は自然地形の高低差に基づいたものでないことは確かである。今後さらに周辺地域の調査を積み重ねれば、土地利用の変遷の実態が解明されるものと期待される。

イ、第66-15次調査

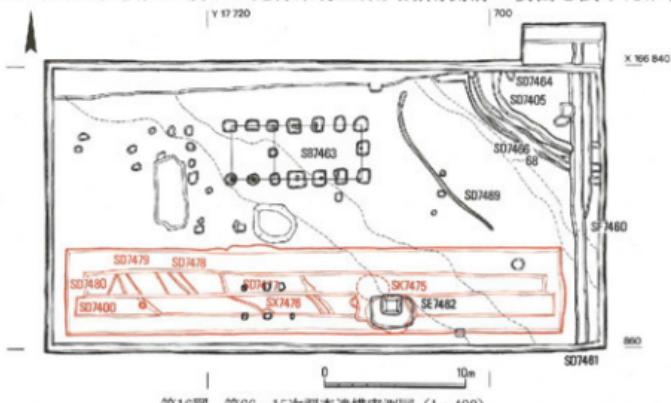
(平成四年二~四月)

この調査は、市営団地の建設に伴う事前調査として樋原市四分町で行なったものである。調査地は宮西方官衙地区にあたり、第59次調査地（『概報』19）の北、第63-5次調査地（『概報』21）の西に位置する。当初、東西40m、南北21mの調査区を設けたが、のちに先行条坊五条大路の南側溝検出を目的として、北に一部拡張した。さらに調査区内南辺で東西35m・南北6mの調査区を設けて掘り下げたところ、弥生時代の遺構を検出した。上層と下層とで遺構の性格が異なるので、二つに分けて調査成果を報告する。

上層遺構 基本的な層序は、上から順に褐色土（盛土）・黒色土（耕土）・暗褐色土（床土）・暗茶色土（床土）・茶褐色粘質土（弥生時代後期包含層）となる。遺構検出は茶褐色粘質土の上面で行った。

藤原宮期直前の遺構 溝1条がある。SD7461は調査区の東端でみつかった南北溝で、先行条坊西一坊大路SF7460の西側溝にあたる。溝は一度掘り直されている。当初の溝は、南端で幅が0.7m、深さが0.3mあり、調査区のほぼ中央以北で溝幅が広がって幅1.5m、深さ0.4mとなる。これがのちに掘り直されて、北端で幅を1m、深さ0.6mに狭められた。

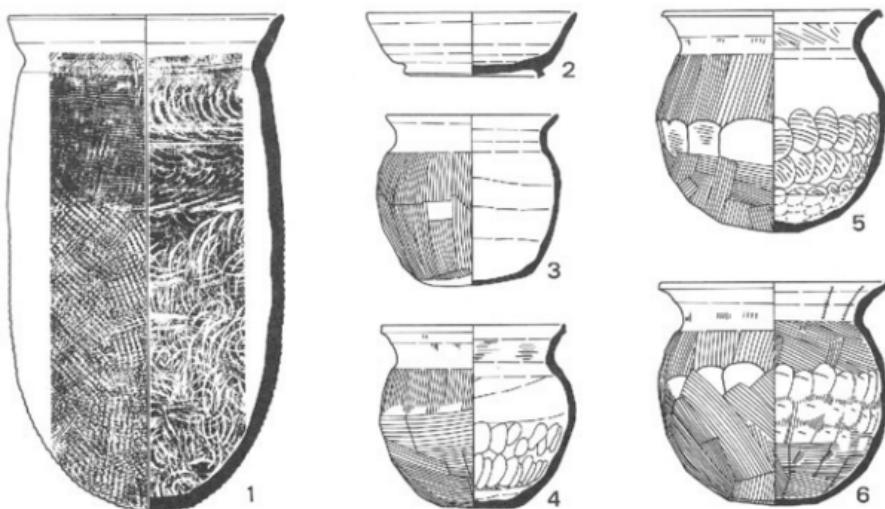
なお北東部に拡張区を設けて先行条坊五条大路南側溝の検出を試みたが、平



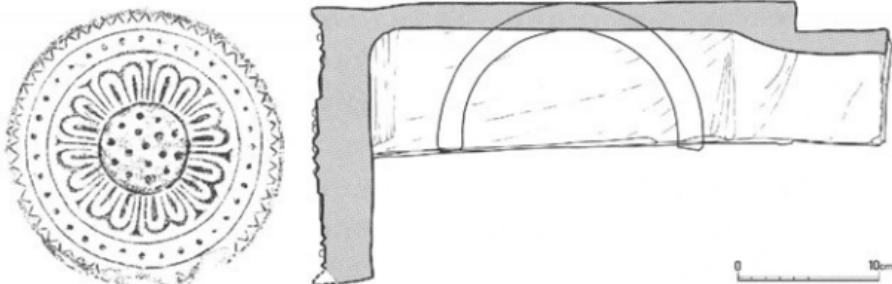
第16図 第66-15次調査遺構実測図 (1:400)

面では確認できなかった。なお北拡張区は地下げされており、そのうえ遺構検出面全面が還元されていたので、遺構の検出が大変困難であった。

藤原宮期の遺構 掘立柱建物1棟、井戸1基がある。SB7463は調査区中央北半にある東西棟建物である。桁行6間（1.6m等間）、梁間2間（1.8m等間）で、西から2間目に間仕切りがある。柱掘形は一辺0.7～1.3mの方形で、柱根や礎板の残っているものがあった。SE7462は調査区南端にある横板組井戸である。掘形の上



第17図 SE7462最下層出土土器（1：4）



第18図 SE7462最下層出土瓦（1：4）

端は2.2×3mの長方形を呈する。深さは現状で2.7mある。内部の井戸枠はよく残っていた。15~20cm×1cm×1.5cm内外の板の木口に近い部分に上下から切り込みを入れ、井籠組とする。内法長は0.65mである。井戸枠内の最下層から藤原宮式軒丸瓦6278Bが1点（第18図）、須恵器壺・甕、また無紋の叩き板による叩き痕を残す土師器甕が出土した（第17図）。

古墳時代の遺構 溝が7条ある。SD7464~68は、調査区北東部に密集する弧状を呈する溝で、いずれも幅0.4m内外、深さは現状で0.1mほどである。6世紀前半の土師器・須恵器とともに、滑石製有孔円盤が出土した。SD7469も弧状を呈する溝で、幅は0.2m、深さは0.1mあり、堆積土は灰茶色微砂である。5世紀末から6世紀初頭の土師器や須恵器が出土した。SD7400は、調査区南西部でみつかった斜行する上幅6m以上、深さ1.1mの大溝である。調査区内では北岸を検出したにとどまる。堆積土は疊混黄灰色バラスで、基本的に1層で形成されていた。この溝からは5世紀末から6世紀初頭に属する土器が出土した。

下層遺構 基本的な層序は、上から順に茶褐色粘質土（弥生時代末包含層）・黒灰色粘土（弥生時代後期包含層）・暗灰色粘土（弥生時代後期包含層）・青灰色粘質土（地山）となる。

弥生時代後期の遺構 大畔1条、土坑1基がある。SX7476は、調査区中央にある上端幅3m、下端幅4.5m、高さ0.6mの大畔である。もともと上端幅1.1m、下端幅1.8m、高さ0.3mの規模であったものを次第に規模を大きくしている。この畔の築土からは弥生時代後期の土器が多量に出土した。黒灰色粘土や暗灰色粘土は大畔SX7476以西に限ってみられ、以東は黄色土混褐色砂質土や茶褐色砂質土である。黒灰色粘土や暗灰色粘土は、小畔など水田であることを示す証拠には欠けるが、第59次調査区でみつかった弥生時代後期の水田の耕土に近い特徴をもっており、かつその位置が近接しているので、大畔SX7476の東側に弥生時代後期の水田が展開していた可能性が高いと思われる。SK7475は径2~2.5mの梢円形に近い土坑で、深さは0.3mある。弥生時代後期初めの土器とともに鋤の未製品や木材が出土した。

弥生時代中期の遺構 溝が4条ある。SD7477は調査区中央にある大溝で、幅6.5

m、深さは1m以上ある。堆積土は基本的に2層で、上から暗茶褐色土・炭混青灰粘質土である。弥生時代中期全般にわたる土器が多量に出土した。SD7478～80は溝SD7477の西側にある溝で、深さはいずれも0.3m前後である。

なお青灰色砂質上の地山面でみると、SD7477は調査区内で最も高い場所に掘られている。すなわち西肩から9.5m西で青灰色砂質土上面は0.6m下がり、また東肩から12m東で0.55m下がっている。そしてSD7477以東に炭混黒色粘質土、炭混暗灰粘質土が堆積し、以西には分布しない。これらの土層からは中期に属する土器の小片が出土している。これらの土層は水田耕上の可能性がある。

まとめ 今回の調査において弥生時代、古墳時代、藤原宮期およびその直前の時期の遺構を検出した。宮内ではこれまで未検出であった先行条坊西一坊大路西側溝を確認し、その位置が確定した。また下層の調査によって、四分遺跡においては、弥生時代中期と後期とで土地の利用形態にきわめて大きな違いのあることが明確になった。

ウ.第66－16次調査

(平成四年二月)

この調査は、歩道整備工事に伴って橿原市飛騨町で実施したものである。調査地は宮西方官衙地区の一画にあたり、宮内先行条坊である六条条間路の存在も予想されたため、東西3m、南北34mの調査区を設定した。調査の結果、藤原宮期の遺構は削平をうけており、中世小溝2条を検出するにとどまった。

エ.第69－6次調査

(平成四年九月)

この調査は、個人住宅建設に伴って橿原市飛騨町で実施したものである。調査地は宮西方官衙地区の一画にあたり、東西2m、南北2.5mの調査区を設定して調査した。調査の結果、中世の浅い土坑を検出しただけで、藤原宮期の遺構は確認できなかった。なお以下に記す2つの調査（第69－7・8次）とは、同一造成地内での一連の発掘である。

オ.第69-7次調査

(平成四年九月)

この調査は、個人住宅建設に伴って樋原市飛騨町で実施したもので、調査地は宮西方官衙地区の一画にあたり、さらに宮内先行条坊の六条条間路の存在も予想されたので、東西2m、南北4mの調査区を設定した。その結果、中世の土坑や小穴を検出しただけで、藤原宮期の遺構は確認できなかった。

カ.第69-8次調査

(平成四年九月)

この調査は、個人住宅建設に伴って樋原市飛騨町で実施したもので、調査地は宮西方官衙地区の一画にあたる。南北4m、東西2mの調査区を設定し調査をしたが、遺構は確認できなかった。

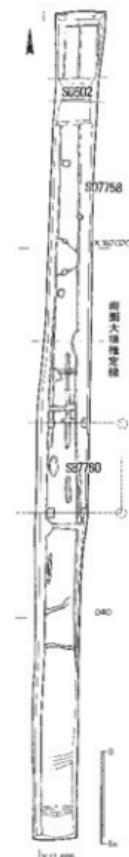
4、宮南面西門・内濠・外濠の調査（第69-4次）

(平成四年八月)

この調査は、歩道整備工事に伴って樋原市飛騨町で実施したものである。調査地は宮南面西門の推定位置にあたり、また宮の内濠および外濠推定位置を含むため、東西2.6mの調査区を南北45mにわたって設定した。今回の調査区に隣接して行われた第19-2次調査で、内濠SD502が確認されている（『概報』7）。

調査区の基本的な層序は、上から盛土（厚さ0.7m）、耕上、床土、灰褐色土と続き、地表面から1.1mで茶褐色粘質土に至る。内濠など宮期の遺構は茶褐色粘質土上面で確認できた。

検出した主な遺構には内濠、掘立柱建物1棟、南北溝1条があり、他に小溝や小穴などが少数ある。内濠SD502は、調査区の北端近くで検出した幅1.6m、深さ1mの素掘りの溝である。溝



第19回 第69-4次
調査遺構実測図
(1:300)

の堆積土は3層に分かれ、下層からは土器や木簡、中・上層からは瓦類が出土した。木簡には表裏に「封□」「粟道宰熊鳥□」と書いた検封木簡1点がある。なお上層は溝を埋立てた上層である。宮南面西門の推定位置は調査区中ほどにあたるが、基壇土など門の存在を示す痕跡は全く認められなかった。また從前の調査成果からすると、調査区南端で外濠が検出されるはずであるが、調査区の幅が狭いこともあって外濠に向かい徐々に下がる傾斜面を検出しただけで、外濠の両岸を確認することはできなかった。

調査区東辺に平行して南北溝SD7758が走る。北端で幅1.2m、深さ0.3mの規模であることを確認したが、調査区が南に行くに従い西へ偏するためしだいに調査区の東へは斜めに行く。西一坊大路に相当する宮内先行条坊の西側溝である。

調査区の中央やや南寄りで2列に並ぶ4個の柱穴を確認した。調査区の関係から明確に建物跡とはいえないが、梁間2間（柱間2.5m）、桁行2間以上（柱間2m）の東西棟掘立柱建物の一部分である可能性が高い。門と重複する位置にあるから藤原宮期以降であるが、時期は限定できない。

5、宮外周帶の調査（第69-9次）

（平成四年十～十二月）

この調査は、県道豊浦南八木線の道路建設に伴う事前調査として樋原市飛驒町で行ったものである。調査地は藤原宮西南部の外周帶に位置し、南北に3箇所の調査区を設けて調査した。南から順に南区、中区、北区と呼び分け、各区ごとに報告する。

南区 第60-8次調査地（『概報』20）の東に位置する東西11.5m、南北25.5mの調査区である。基本的な層序は、調査区南半では現代の盛土である砂礫・明褐色砂質土の下が礫混暗褐色土（古墳時代包含層）で、北半では上から順に耕土、床土、礫混暗褐色土（古墳時代包含層）となる。遺構の検出は暗褐色バラスの上面で行った。

調査区北半で藤原宮期直前の総柱の掘立柱建物SB7682を検出した。梁間2間

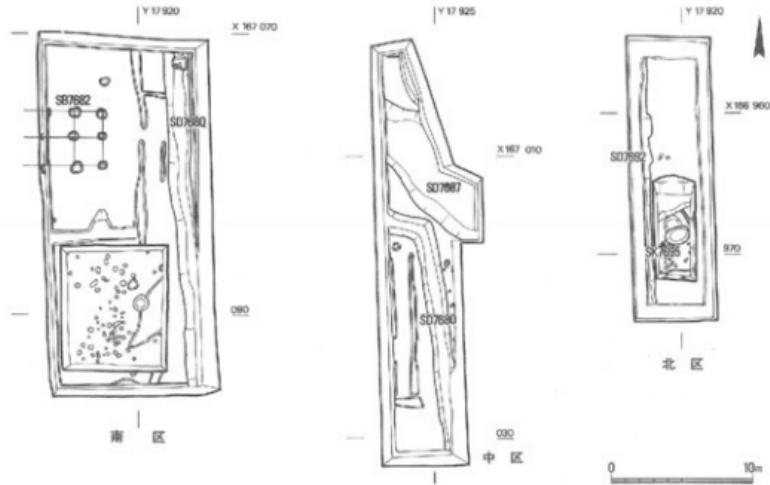
(1.9m等間)、桁行2間以上(2m等間)で、柱穴は1辺0.5m前後の方形を呈し、深さは現状で0.2mである。

調査区の東端で北でやや西に振れる南北溝SD7680を検出した。東岸は調査区外にあり、現状で幅は2.5m以上、深さは0.8mある。上から順に明褐色粘質土、青灰色砂、青灰色粘質砂質土が堆積している。出土遺物から13世紀に属する。

さらに調査区南半で疊混暗褐色土を取り除いて下層の調査を行った。調査範囲は東西7.5m、南北9mである。疊混暗褐色土の下が黄褐色粘質土あるいは暗褐色バラスの地山となる。地山上面で直径0.1~0.2m前後の小穴を多数検出したが、いずれも疊混暗褐色土から掘り込まれており、古墳時代に属する。

中区 東西が南端で6m、北端で3m、南北30mの調査区である。基本的な層序は、上から順に耕土、床土、暗青灰褐色砂質土、黄灰褐色粘質砂で、遺構検出は黄灰褐色粘質砂の上面で行った。

その結果、中世の溝2条を検出した。SD7680は幅1.5m、深さ0.6mの南北溝で、調査区南半では北でやや西に振れ、調査区中央で西に折れる。堆積土は基本的に褐色微砂1層である。南区で検出したSD7680のはば北延長上に位置する。規模からみて環濠の可能性が高い。またSD7687は調査区北半で検出した北で西



第20図 第69-9次調査遺構実測図(1:400)

に振れる南北溝である。幅は5mで、深さは0.5m以上ある。砂・礫、あるいは砂質土が堆積していた。南肩部は直径7cmほどの丸木を多数打ち込んで護岸する。堆積土のあり方から流れがかなり速かったとみられる。土師器・須恵器・瓦器など14世紀までの遺物とともに、7世紀代の埴仏が1点出土した。

北区 東西6m、南北20mの調査区である。基本的な層序は、上から順に盛土、耕土、床土、茶褐色砂質土、茶褐色粘質土、暗褐色砂質土、淡褐色微砂、茶褐色土（古墳・弥生時代包含層）となる。遺構検出は茶褐色土上面で行ったが、藤原宮期の遺構はみつからなかった。調査区西端に幅1.4m以上、深さ0.7m以上の南北溝SD7692がある。堆積土は砂と粘質土の互層で、13世紀に属する。

調査区南半で下層の調査を行った。調査範囲は東西2.5m、南北7mで、層序は上から茶褐色土、暗褐色土（弥生時代包含層）、黄褐色微砂（地山）である。直径15cm前後の小柱穴のほか、直径1.5m前後の土坑などを検出した。いずれも弥生時代中期に属する。

まとめ

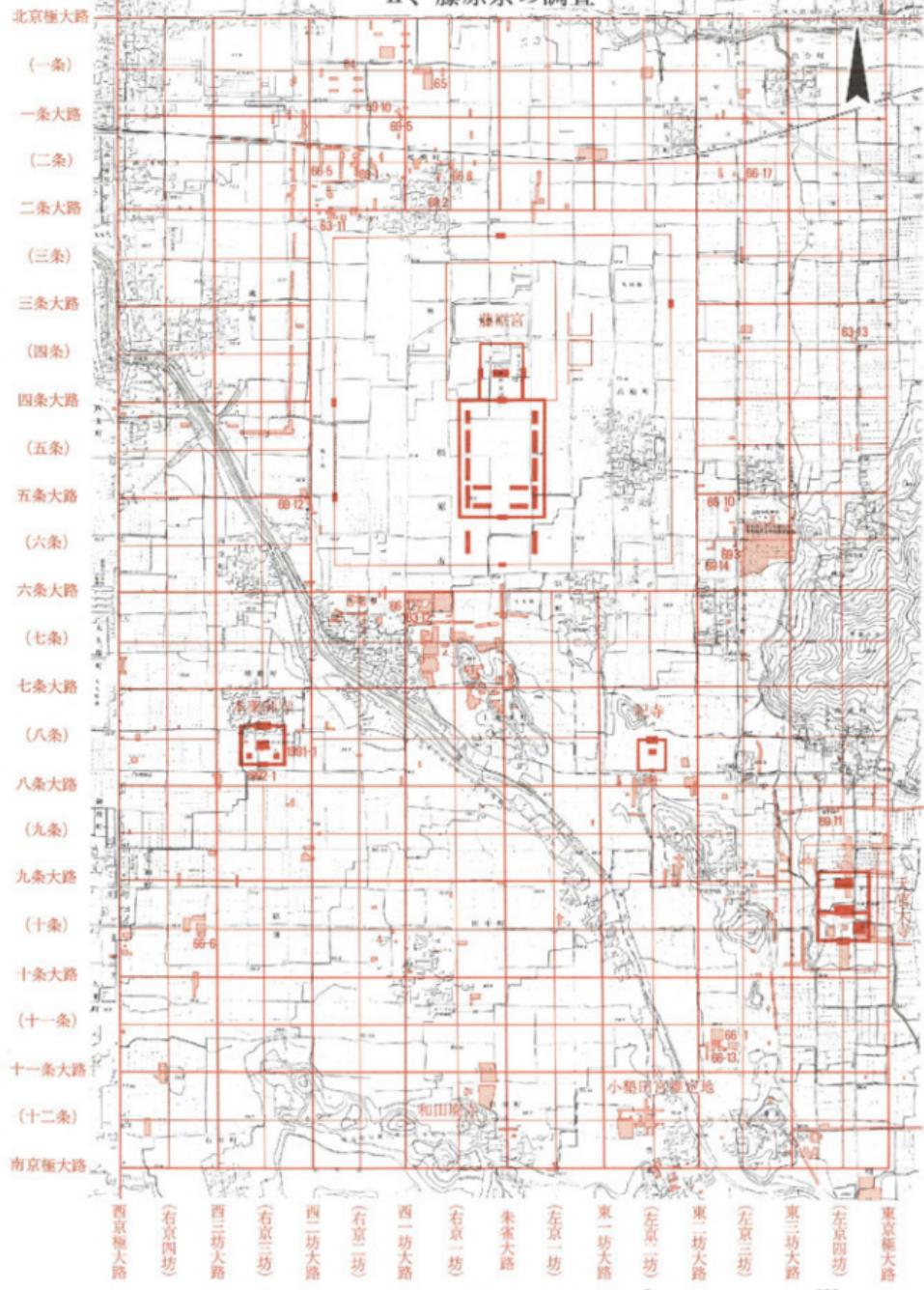
3箇所に設けた調査区ではいずれも藤原宮期の遺構を確認することができなかつた。それは調査区がいずれも藤原宮の外周帶に位置していることによるものであろうか。しかし規模や時期からみて中世の環濠の可能性のある溝を検出したほか、北区下層調査区で弥生時代の遺構がみつかり、四分遺跡がすくなくともこの地点まで広がることが明らかになった。

6、宮東南隅の調査（第66-14次）

（平成四年二月）

この調査は権原市高殿町に所在する高所寺池上げ堤改修工事に伴う事前調査である。調査地は池の東北隅で、宮の外周を画する大堤の東南隅に近接する位置にあたる。調査は堤上除去後東西9m、南北1.5mの調査区を設定して行った。1.1m掘り下げた明黄褐色土上面で遺構検出を行ったが、調査区西半は大きく削平をうけ、東半で中世の小溝と宮期の柱穴1個を検出したにとどまった。

II、藤原京の調査



第21図 藤原京調査位置図

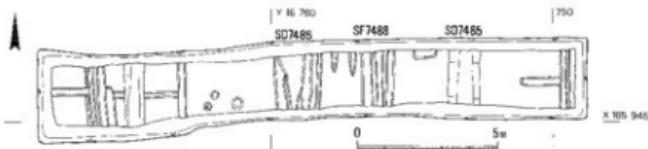
1、左京二条三坊の調査（第66-17次）

（平成四年三月）

この調査は、住宅建設に伴う事前調査として樞原市勝夫町で行ったものである。調査地は左京二条三坊にあたり、東三坊坊間路の存在が推定された。調査は東三坊坊間路の推定位置に東西19m、南北3.5mの調査区を設定して行った。

層序は、上から順に耕土、床上、茶褐色土（整地土）である。遺構は耕土から0.7m下の茶褐色土上面で検出した。

検出された主な遺構は東三坊坊間路とその東西両側溝である。調査区中央で検出された東三坊坊間路SF7488は路面幅が5.5mで、東側溝SD7485は幅1.1m、深さ0.43m、西側溝SD7486は幅0.8m、深さ0.2mである。東西両側溝の溝心々距離は6.3mある。



第22図 第66-17次遺構実測図（1:200）

2、左京六条三坊の調査（第69-3次）

（平成四年五月）

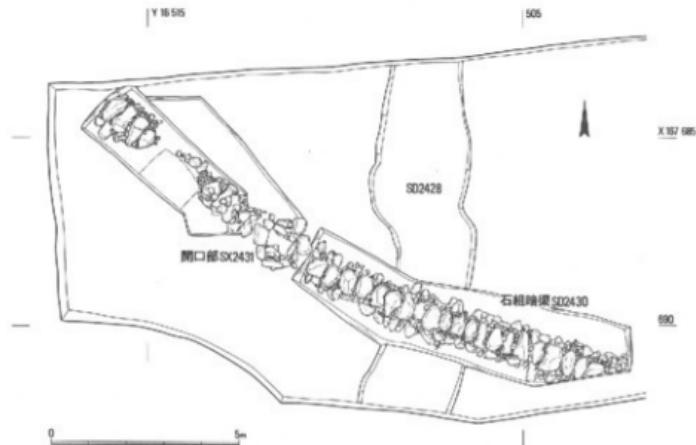
この調査は、個人住宅改築に伴う事前調査である。調査地は樞原市木之本町で、左京六条三坊西南坪内の東北部にあたる。調査は南北4m、東西3mの調査区を設定して行った。その結果、現地表下0.7mで遺構面に達し、浅い土坑を2基検出した。遺構面の東端は地山で、地山は東から西に向かって急激に落ち込んでおり、この落ち込みは七坑より古い大きな南北流路の東岸である可能性がある。いずれも伴出遺物はなく、時期は不明である。

3、左京九条四坊の調査（第69-11次）

（平成四年十一～十二月）

この調査は、樅原市戒外町から明日香村小山の村道耳成線に至る市道建設に伴う事前調査である。工事は平成二年に敷設された農道を南北に拡幅するもので、既設の農道部分については当調査部が昭和六十二年度から平成元年度にかけて、第54-25・58-20・60-17次の3次にわたる調査を実施した（『概報』19～21）。これらの調査では、条坊道路を検出できなかったものの井戸・溝・土坑など藤原京関連の遺構を検出した。また従前の調査で判明していた、大官大寺北西一帯に広がる7世紀中頃の大規模な整地土が東西幅約390mにも達することを確認した。特に第58-20次ではこの整地事業に伴う大規模な石組暗渠を検出した。今回の調査は、道路を南北に拡幅する工事であることによる制約などから、石組暗渠部分を中心として行うこととし、前回実施した第60-17次調査区も含んで調査区を設定した。

調査区内における層序は、上から耕土・床土・暗灰土の順で、その下が7世紀中頃の整地土である黄褐粘質土、さらにその下が灰黒色粘土となる。遺構検



第23図 第69-11次調査遺構実測図（1：150）

構検出は整地上上面で行った。石組暗渠は整地上で覆われているため、前回の調査で判明している石組暗渠の向きに従って整地上を掘り下げ、天井石部分を検出した。

主な検出遺構は南北溝と石組暗渠で、いずれも前回検出したものの続きである。

南北溝SD2428は幅2.5m、深さ0.65mで、埋土は暗灰色粘質土と整地上である黄褐色粘質土のブロックを含む灰褐色砂質土である。埋土からは藤原宮期の上器類・瓦類が出土した。

石組暗渠SD2430は、前回、方形の開口部SX2431とそこから東南方向に長さ3m分、西北方向に長さ1m分の天井石を確認したが、今回は新たにその続きを東南方向に6m分、西北方向に3.5m分検出した。底面での幅は0.4m～0.45mで、深さは0.6～0.65mである。底石はなく、暗渠内には礫がぎっしりと詰まっていた。底面のレベルは西が低く、東が高い。石組暗渠の構築は次のように行われている。すなわち灰黒色粘土面を0.25～0.3m掘り込み、掘り込み面に接して最下段の側石を据え、その上にさらに2～3段側石を積んで天井石をのせる。天井石は長さ70～80cm大で、継目の隙間に小石をかませ、天井石と側石のあいだおよび側石相互のあいだに粘質土を詰める。天井石上面までの整地の状況は北と南で異なり、南側では黄灰色の粘質土でマウンド状に側石・天井石をつつみこむが、北側では天井石の高さまで砂を入れている。場所によって天井部分を覆う盛土の厚さは異なるが、土入れの順序は、まず天井石の南側に粘質土を薄く置き、次いでその上に北から粗砂をかけている。開口部から東では粗砂は極めて薄いが、西では側石北側の粗砂が天井石の高さを越え、天井部で0.1m近い厚さがある。この上に0.3mの厚さで整地土である黄褐色粘質土が置かれている。暗渠部分での整地土の厚さはほぼ1mにも達する。

今回の調査では7世紀中頃の石組暗渠を長さ13.5mに亘って確認した。また新たに暗渠埋設に伴う整地の状況がその北と南で異なり、埋土の質も全く違うことが判明した。このことと関連して暗渠内が礫で充填されていた点も注目される。また礫間には水垢状の粘土がたまるが、粘土中に寄生虫卵が皆無で（犬理人学附属犬理参考館金原正明氏の分析）、ゴミも全くみられなかった。これ

らのことから、この石組暗渠を下水施設とするには問題がある。調査区付近は地形的に北側が高く、発掘時においても整地土の砂層から湧水が激しかった。あるいは北からの水をこの石組暗渠で受け、開口部で汲み上げたのかもしれない。いずれにしても今後石組暗渠のはじまりと行先を明らかにすることがその機能や性格を解明するために必要である。

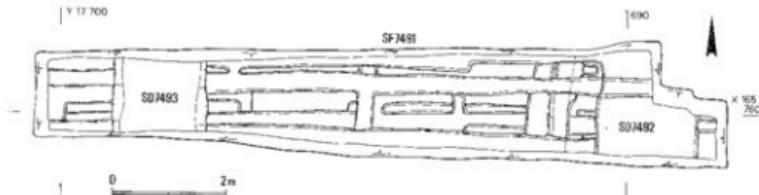
4、右京一条一・二坊の調査（第69-10次）

（平成四年十一月）

この調査は、楓原市醍醐町の国道165号線歩道拡幅工事に伴う事前調査として行ったものである。工事が右京一条の一坊西南坪と二坊東南・西南坪とにまたがる狭長なものであることから、調査は工事区間が横断する西一坊大路と西二坊坊間路の検出に努めることとし、西一坊大路推定位置に東調査区（東西10m、南北2m）、西二坊坊間路推定位置に西調査区（東西11m、南北2m）を設けて実施した。調査面積はあわせて42m²である。

東調査区の層序は、上から順に耕土、床土、黄褐色土、暗灰褐色砂質土（整地土）、灰褐色砂土（地山）であり、耕土下0.6mの暗灰褐色砂質土上面で遺構を検出した。主な遺構には西一坊大路がある。

西一坊大路SF7491の東側溝SD7492は、幅2.3m、深さ0.4mの素掘りの溝で、暗灰褐色土上に埋められ、底には砂が薄く堆積する。西側溝SD7493は幅1.6m、深さ0.35mの素掘りの溝で、埋土等は東側溝と変わらない。東西両側溝の溝心々距離は8.4mであり、両側溝の内側で計測した西一坊大路の路面幅は6.3mとなる。

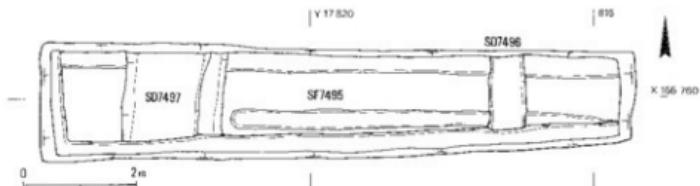


第24図 第69-10次調査東調査区遺構実測図 (1 : 100)

西調査区の層序は、上から順に耕土、床上、黄褐色土、暗褐色砂質粘土（整地土）、黄灰色微砂（地山）、灰色粗砂（地山）であり、遺構は耕土下0.6mの暗褐色砂質粘土上面で検出した。主な遺構には西二坊坊間路がある。

西二坊坊間路SF7495の東側溝SD7496は幅0.6m、深さ0.23mの規模である。これに対して西側溝SD7497は上端で幅1.8mと軒広く、深さも0.5mと深い。東西両側溝の溝心々距離は5.9mであり、西二坊坊間路の路面幅は4.7mである。ただ西側溝SD7497はその東壁が段をなしており、上半を溝の溢れによるものであるとした場合、溝心々距離は6.25m、路面幅は5.4mとなる。

条坊関係遺構出土の遺物は、いずれも藤原宮期に属するものであるが、その中で西一坊大路東側溝出土土器に東国系の黒色上師器杯と思われる破片が含まれている。これまで飛鳥地域の石神遺跡に特徴的に出土した土器であり、藤原京の条坊関連遺構から出土したことは注目されよう。



第25図 第69-10次調査西調査区遺構実測図 (1:100)

5、右京二条一坊の調査（第69-2次）

（平成四年四～五月）

この調査は、納屋建設に先だつ事前調査である。調査地は樅原市醍醐町で、右京二条一坊にあたる。調査は敷地の西寄りに南北12m、東西2mの調査区を設定して行った。層序は上から順に黒灰色土・赤褐色土・淡灰赤褐色土で、その下の現地表下0.6mにある暗茶灰褐色砂質土が遺構面となる。検出した藤原宮期の遺構は南北溝SD7750のみであるが、SD7750もその東岸を検出したにとどまり、その規模や性格などは不明である。

6、右京二条二坊の調査（第69-1・5次）

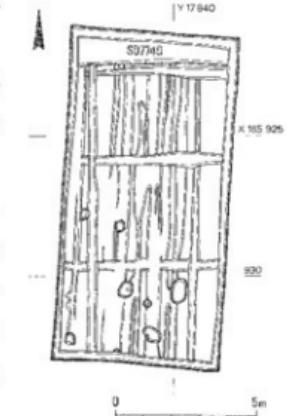
ア、第69-1次調査

（平成四年四月）

この調査は、住宅建設に伴って樋原市醍醐町字長谷田で実施した事前調査である。調査地は右京二条二坊西南坪の東北部にあたり、周辺では第54-23・58-16・60-19次の各調査などが行われている（『概報』19・20・21等）。

調査区内の層序は、上から耕土・床土・暗灰褐色砂質土の順で、現地表下0.3mで遺構面である暗褐色粘質土・橙褐色砂質土に至る。

検出した主な遺構は藤原宮期の東西溝1条である。東西溝SD7740は調査区の北端で検出した素掘りの溝で、現状で幅1m、深さ0.2mある。この溝は当該坪の北にある二条条間路南側溝SD6331から溝心々距離で南へ8mに位置する。なおこの他に柱穴と思われる小穴数個を検出したが、建物・塀などにまとめることができない。



第26図 第69-1次調査遺構実測図 (1:200)

イ、第69-5次調査

（平成四年八～九月）

この調査は、敷地造成工事に伴って樋原市醍醐町で実施したものである。調査地は右京二条二坊東北坪にあたり、一条大路の推定位置を含むため、東西3m、南北19.5mの調査区を設定して調査を行った。なお今回の調査区の北に隣接したところで第41-9次調査が行われている（『概報』15）。

調査区の層序は、上から盛土（厚さ0.8m）、耕土、床土、灰褐色土、暗褐色土と続き、地表面から1.5mで茶褐色粘質土上面に至る。遺構はこの茶褐色粘質土上面で確認した。

検出した遺構には、一条大路とその南北両側溝があり、他に中世の小溝や小穴などがある。一条大路SF6250は調査区の北半で検出した。北側溝SD7766は幅1.9m、深さ0.3m、南側溝SD7767は幅1.1m、深さ0.2mの素掘り溝である。この両側溝から復原される一条大路の規模は、路面幅7.5m、溝心々距離で9mあり、これまでの調査で知られている数値にはほぼ等しい。なお暗褐色土から土馬が、側溝から須恵器の杯蓋を転用した硯などが出土した。

7、右京七条一坊の調査（第66-12次）

（平成四年一～二月）

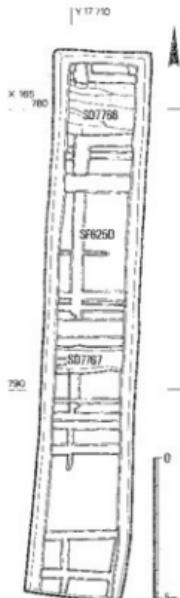
この調査は、宅地造成工事に伴い橿原市高殿町で実施したものである。調査地は藤原宮の南面西門に近い右京七条一坊西北坪にあたり、同坪内ではこれまでに、第17・19・62・63次等の調査が行われている（『概報』6・7・20・21等）。

調査区の基本的な層序は、上から盛土（厚さ0.15m）、耕土、床上、二畳床土、灰褐色土と続き、地表面から0.9mで暗灰色粘質土上面に至る。藤原宮期の遺構は暗灰色粘質土上面で確認できた。

検出した主な遺構には、掘立柱建物1棟、南北溝2条、トイレ遺構1基があり、他に小溝や小穴などがある。

掘立柱建物SB7422は調査区の南半にある2間×3間の東西棟総柱建物で、柱間寸法は梁間が1.9m等間、桁行は西2間が2.4mで、東1間が1.9mである。柱穴は深さ0.2mほどしか残っておらず、遺構面が少なくとも1m近く削平をうけていることがわかる。

南北溝SD7075は、調査区の東端で確認した幅0.9m、深さ0.5mの溝で、藤原宮期の土器が出土した。この溝の西で検出した南北溝SD7080は、幅1.5m、深

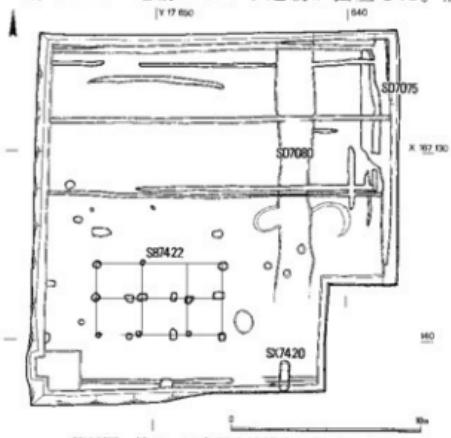


第27図 第69-5次調査遺構実測図 (1:200)

さ0.2mである。調査区の南半では土器や木片などを含むシルト層が広がっており、溝の範囲は不明瞭であった。同じく藤原宮期の土器を出土するが、重複関係からすると後述するトイレ遺構SX7420よりは古い。この2条の南北溝とも、北の第63次調査区や南の第63-12次調査区へと続いている。

調査区の東南隅付近で発見されたトイレ遺構SX7420は、長さ1.6m、幅0.5mの長楕円形の素掘りの土坑で、長軸を正しく南北方向に置く。深さは現状で0.4mをとどめるが、前述した柱穴等の遺存状況からすると、本來1m以上の深さを持っていたようだ。土坑の掘形は、短辺側ではゆるやかに傾斜をつけ、長辺側ではほぼ垂直に近い角度で掘り込まれていた。また土坑内には東西0.3m、南北0.85mの間隔で4本の木杭が打ち込まれていた。いずれも直径2cmほどの小枝を利用した杭で、先端を尖らす以外に特別の加工はない。最も長いもので土坑の底から0.4mの深さまで打ち込まれていた。なお内部には粒子の細かい艶のある黒色土が詰まっており、木簡や板状木製品、ウリの種子の堆積がとくに目を引いた。これらの特徴からこの遺構をトイレ跡と判定し、埋蔵文化財センターの協力を得て、内部の堆積土をすべて採取し、各種の分析を行った。その結果、この遺構がトイレであることが科学的にも判定された。

溝やトイレ遺構などから遺物が出土した。溝およびその周辺からは須恵器や



第28図 第66-12次調査遺構実測図 (1:300)

土師器、土馬などの土器類が出土したが、瓦類は全体に少ない。他に磁石やコハクの塊が出土している。トイレ遺構からは籌木（ちゅうぎ）や木簡、土器細片、ウリなどの植物種子、糞虫やハエの蛹などの昆虫遺存体、魚骨などの食料残滓、寄生虫の卵などが出土した。トイレ遺構からの土器の出土は少ない。

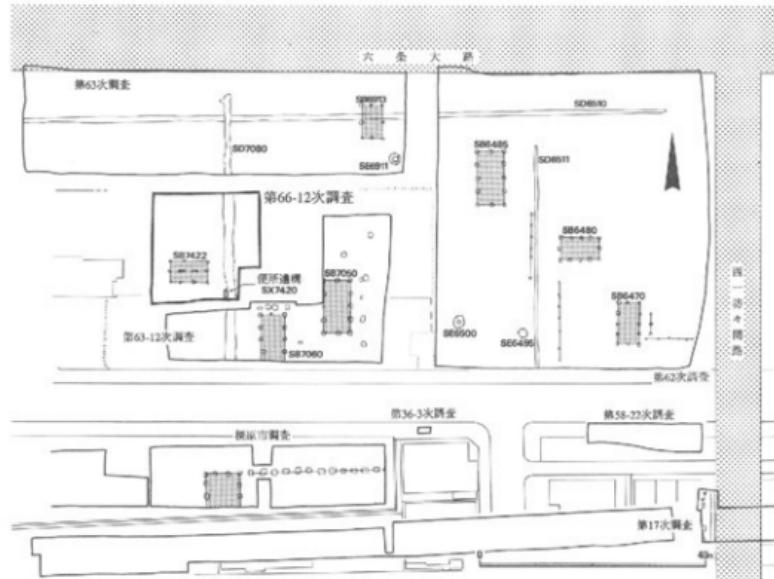
木簡は全部で41点（うち削屑17点）出土した。そのうち遺構SX7420から30点（うち削屑15点）、溝SD7080の南半部にあたるシルト層から11点が出土した。当坪では以前に行われた第62次調査で藤原宮期の井戸から削屑24点が出土し（『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』10）、また第63-12次調査でも今回の調査区の南辺に接する位置で検出した3基の土坑から723点（うち削屑703点）の木簡が出土した（『概報』22）。今回出土した木簡は、同じ坪内で行われた第62次・第63-12次調査で出土した木簡とも関連付けて理解する必要がある。これまで当坪で出土した木簡の特徴として、第一に藤原京城では最も多量の木簡を出土し、しかもその大部分が削屑であること、第二に削屑の中には所謂横材の木簡がかなりの数を占めること、第三に「戸主」などと記したものがあること、などを挙げることができ、さらに今回出土したものの中に「下戸雜戸戸主雜戸下戸戸主」「百濟手人下戸戸主」と表裏に記したものがある。これらの特徴は、当坪に官衙ないしは官衙に関連した施設が置かれていたことを示唆している。

これまでの調査で判明した当坪内の建物は、いずれも2間×3間や3間×3間程度の小規模なもので、それらが溝や堀で区切られた小区画内に井戸などを伴って点在する様子が明らかになっている。そこからは「貴族の邸宅」の雰囲気はうかがえない。一方、出土遺物からしても戸籍などに関連した木簡の記載内容や硯（転用硯）の出土が比較的多いなど、公的な機関（役所）の存在を暗示する。もしこの想定が正しいとすると、今回確認したトイレ遺構は、役所内に設置された共同便所とみるべきなのであろう。

トイレ堆積土の分析のうち、寄生虫卵の検出が特に注目される。これは考古資料として我が国最初の発見例であり、藤原宮期における寄生虫蔓延の様子を伺い知ることができた。今回確認された寄生虫卵は回虫・鞭虫・肝吸虫・横川吸虫の卵であり、これらは独自の生活史を有するため、それを手懸かりとして当時の食生活を復原することができる。特に回虫・鞭虫卵の存在は野菜を生で食する習慣のあったことを物語る。さらに想像をたくましくすれば、人糞肥料の畑への利用も考えられる。しかし一方、今回、便池内に多量の篠木が投棄さ

れでいることからすると、肥料としての使用を想定するには不適当な行為であり、人糞肥料の問題については更に検討が必要であろう。いずれにしても寄生虫卵の発見は、古代の食生活のみならず、衛生や医療の分野にも資料を提供し、さらにはこれまで断定することができなかったトイレ遺構の判定にも大いに力を發揮してくれる。更に類例が増えることに期待したい。

なお本調査で発見したトイレ遺構SX7420については、別に『藤原京跡の便所（トイレ）遺構－右京七条一坊西北坪－』（奈良国立文化財研究所 平成四年）を刊行し、遺構や出土品の概要、堆積土の分析結果などをまとめているので、参照されたい。



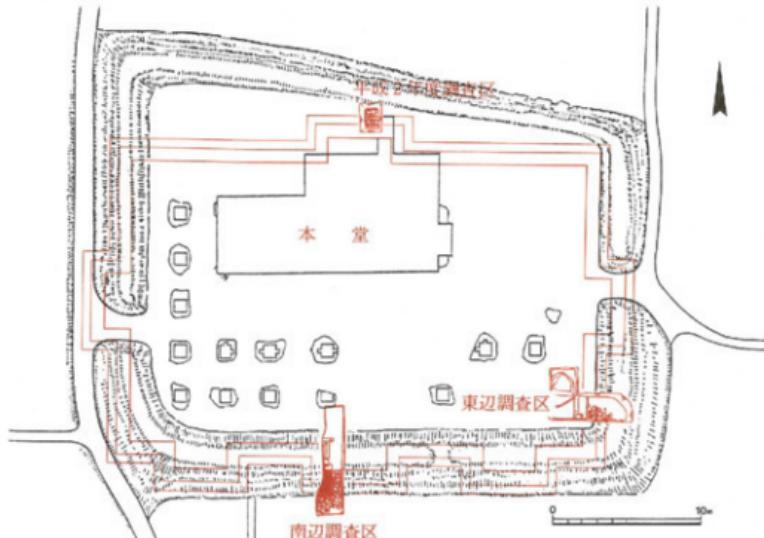
第29図 右京七条一坊西北坪（北半部）藤原宮跡遺構図（1:1000）

8、本薬師寺の調査（1991－1次）

（平成四年三月）

この調査は、権原市城殿町に所在する史跡本薬師寺跡の調査を今後継続的に行っていくために、金堂跡で実施した予備調査である。

藤原京右京八条三坊を占める本薬師寺ではこれまでに4回の調査が行われている。まず昭和五十一年の寺域西南隅の調査では藤原京八条大路と西三坊大路の交差点を検出し、また条坊道路施行より古く、寺域の西を限る施設に関連するとみられる南北溝を検出した（『概報』6）。また昭和五十八年に行った寺域東半部の調査では寺造営前からの自然流路を検出した（『概報』14）。この流路は造営の終了する7世紀末頃には整地されたことが確認され、日本書紀にみえる造営経過と一致する状況が明らかとなった。平成元年には西面回廊のすぐ東側で調査を行ったが、遺構面は削平されていた（『概報』20）。さらに平成二年、庫裡改築に伴って、調査面積2.7m²と小規模ではあったが、初めて金堂北辺中



第30図 本薬師寺1991-1次調査調査位置図

央部の調査を実施した（『概報』21）。その結果、平城京薬師寺と同様、北面階段の北を巡る石組の雨落溝と基壇周辺の玉石敷を検出し、金堂の遺存状態が良好であることを確認した。

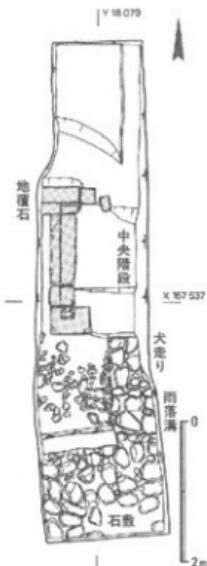
今回の調査は、平成二年の調査成果を受け、金堂基壇の残存状態の把握、金堂の基壇規模の確認などを目的として、現在の土壇の南辺中央部と東辺南部の2箇所に小さな調査区をそれぞれ設定して行った。

南辺調査区 金堂基壇の南辺部ほぼ中央に東西2m、南北7.5mの調査区を設けた。北は土壇上に残る南側柱列の西から4つ目の礎石下まで、南は土壇下端から南1.7mまでである。調査の結果、金堂基壇南辺の地覆石、中央階段西側の地覆石、階段に伴う犬走りと雨落溝、雨落溝南方の石敷などを検出した。

金堂跡南辺では中央階段西側との取り付き部の基壇地覆石を検出した。6~7cmほど階段部に入り込むだけで、これより東には地覆石を引き通さない。地覆石は幅40cm、高さ40cmであるが、長さは不明である。羽目石との相欠きの仕口は幅23cm、深さ2cmである。上面には羽目石のあたりが幅3cm認められる。右下隅には階段耳石との相欠き仕口がある。この地覆石東には方形の凝灰岩切石が残り、わずかに地覆石にのっている。

中央階段西側の地覆石は3石残存する。幅38cm、高さ38cmで、北のものは長さ1mあり、真中のものは長さ30cmで、耳石との相欠きは基壇地覆石の仕口と同じ寸法である。南のものは階段西南隅の地覆石である。長さ58cmで横長に据えられ、上面に縦と横が19cmと14cmで、深さが8cmほどの耳石を受ける枘穴がある。なお階段前面の地覆石は抜き取られている。

階段の南は玉石敷の犬走り・雨落溝となり、雨落溝の南方にも玉石敷が広がる。犬走りは幅0.9mで、地覆石南端上面から0.15m下に20~30cm大の玉石を2~3列並べ、雨落溝の側石にはやや小ぶりの玉石を横方向に



第31図 南辺調査区遺構実測図
(1:80)

用いる。雨落溝の幅は0.53~0.55mで、深さは0.1mである。側石と石敷面は同じレベルにある。現水田面からの深さは0.25mと浅い。溝南方の石敷は1.5mまでを確認した。これら基壇周囲の遺構は後に埋められ、玉石敷面の0.1m上に瓦や小砾を敷いた時期があるが、その年代については不明である。

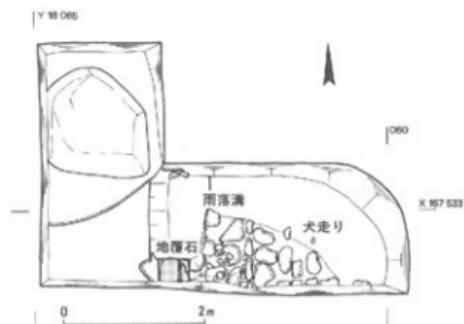
東辺調査区 土壇の東辺南側に幅1.8mでL字状に東西5.2m、南北3.5mの調査区を設けた。基壇東辺の地覆石、犬走り、雨落溝、雨落溝東方の石敷、落とし込まれた礎石などを検出した。

調査区南壁にかかって基壇地覆石が長さ30cmほど残る。その北側の石は抜き取られているが、北壁に次の地覆石が顔を出す。これは抜き取りの際動いて傾斜しているが、南北方向の位置が大きく動いていないとすれば、2石の間は1.25mとなり、地覆石の一つの大きさを、幅43cm、高さ38cmで、羽目石との相欠きは幅25cm、深さ1.4cmと推定できる。地覆石の上面には3cmほどの羽目石のあたりが残る。

地覆石東方には玉石敷の犬走りと雨落溝があり、その東方にも石敷が認められる。犬走りは幅0.9mで、地覆石上面から0.2m下に石敷を施す。雨落溝は幅0.55mで、側石は石敷面よりわずかに高くなる。溝の深さは0.1mである。玉石敷は南辺調査区に比べてやや粗く、隙間が目立つ。

調査区北側には礎石が落とし込まれていた。1.5m大の巨石で上面が下になっていると思われる。落とし込まれた位置からみて側柱東南隅の礎石と推定される。なお落とし込まれた時期は近世以降である。

金堂基壇の築成について
両調査区での調査から判明
したこととは次の通りである。
すなわち基壇は掘り込み地
業を行わず、自然堆積の砂
礫層の上に造成される。ま
ずほぼ基壇の範囲にマウン



第32図 東辺調査区遺構実測図 (1:80)

ド状に土を入れ、上面を叩きしめる。このうち周辺部に0.3mほどの整地を行う。この上面が地覆石・石敷の玉石を据える高さとなる。そのうち埴塙土が版築で築かれる。恐らく、周辺を基壇規模に垂直に削りとり、地覆石・羽目石を据えたと思われる。そして階段部分に凝灰岩小片を多く含む砂質土が入れられた。

出土遺物

瓦類の他、土器が少量ある。その他、金属製品に金銅製品・鉄釘などがある。瓦類には丸・平瓦の他、軒丸瓦、軒平瓦、熨斗瓦、面戸瓦等があり、出土点数は第2表の通りである。軒瓦は創建瓦が全体の85%を占める。軒丸瓦では6276の出上点数が多いが、6121も少なくない。6276Aには瓦范が強く摩滅したA bが含まれ、A aとA bは胎土・焼成も異なる。軒平瓦は6641と6647の出土点数が拮抗し、6647の占める割合が平城京薬師寺より大きい。平城京薬師寺で6641の6割を占めた6641Gは確認できなかった。奈良・平安時代の軒瓦がわずかだが出土し、これらはすべて平城京薬師寺と同範である。この点は平成二年に行われた1990-1次調査の成果と一致する。また軒丸瓦・軒平瓦にはともに裳階用の小型瓦（6276E-6641K-6647I）があり、6641Kには顎面に朱線を残すものが1点ある。丸・平瓦にも小型品がある。丸・平瓦はコンテナ59杯分が出土した。丸瓦は卡縁丸瓦で、繩叩きののちナデ調整する。平瓦は粘土板桶巻き作りで凸面縦位繩叩きのものが多く、一枚作りの凸面縦位繩叩きのものがこれ

		東辺調査区	南辺調査区	合計		東辺調査区	南辺調査区	合計	
軒 丸 平	6121A	3		3	軒 平 瓦	6641H	3	1	4
	" B	1	1	2		" K	3	1	4
	6276Aa	4	4	8		6647Cb	1		1
	" Ab	1	1	2		" G	2	1	3
	6276E	4	2	6		" I	5	1	6
	6279C		1	1		6681C	1		1
	6308A	1		1		小計	15 (16)	4	19(20)
	薬師寺36	1	1	2		熨斗瓦	11	6	17
	不明	1	1	2		面戸瓦	1		1
小計		16	11	27		隅切瓦	3		3
						刻印瓦		1	1

第3表 本薬師寺1991-1次調査出土瓦点数 ○内は種別・型式不明を含む

に次ぐ。東辺調査区の地覆石抜き取り出土瓦（丸瓦262片・平瓦423片）と礎石落とし込み穴出土瓦について創建瓦と奈良時代以降の瓦を破片数で比較すると、いずれも創建瓦が総数の6割前後を占める。

土器には土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などがあるが、ほとんどが中・近世のものである。南辺調査区の階段前面の地覆石抜き取りから14世紀頃の瓦器が出土し、また東辺調査区の地覆石抜き取りには近世の土器類が含まれる。

まとめ

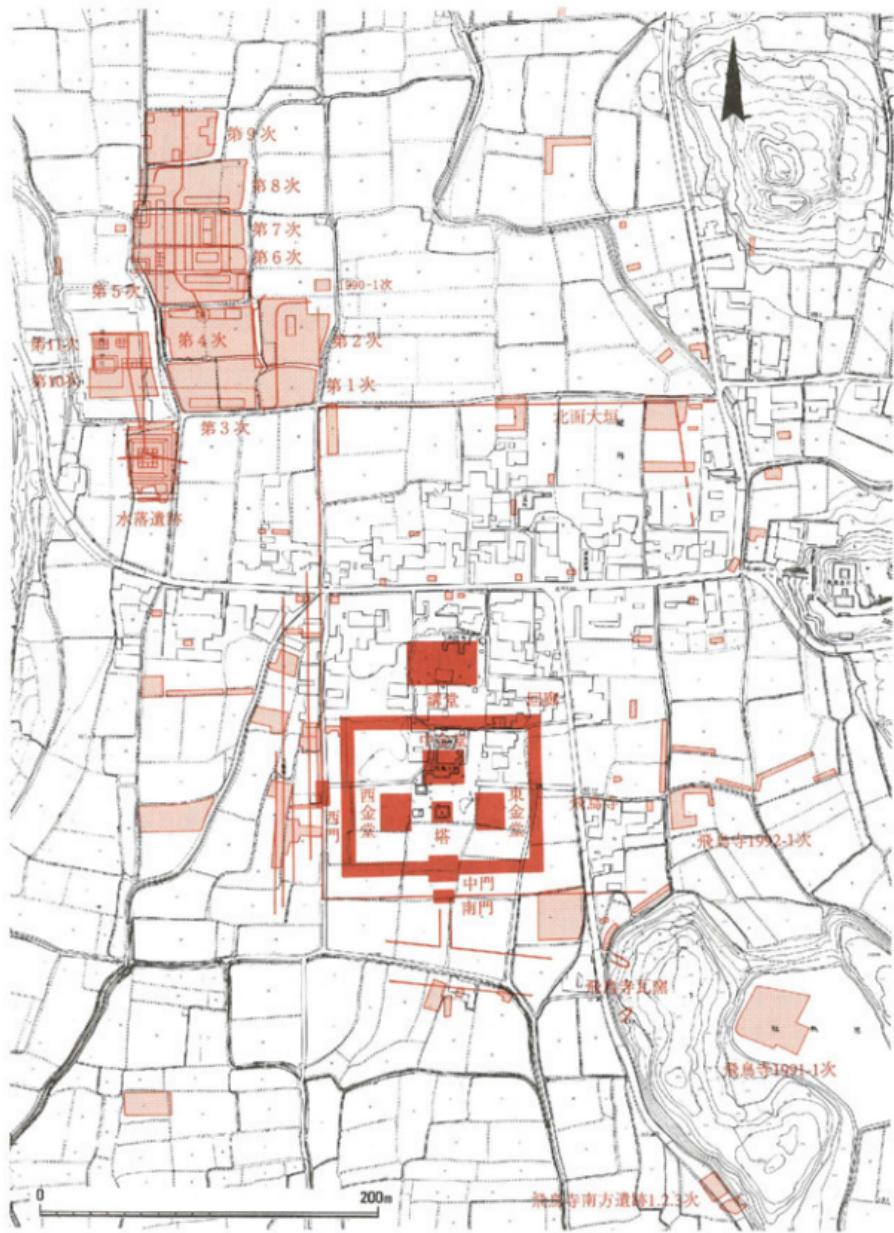
前回の調査成果と合わせて金堂基壇規模の復原を行うと、基壇は東西29.5m、南北18.2mとなる。これは平城京薬師寺の29.4m、18.3mと同規模であるといつてよい。金堂心と東西両塔心を結ぶ線との距離は29.7m（100尺）となり、平城京薬師寺の場合と同様である。また基壇築成についても掘り込み地業を行わない点や、基壇外装の地覆石、階段の状況なども同じである。基壇周辺部に玉石敷の犬走りと雨落溝を巡らせることも同じだが、犬走り・雨落溝については若干規模の異なる点がある。平城京薬師寺では階段前面が狭くなり、幅0.4mであるが、藤原京の本薬師寺では0.9mの一定した幅で基壇を巡ると推定される。また雨落溝も平城京薬師寺では0.5mの幅を有するものが階段前面で0.3～0.4mと狭くなるが、藤原京本薬師寺では幅0.55mで変わらない。

現上塙上には19個の礎石が残存するが、裳階の礎石は存在していない。今回の調査でも裳階の存在を示す直接的な遺構は検出できなかった。しかし前回の調査と同様に今回も小型の軒瓦が出土しており、裳階の存在を推定できる。

出土瓦は創建時の瓦が多数を占めるが、奈良時代から平安時代初めごろまでの瓦類も出土している。これらは平城京薬師寺でも出土している。このことは、平城京薬師寺から瓦の供給を受け、依然官寺として維持されたことを示している。しかし当代における建物の構造・規模などについては不明である。

以上のように今回の調査によって金堂の基壇の規模が復原でき、平城京薬師寺と等しいことが明らかとなり、また地覆石や周囲の玉石敷などの保存状態が良好なことも知られた。従って今後計画的な調査を行うことによって大きな成果をあげることができるものと期待される。

III、飛鳥地域の調査



第33図 飛鳥地域調査位置図

1、石神遺跡の調査（第11次）

（平成四年七～十二月）

昭和五十六年に始めた石神遺跡の発掘調査は、途中1年間の空白を除き、今年度で11回目を迎えた。第9次調査までは旧飛鳥小学校の東側で水田を一筆づつ調査してきたが、昨年度の第10次調査から、明日香村教育委員会の協力を得て、旧小学校の敷地を数回に分け調査することになり、今回の第11次調査はその2回目にあたる。

調査地は第4次調査区の西で、1棟だけ残る旧飛鳥小学校校舎と第10次調査区を隔てて水落遺跡の北にあたり、小字名を唐木という。調査面積は新規分が東西34m、南北20mの680m²で、第10次調査区の北端部分を幅2.5mで再発掘したので、総面積は765m²となる。第1次調査からの累計は11,800m²に達し、石神遺跡の規模は南北が160m以上、東西が140m以上に及び、さらに北および西へ広がることが判明している。

遺構

層序 調査区の基本的な層序は、上から校庭造成に伴う盛土、灰褐色土、含炭褐色土で、その下が黒褐色土ないし黄褐色山土の整地上となる。校庭造成時の削平は西に行くほど著しく、盛土の直下が含炭褐色土となるところも多い。遺構の大部分は整地土上面で検出したが、校舎の基礎工事などの攢乱を受けているところでは、地山を形成する灰褐色砂層ないし暗褐色砂礫十層上面で遺構を検出した。遺構面は全体に東南が高く、西北に緩やかに傾斜しており、A期の石敷面での比高差は0.2mほどである。

時期区分 これまでの調査によって、主として7世紀中頃から8世紀前半にわたる遺構を検出しており、大きくA期からD期の4時期に分けられる。

＜A期（7世紀中頃：齊明朝）＞ 飛鳥寺の寺域の北に東西大垣SA600が作られ、その北側に石神遺跡、南側に水落遺跡が営まれた時期である。石敷の広場や複雑に延びる石組溝、石敷を巡らした井戸、回廊で囲まれた大規模な建物など、多くの遺構が見つかっており、大きく井戸の北の長大な建物で囲まれた外周東

西24.7m、南北49.4mの東区画と、東を長廊状建物SB820、北を東西棟建物SB1330で囲まれた南北88m以上の西区画に分かれ、さらに北方にも特異な形状の建物や倉庫群が存在する。

＜B期（7世紀後半:天武朝）＞ A期の遺構を取り壊し、新たに整地を行い、南北堀によって区切られた空間に総柱建物や南北棟建物を配置した時期である。A期とは全く異なる遺構の状況であり、遺跡の性格が変わったことがうかがえる。

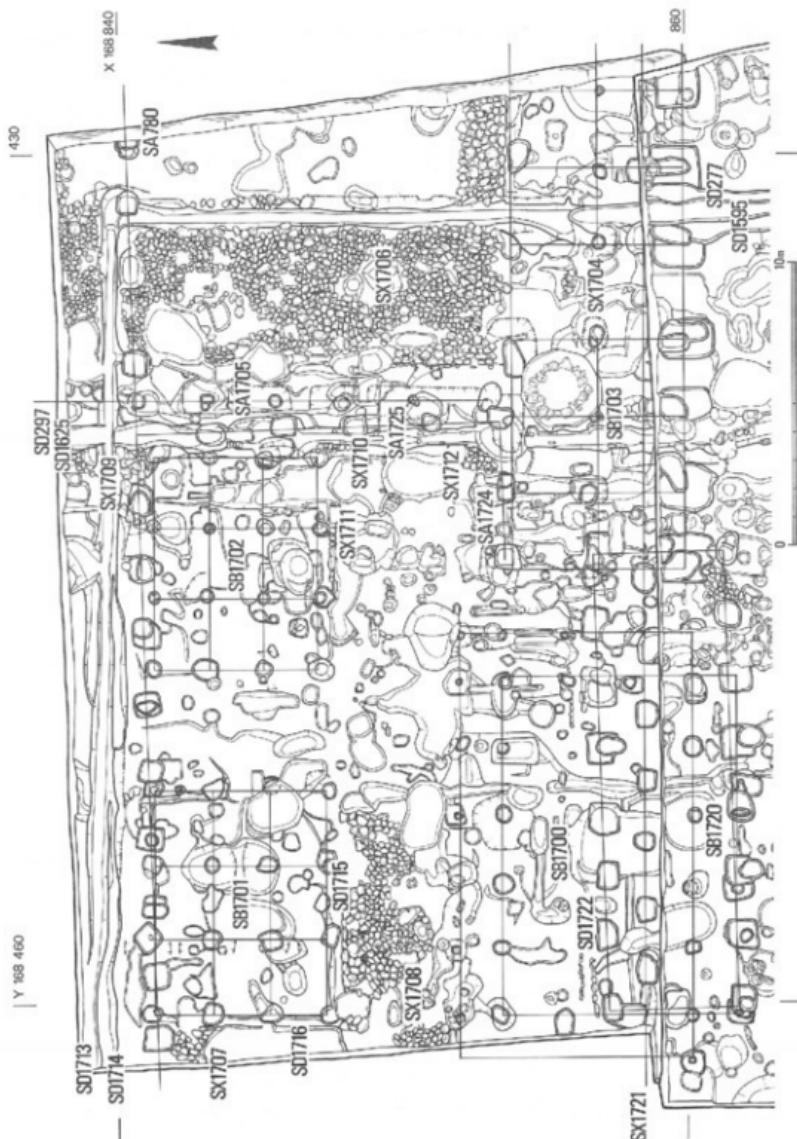
＜C期（7世紀末～8世紀初頭:藤原宮期）＞ B期の遺構がすべて取り壊されて東側に南北道路が通され、その西の掘立柱塀で囲まれた大きな区画の中に小規模な建物・井戸などが点在する時期である。

＜D期（8世紀前半:奈良時代）＞ D期には第9次調査地で検出された小規模な建物や井戸が属し、この時期の遺構はこのあたりから北に存在するようである。

今回はA期およびC期の遺構を検出した。ただし第9次調査の段階まではA期を3小期に細分してきたが、第10次調査と同様今回も時期細分の手がかりに乏しく、西区画においてはA期の遺構はA-3期のものに限られるようである。

A期 掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条、溝3条、石敷7面以上がある。この時期の柱穴には著しい特徴がある。まず柱掘形を掘って柱を立て、埋め戻した上に整地土をかぶせ、後にすべての柱を抜き取っている。しかも抜き取りはまっすぐ上向きにおこなっており、その痕跡は円形を呈する場合が多い。したがって整地土の上面では柱抜き取り穴だけが見え、整地土がごく薄いか削平された部分においてのみ掘形の輪郭が検出可能である。抜き取り穴には赤褐色の焼けた壁上の入ることがある。

SB1700は東西5間、南北3間の身舎の四面に庇がめぐる東西棟建物である。ただし南庇の両端の柱を欠くので、入り闕の構造となる。柱間寸法は桁行2.3m、梁間2.2mで、庇の出は1.5mである。柱はすべて抜き取られていた。身舎の柱掘形は隅丸方形で一辺2m、深さ1.7mに達するほどの大型なものであるが、庇の柱掘形は一辺0.7～0.8mと小型で、抜き取り穴も小さい。黄褐色山上の基壇土が一部に残っており、元は低い基壇があったものと思われる。



第34図 石神遺跡第11次調査遺構実測図 (1:200)

SB1701・SB1702はともにSB1700の北にある桁行3間、梁間3間の総柱東西棟建物で、北側柱筋を揃え、4.1mの間隔をおいて東西に並ぶ。SB1700との間に幅3.8m強の石敷SX1708があるが、SB1701の部分は石敷面より高く黒褐色の整地土を積んで基壇状に高め、石敷面より0.05mの高さまで遺存する。SB1701の南辺に沿って、SX1708との間に幅0.4mほどの溝SD1715があり、建物西辺へ向って溝SD1716となる。これらの溝は基壇外装地覆石の抜き取り痕跡であろう。柱間寸法はSB1701が東西2.6m×南北2mの等間であるのに対し、SB1702は東西2.5m×南北1.9mの等間で、SB1701の方がわずかに大きい。柱掘形は一部で検出しだけだが、一辺は2m近くあり、SB1700に匹敵する。なおSB1700の身舎西妻柱筋とSB1701の西側柱筋とが揃う。

SB1703はSB1700の東にある長大な総柱東西棟建物で、今回は6間分を検出したにとどまったが、さらに東へ延びると思われる。柱間寸法は梁間が3m等間、桁行は西3間と東2間が2.7mであるのに対し、西から4間目だけが3.3mと広い。この部分SX1704は通路のような施設であった可能性が強い。SX1704を通って北へ抜けると石敷広場SX1706となり、南方には第10次調査で検出した通路SX1620がある。西妻と側柱の柱掘形は一辺2m前後と大きいが、棟通りの柱掘形は1m前後と小型でしかも浅い。SB1703だけは斜め上方に柱を抜き取っている。なおSB1703はSB1700と棟通りを揃えている。

SA1705はSX1706の西縁の見切りとSX1710の東縁の見切り(間隔2.7m)の中央を通る南北堀で、広場と建物群を画する施設と考えられる。柱間寸法は2.5m等間で、5間分を検出したが、さらに北へと延びるものと思われる。柱掘形は南北1.5m、東西1mほどの縦長の平面形を呈し、南端の2個は布掘り風に一括して掘り込まれている。南端はSB1703の北側柱西から2間目の柱穴と重複するが、若干東北にずれており、直接取り付かない。

SD1595・SD297・SD1713は水落遺跡から延びてくる木樋などを抜き取った痕跡で、SD1595・SD1713が木樋E、SD297が木樋Hの抜き取り溝に相当する。南北溝SD1595は調査区北端近くではほぼ直角に西へ折れ東西溝SD1713へと連なる。南北溝SD297はさらに北方へ続いており、とともに水落遺跡の水時計中心部から

70m以上伸びてきることになる。抜き取り溝は上幅0.6~0.7m、底幅0.3mほどで深さは約0.8mあり、北および西へ向かって深くなる。底部には木樋の痕跡は勿論、木樋の固定に使用した粘土あるいは水が流れた形跡は認められない。

これらの抜き取り溝の両側には木樋を埋設した掘形がある。SD277がSD1595、SD1714がSD1713、SD1625がSD297に各々対応する。ともに幅1.7m前後で、断面の観察によると深さは抜き取り溝と同じで、木樋を据え付けたのち版築状に丁寧に埋め戻している。施工の順序としては、まず掘形を掘って木樋を据え付け、埋め戻したのちに整地土を置き、石を敷いている。のちに石敷を壊し、溝をうがって木樋を抜き取ったが、抜き取り溝には焼土が含まれているので、抜き取ったのは周辺の建物が焼けたあとのことである。SD1713とSD297は調査区北端近くで交差する。この部位には桥のような施設があったはずで、一辶1.2mほどの方形に掘形が深くなっていた。なおSB1703とSD277の前後関係については、第10次調査の南側柱の場合、SB1703の柱掘形が先でSD277は後であったが、今回の北側柱では逆転した。それは両者の工事が同時に行われ、部分的に施工手順が前後したためと考えられる。

SX1706はSB1703の北に広がる石敷で、南はSB1703の北柱筋に據えて見切りとし、部分的にではあるが柱掘形を覆っている。また西も同様にSA1705に対して見切りを設けており、その範囲は東西9.6m以上、南北15.6m以上となり、広場と呼ぶのがふさわしい。

SX1707はSB1701の西北にわずかに残る石敷である。SX1708はSB1700の北とSB1701の南に広がる石敷で、SB1700の北庇、SB1701の南側柱に沿って見切り線が通る。SX1709はSB1702の東北、SX1710は東南にわずかに遺存する石敷で、SX1711はSB1702の南辺に沿う石敷であるが、わずかに数石が残るのみである。SX1712はSB1703の北、SA1705以西に広がる石敷である。

以上の石敷は遺存率がはなはだ悪いが、A期の建物の柱筋に合わせて縁を通しており、これらはすべて一連のものであったと考えられる。したがって建物の外部はすべて石敷であったことになる。これらは通路としての機能のほかに、雨落ちも兼ねていたであろう。なお地山が砂質であるためか、整地土の薄い箇

所では石敷が陥没していることがあり、石敷面にはかなりの凹凸が認められた。人頭大から一抱えもありそうな自然石の、比較的平坦な面を上にそろえて敷くのであるが、敷き方には一定の法則性があるようである。まず大型で直線的な辺を持つ石を選んで石敷きの範囲を予め囲み、縁の部位に見切りを作る。次に数メートルおきにやや大振りの石で枠形に仕切り、あとは石の形に従ってその間を埋めてゆくのである。

C期　掘立柱建物1棟、掘立柱塀3条などがある。ほかに多数検出した上坑の人は、出土遺物からみて、当期に属するものと考えられる。

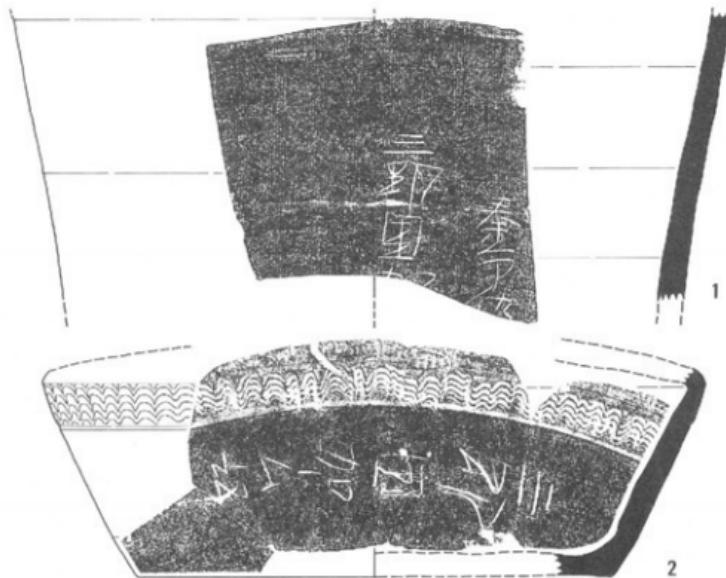
SB1720は東西7間、南北2間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行・梁間ともに2.3m等間である。SB1700と重複し、SB1700より新しい。北で西に約2度振れる。柱掘形は一辺1mほどの方形で、柱はすべて抜き取られている。北側に沿って部分的に石組溝SD1722が遺存する。SD1722は北雨落溝と考えられる。なおSB1720の内部には東西に7個の柱穴が並ぶSX1721があるが、柱穴内部の埋土や振れがSB1720とは違っており、性格は不明である。

SA780は調査区北端部を横断する東西塀で、13間分を検出した。柱間寸法には若干のばらつきがあるが、平均2.4mである。SB1720と同じく北で西に約2度振れる。これは第4次調査で検出したC期の区画南限施設である東西塀SA780の西延長線上にあり、一連のものであるとすると、その総延長は25間以上（60m以上）の規模となる。SB1720はこの区画の南外方にあり、別の建物群が存在したことになる。

SA1725はSD297の東沿い、A期のSA1705の西をほぼ並行する南北塀で、4間分を検出した。南端で西へ鍵の手に折れSA1724となる。SA1724は2間を検出しただけである。柱間寸法はともに2.4m等間で、SD297と重複関係があり、SD297より新しい。これらは、当初柱穴の埋土がC期のものと異なるためにB期と見たが、ほかに関連するB期の造構はなく、SA780から派生してきており、振れがC期の建物・塀と共に通るので、C期に属すると考える方が妥当であろう。そうであるとするならば、このSA1724・1725はSB1720の北方に広場的な空間を形成するための施設となる。

出土遺物

土器、瓦、金属製品、石製品、土製品がある。いずれも整理途上にあり、ここでは特徴的ないくつかに触れておく。土器には含炭褐色土やC期の土坑等から出土した7世紀代の土師器、須恵器が大量にあり、ほかに平安時代の灰釉陶器などがある。土師器では東国系の黒色土師器杯が往々される。これはこれまで主に第3～8次調査区で多量の飛鳥IV～Vの土器に混じって、完形に近い形で少量出土しており、飛鳥地域でも石神遺跡から特徴的に出土する土器である。須恵器では文字を範書きしたものが注目される（第35図）。1は直口の大型鉢の体側部に縦位に書かれ、「秦人マ佐□／三野國加□」と判読される。2は平瓶と思われる偏平な壺の体側部に横位に書かれ、「三野國加々ム（牟）評□□」と判読される。これは大宝律令施行以前の国評制下で生産地において書かれたと推定される。また肩部には櫛描き波状文が見られ、この時期の平瓶としては特異である。石神遺跡では第5次調査の「甕五十戸」をはじめ、幾点か



第35図 刻字土器実測図 (1 : 2)

の籠書き土器が出土しているが、その中には愛知県小牧市篠岡78号窯出土のものと同じ「尾山寸」「山寸」「久」等の文字を刻んだものがあり、土器の特徴は尾北古窯跡群に類似する。今回の籠書き土器も須恵器の年代観や飛鳥地域への供給元を解明する上で貴重な資料である。瓦は軒瓦に角端点珠式の素弁蓮華紋軒丸瓦1点、四重弧紋軒平瓦11点があるだけで、丸・平瓦は極めて少ない。鉄製品には釘、鍵、錐、斧、鎌、刀子、紡錘車等既往の調査出土例と同じ種類のものがある。石製品には砥石、紡錘車、石鐵等があり、ほかに凝灰岩質砂岩の切石、室生安山岩の板石、サヌカイトの剥片等がある。土製品には轆羽口、土馬、土製円盤、硯等があり、他に赤褐色に焼けた壁土がある。土馬は鞍を突きと竹管文とで表現し、7世紀代の土馬の特徴をよく示している。硯は獸脚円面硯の脚部で、胎上などから新羅製と目される第4次調査出土例と同一個体である。彼我は約50m離れて出土したことになる。壁上はA期の柱穴などから比較的多量に出土した。スサを多量に混ぜた下地に厚さ0.5~1cmの白土を塗っている。下地層には壁小舞の痕跡と思われる空洞が残るものがある。

まとめ

第10次調査に引き続き石神遺跡の西南部を調査した結果、A期の西区画の様相がより具体的に把握出来るようになった。

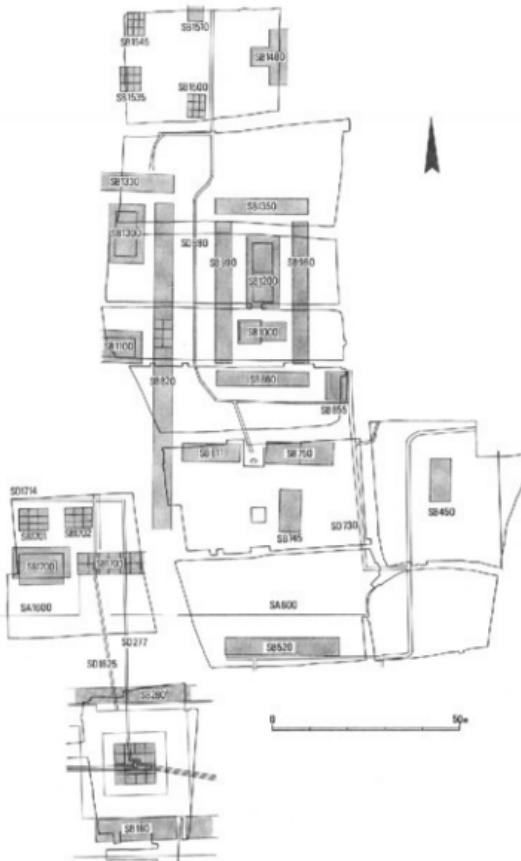
西区画の東を限る長廊状建物SB820の南端部は旧小学校東側の里道の下にあるため、推定の域を出ないが、調査区東南部で検出したSB1703を桁行6間と考えれば、SB820はさらに南に延びて両面を画するSA600に突き当たる。またSB1703の桁行が9間であるとすれば、SB820はSB1703の北で終わって、SB1703が区画の南限を画することになる。後者を採用すると、西区画の南北長は外寸で106m余りになり、これは高麗尺で300尺の完数が得られる。この区画の南限線上に四面庇付きの東西棟が建つことになる。SB820は梁間1間で柱間が5mとなり、北限のSB1330も同様であったが、SB1703の場合は梁間2間で柱間が6mと規模が大きくしかも総柱である。両面を重視した表れであると理解したい。西区画の東西の規模は42m以上で、飛鳥川東岸近くまで広がっていたことになる。

東区画はきわめてコンパクトにまとまった配置をもち、石神遺跡の中でも重

要な役割を果たした施設の一つと推定できる。一方、西区画の内部には、幅9.6m以上の石敷広場の内側をさらに塀で仕切り、建物を密に配置し、そして建物外をすべて石敷とするなど、西区画は東区画より大規模かつ中枢的な施設であった可能性が高くなりつつある、と言えよう。

水落遺跡に発した木樋が石神遺跡の奥深くまで延び、1本はさらに北進し、1本は西へ折れ曲がることが判明した。水落遺跡と石神遺跡はSA600で隔てられているけれども、別の空間として機能していたのではなく、一体の空間として利用されたのである。これらの水を利用した噴水などの施設は今回も見つかなかったので、さらに北あるいは西における今後の調査に期待したい。

C期のSA780は当初からその存在が予想されたが、塀による区画のさらに南方にもC期としては規模の大きいSB1720が見つかり、藤原宮期まで当地が総体として利用され続けたこともほぼ確かになった。



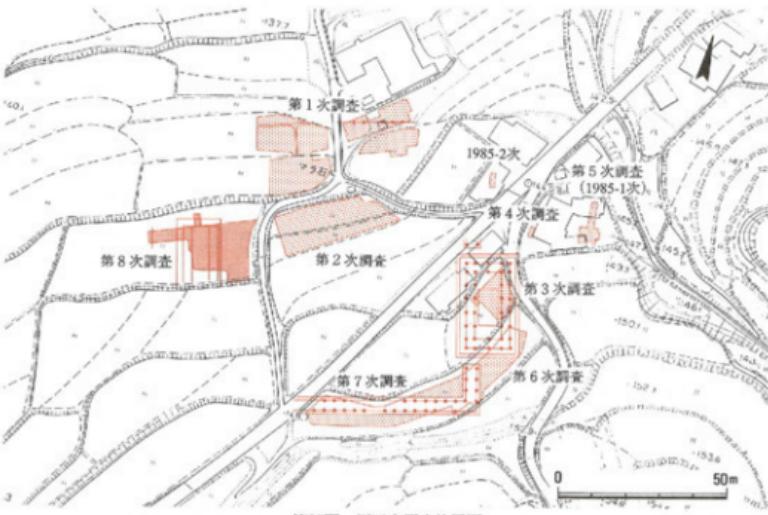
第36図 石神遺跡A期主要造構配置図(1:1500)

2、坂田寺の調査（第8次）

（平成四年四～七月）

この調査は、マラ石の西南20m、奈良時代の坂田寺の西面回廊が想定される南北里道に西接した水田における家屋新築に伴う事前調査である。調査地を含めた里道西の3枚の水田は、奈良時代の伽藍と同じ方位をもって東西60m以上にわたって広がっており、関連遺構の存在する可能性があることから、調査は、当初敷地の東端に幅6～7m、長さ17mの南北トレンチと、敷地の北端に幅4mで敷地の西端まで長さ32mの東西トレンチとをL字形に設定して、西面回廊関連遺構の検出と寺域の広がりの確認とを目的として実施した。その後、検出された基壇建物の中央部と北端とを確認する目的で、それぞれ10m四方と1×2mの拡張区を設けた結果、調査面積は330m²となった。

調査地の基本層序は、上から耕土、床上、茶灰色砂質土で、調査区の中央部ではその下で建物の基壇土である褐色土が検出され、その東と西には暗灰色粘質土、黒灰色砂質土の厚い堆積層が認められ、西端はさらに深くなつて黒灰色



第37図 坂田寺調査位置図

粘土が堆積する。建物の東側では瓦を含む黄灰色砂質土、黄灰色粘土の整地土、灰褐色砂質土が認められ、それらは北で厚くなる傾向にあっていずれもが周辺地の造成に関わる土層と考えられた。なお一部で瓦を含む整地上を除去して下層遺構を検出した。

遺構

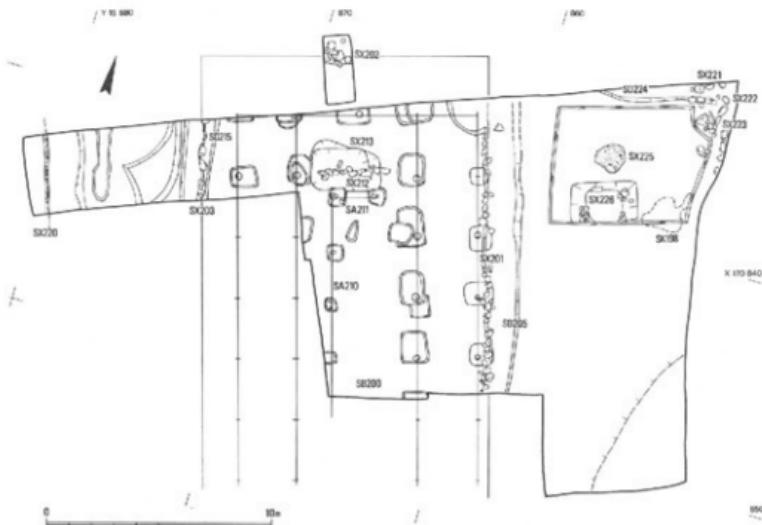
検出した遺構には西面回廊の基礎地業にかかる石列、基壇を持った掘立柱建物とその雨落溝、小石で築いた石列などがあり、整地土下の下層遺構に炉跡や土坑がある。

掘立柱建物SB200は調査区の中央で検出した南北棟建物で、梁間2間の身舎の東西に庇が付き、桁行は6間以上の規模である。柱間寸法は桁行梁間ともに2.7m(9尺)等間で、庇についても同様である。身舎の柱掘形は桁行方向に長い傾向にあり、1.1×1.5mの長方形で深さは約1.2mである。いずれの柱掘形にも直径20cmほどの柱痕跡があり、その内の一本には底に柱根が遺存する。柱は柱掘形の中央ではなく一方に偏する傾向にあり、柱の下に石塊を詰めたものがある。庇の柱穴は身舎の柱穴よりもやや小さく、掘形の規模は一辺0.9×1.0m、深さ0.6mで、柱痕跡は直径15cmほどと細い。

SB200は縁石を巡らせた基壇をもつ。縁石は調査区の都合で、西辺の北半と北辺の一部および東辺とを確認したにとどまるが、直径30～40cm大の自然石を並べたもので、北半にのこる最下段の石は南北方向に長く配置されているのに対して、東辺の南半は乱雑に崩れた部分が多く、その基底部を確定し難い。北半の縁石基底部で測った場合の基壇の東西規模は12.8mほどとなる。東辺では縁石の下底部は南に高く北に低くなっている、その差は0.2mほどある。さらに東辺と西辺とでは、西辺が0.5mほど低い位置にあって、見かけの基壇高は一定しないことになる。基壇検出面の高さは南で高く北に低く、その差は0.4mほどである。基壇上面が水平であった場合、基壇高は西北部では1.1mで、東南部では0.4mと推定され、基壇縁の構造は一様ではなかったであろう。基壇の北端は、調査対象敷地外を土地所有者の了解を得て一部調査した結果、北妻柱の北2.7m(9尺)の位置で検出された。縁石は0.4m大の石で一段遺存し、その下

底部は西辺の縁石と同高にある。縁石外には暗灰褐色粘土が堆積し、大型石塊や瓦、埴が出土した。建物から基壇縁石までの距離は東では0.6m(2尺)、西では1.5m(5尺)ほどあり、東・西辺で異なっている。このことは見かけの基壇高が東よりも西で高いと推定されることとともに、この建物の意匠や正面観の問題と関わる重要な課題であるが、後考をまちたい。なお東庇の柱掘形は基壇縁石の下で検出され、縁石の外装は建物を建てた後に行なわれている。

基壇内では北から一間目の身舎梁間に石列SX212、土坑SX213が検出された。SX213は東西2.9m、南北1.8m、深さ0.5mで、下層に純粹な木炭細粒層が堆積する。木炭細粒層は南で厚く15cmほどあり、北では2cmと薄くなるうえに、南端が基壇検出面で検出されるのに対して、北端は基壇を構成する上層の間に入り込んでいて、南端と同一面では検出されない。石列SX212はSX213の木炭細粒層の上を覆う黄色粘土層中にあり、30cm大の塊状あるいは偏平な石を2~3段積み上げている。石列は建物SB200の柱筋と同じ方向にいくぶん北によった位置に並んでおり、東西長は3.5mである。列の中央部がやや低くなっていて上



第38図 坂田寺第8次調査遺構実測図(1:250)

端は必ずしも平坦には揃っていない。土坑・石列は想定される基壇土の高さからすれば、最も高い石列の右が0.3mほど下にあって、基壇土中に封じ込められていたと考えられる。SX212・213は建物の柱筋と揃う位置にあり、構築物と考えられるが、その性格は明かにし得なかった。調査区北端の上層観察によれば、基壇形成土には他にも純粹な灰色砂や炭化物層が塊や屑をなしている部分があり、それらには7世紀前半代の上器が含まれている。基壇全体の築成は北と西に分厚くなされていて、同一面でみた場合、積土層の違いが南北方向に認められる。これは基壇の造成がそれ以前の傾斜地を埋めるようになされた結果であり、土坑状の落ち込みSX213とその上に東西に並ぶ石列SX212も他の炭化物層と同様に、基壇築成時に形成されたものと思われる。

基壇内の施設には他に、南北柱列SA210と東西柱列SA211がある。柱穴は一辺0.8mの方形で、深さ0.4mある。SA211の2個の柱穴のみが黄色山土と炭の混じった土で埋められ、他は灰褐色粘土で埋められる。柱穴底に20~30cm大の石が遺存するものがあり、柱をうける礎盤と考えられる。石の上面の高さは推定基壇面下0.4mにある。SA210はSB200の身舎梁間の1/3の位置にあり、柱間は2.4m等間である。北端から4本目の穴が、SB200の北から5本目の穴と柱筋が揃っている。東西柱列SA211は2本で構成され、SB200の身舎梁間を3等分する位置に配置されている。SA211の柱はいずれもSX213の南辺を削っていて、それよりも新しい。柱筋がそろうこと、身舎の内に限定されることから、建物と深い関わりがあり、柱間が異なることから、床束の一部である可能性があろう。

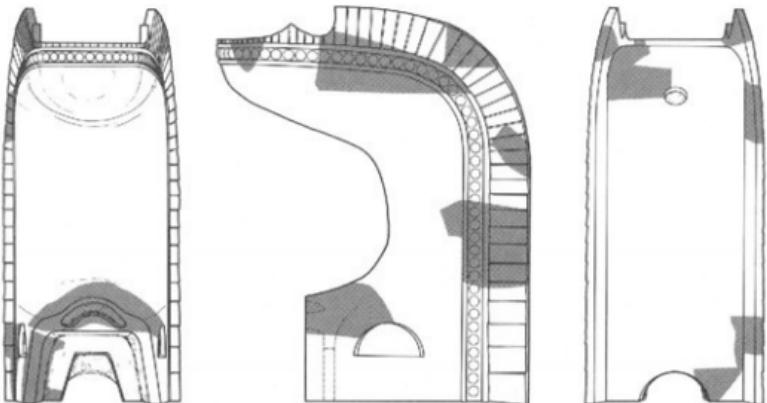
基壇縁石の外側には浅い素掘り溝SD205・215がある。東のSD205は幅1~1.5mで南が幅狭く、深さは0.3mである。埋土は黒灰色砂質土で金属製品、土器、瓦片が含まれる。西のSD215は3.5m分を確認したにすぎないが、幅0.9m、深さ0.2mほどで暗灰色粘土が堆積する。埋土からは鉄製品・土器片が出士した。

基壇の西外方は北へゆるやかに下降する平坦面が広がるが、縁石の西6.9mには南北方向の小石列SX220がある。小石列の西側は段をなして0.35m低くなってしまっており、そこには瓦や土器を含む暗灰色粘土が堆積する。小石列は15cm大の石を立て並べて粘土で裏込めしたもので、幅0.9m以上の溝の東壁である可能性

があるが、調査区内では西岸は検出されなかった。

基壇の東外方には瓦片、鷗尾片を多量に含む黄灰色粘土の整地土層がある。整地土上面は基壇縁石下端と同じ高さにあり南で徐々に高くなるが、整地土も南で薄くなり、調査区の南端付近では灰色粘質土が現われる。整地土の上面には、 1.7×1.3 mの不整円形で深さ5cmほどのくぼみ状の土坑SK198がある。土坑からは平城IVの時期の土師器・須恵器が面をなして出土し、この土坑の検出面が生活面であった時期のあることを思わせる。

整地土の東端には、石列SX221・222・223があり、瓦層は石列SX223の下に潜り込んでいる。石列SX221・222は東西方向の石列で、1.8m分を検出した。その西は素掘り溝SD224となり西方へ延びている。石列の並びは乱雑であるが、2条の石列間に素掘り溝の堆積土と同様の土が延びて行くことから、この2条の石列は石組暗渠の側石を構成するものと思われる。石列の東端は後世に破壊されて明らかでないが、調査区の東壁には黄褐色粘土や黄灰色砂質土からなる積土層が見られ、それに向かって延びているようである。黄褐色粘土の積土層の中にある南北方向の石列SX223は、東壁にかかる形で検出したために、その規模・構造とも明確でないものの、西に面を揃えて南北方向に配置され、背面の積土層が第2次調査で確認した段状の盛土に類似することから、その基底部す



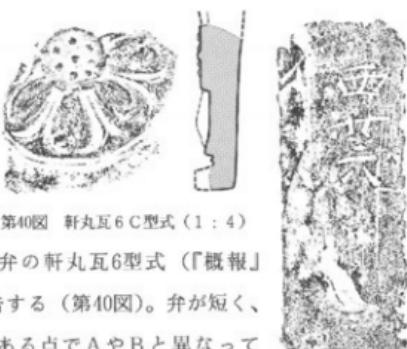
第39図 板田寺出土鷗尾復原図（1：4）

なわち西面回廊の基礎地業の一部であると考えられる。

整地土層の黄灰色粘土層は30cm以上の厚みをもつが、一部でそれを除去したところ、下面の灰褐色砂質土層上面で、下層遺構である土坑SX226と炉址SX225が検出された。SX226は東西3m、南北1.8mの長方形、深さは0.6mである。検出面では短辺と同方向に並ぶ石列が認められ、北辺にも大型の石が確認され、その内部は粘土層で埋められていた。粘土層中には大型の石塊が投棄されており、粘土層がそれら石組の抜き取り穴にあたるものと考えられた。破壊が著しく明らかな点も多いが、長方形掘形の内側に石を積み上げ、内部に貯水する構造であったと思われる。炉址SX225は、土坑SX226の検出面と同一面に広がる炭化物層として検出された。炭化物は直径約1.1mの不整円形に広がり、小石が直線的に並ぶようであるが、下面などに焼けた面は認められない。

遺物

瓦類、土器類、金属製品などがあるが、瓦の他は少量である。軒瓦は飛鳥時代初めから平安時代のものがあるが、7世紀末以降のものはほとんどない。大半は既出の資料と同内容であるが、坂田寺式重弁の軒丸瓦6型式（『概報』22）に新種があるので6Cとして報告する（第40図）。弁が短く、低い中房と中房蓮子の配置が1+7である点でAやBと異なっている。また整地土の黄灰色粘土などから鶴尾の断片が多量に出た。鶴尾はこれまでに坂田寺Bとして報告されたもの（『日本古代の鶴尾』飛鳥資料館）と同型式であるが、ほぼ全形を復原しうる各部の資料を得たので復原図を示す（第39図）。なお基壇北端埋土から出土した壙の中に、「西廿六」とヘラ書きしたものがある（第41図）。土器は7世紀前半代から12世紀後半までのものがある。種類には土師器、須恵器、黑色土器、瓦器、三彩陶器、綠釉陶器、灰釉陶器などがあり、土師器には灯明皿に使用されたものや墨書の残るものがある。墨書土器は底部外面に、坂田寺の法号「金剛寺」の省略と思われる



第40図 軒丸瓦6C型式（1：4）



第41図 文字壙（1：4）

「金」一字を大書したもの3点で、いずれも平城宮IVの土師器杯Aである。三彩陶器は薄い板状の破片で八弁の花文を線描きと彩色とで表現する。陶枕の断片であろう。土製品には輪羽口、土馬、土製小仏像がある。土製小仏像（裏表紙）は頭部の断片で、基壇東の包含層から出土した。胎土等は第7次調査出土例（『概報』22）と酷似するが、宝冠の形状が異なっている。金属製品には銅釘、線彫りのある金銅板、小金銅仏の光背支柱、鉄釘、鐵板などがある。光背支柱は直径0.8~1.2cmの円棒で、外表に竹の節の表現がみられ、上方で湾曲する長さ15cmの断片である。そのほか石製品に比較的多量の凝灰岩質砂岩の切石や室生安山岩の板石などがある。

まとめ

今回の調査成果は、西面回廊の外側に基壇をもつた掘立柱建物が発見されたことにある。回廊西側の伽藍と同方向の水田地割の中に、それらと同一方向に営まれた建物や石列などの遺構を検出したことは、この地割が奈良時代の坂田寺の寺域と関わるとの想定をより確実なものにした点で大きな意義がある。以下では今回の成果がかかる問題点に触れ、まとめとする。

まず建物の造営廃絶の年代について。調査では造営年代を明確に示す遺物、遺構は検出されなかった。しかし周辺の状況から推測すると、建物の基壇土中に7世紀前半の土器や7世紀代と思われる瓦片が含まれ、建物周囲には7世紀後半までの瓦を使った整地土層が広がっていることから、建物の造営年代を8世紀以後とすることができる。整地土の瓦が8世紀の造営になるとされる段の基礎地業の下に潜ることも傍証となろう。また整地土上の土坑SK198等に8世紀後半の平城宮IVの上器が比較的良好な状況で含まれていたことから、存続年代の一端をその時期におくことができ、東西の雨落溝に9世紀から10世紀代の

	1A	3
	3A	1
	4A	1
	6A	10
	6B	1
軒	6C	12
	7A	1
	8A	4
	11A	1
丸	21A	26
	21B	3 (33)
	32A	1
	小計	53 (60)
軒	101A	1
平	104A	1
瓦	小計	2
	軒瓦合計	55 (62)
道具	種先	2
	熨斗	2
瓦	面戸	2
	鰐尾	2種4個体
	線刻丸瓦	1
	刻印丸瓦	2
	線刻平瓦	1
	刻印平瓦	2
	磚	6

第4表 坂田寺第8次調査出土瓦点数
○内は型式不明・種不明を含む

土器が含まれ、それらを覆うように堆積した黒灰色粘質土には10世紀前半代から12世紀後半代の土器が含まれている。建物の廃絶が、第6・7次調査で判明した回廊の廃絶年代とほぼ一致するものと考えられる。

なお第3次調査で検出した仏堂は、須弥壇の鎮壇具の構成から西暦865年以後の造営と考えられており、それに取り付く回廊は少し遅ながらも同時期の造営とされている。しかし第1次調査で検出された石組溝からは「金」「知識」などの墨書のある平城宮II～III（8世紀前半代）の上師器が出土し、第6次調査で検出した回廊東雨落溝からは灯明の痕跡の見られる8世紀前半代の土師器が出土していて、この時期に寺院として活動していたことは明らかである。今回検出した掘立柱建物は8世紀前半代以後に造営されたと想定され、この時期の坂田寺の遺構である可能性をもっているが、明証に欠ける。

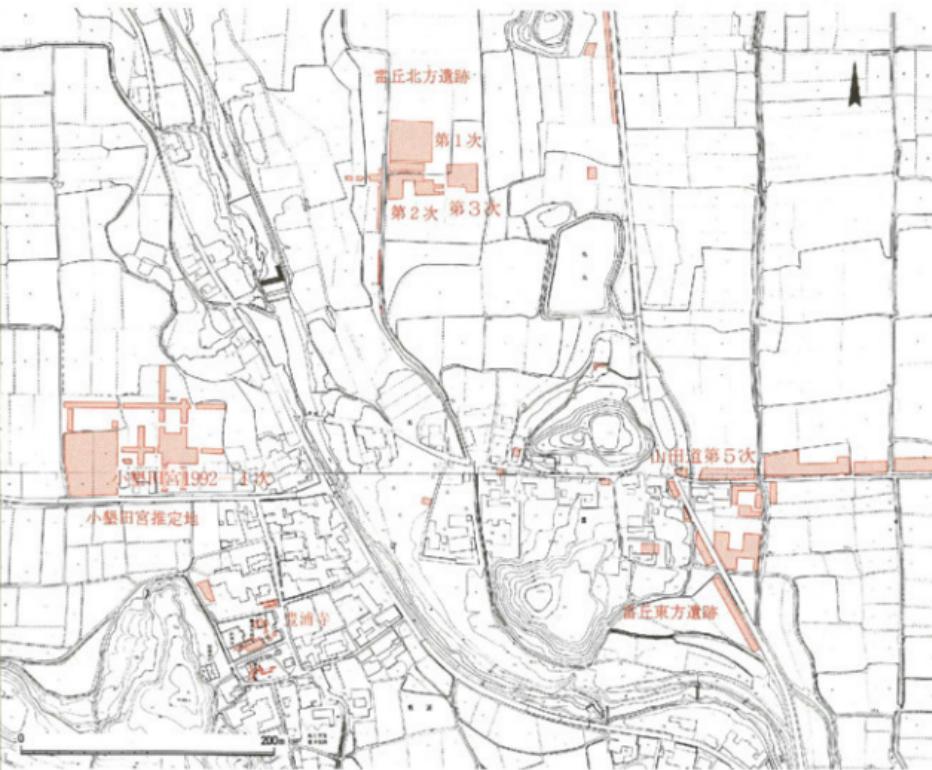
次ぎに掘立柱建物の占める位置について。掘立柱建物の基壇の東縁は西面回廊の基礎地柔と考えられる石列SX223の西10.4mにあり、また基壇の北縁は第2次調査で検出し、北面回廊の基礎と考えられている石垣SX120と揃う位置にある。建物の南北長は明らかでないが、仮に6間とした場合、南端は回廊の南北中軸線の北8mほどに位置することになる。一方、柱列SX210と建物の柱筋との関係から南北長を8間と仮定した場合には、3mほどしか余地がなく、西面回廊の南北幅の前面を塞ぐ位置に建つことになる。今回検出した掘立柱建物は、基壇の中央ではなく、東辺に寄って建てられ、基壇の周囲は東側が西側よりも0.3mほど高く造成されている。このことは、建物の正面が西であることを示すと理解されよう。奈良時代の坂田寺は第3次調査の仏堂が西を正面として建てられていることから、伽藍の正面は西であると考えられ、西面回廊の中央に中門が想定されている。今回の掘立柱建物は中門と南門との間に位置することになり、伽藍の構成を他の平地の寺院と同様に考えることができないことになる。この周辺の利用状況が奈良時代の坂田寺の寺域の広がりや伽藍の構成を考える上で重要な位置を占めることを改めて認識させるものである。

なおこの地域は市街化区域に指定されており、今後も宅地化が進むことが予想される。坂田寺の寺域や伽藍の範囲の速急な確認が望まれる。

3、山田道の調査（第5次）

（平成四年八～九月）

この調査は、県道権原神宮東口停車場飛鳥線拡幅工事に伴う事前調査である。現県道は古道山田道を踏襲し、藤原京京極にもあたると推定されていることから、平成二年度以来継続して調査を行っており、今回はその第5次にあたる。調査地は明日香村雷で、県道の北側、百貫川から雷丘の交差点までの65mほどが調査対象地である。調査は、南北10m、東西40mの調査区（東区）とその西



第42図 山田道・小野田宮推定地調査位置図

方に10mほど離れて小規模な調査区（西区）を設けて行った。

遺構

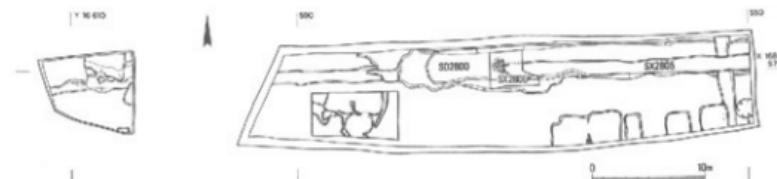
東区では0.5~0.9mの盛土下に旧水田面があり、それから下へ順に耕土、床土、暗茶褐色粘質土、灰褐色粘質土（地山）となる。遺構検出は灰褐色粘質土上面で行った。調査区中央部の東西10mの部分は西北方向の谷筋となっており、7世紀後半に山土を入れ整地している。その厚さは深い所で2mを越える。

西区も東区と同様0.5~0.8mの盛土があり、その下が耕土、床土、淡黄褐色粘質土、茶褐色粘質土（地山）となり、茶褐色粘質土上面で遺構検出を行った。遺構検出面は東区より0.6~0.8m高い。

検出した主要な遺構は7世紀代の東西溝、東西溝状の遺構で、その他に土坑群がある。

東西溝SD2800は幅3m、深さ0.5mの素掘りの溝で、調査区東端から32mほどで西端となる。堆積土は砂質土で、最上層は灰色粘土で埋められている。堆積土からは藤原宮期を中心とする土器類が出土した。また最上層からは奈良時代の軒平瓦(6691F)が出土している。

東西溝状遺構SX2805はSD2800の南半にそれとほぼ重複する位置にあり、SD2800の底部で検出した。幅1.3~1.4m、深さ0.9mで、壁面は垂直に掘られ、埋土は均一の粘質土で、水の流れた形跡は認められない。また埋土上面で柱穴などは検出されなかった。西端は調査区東端から22m、調査区中央部の谷地形の中心付近で確認した。谷部分は黄褐色山土で埋めたてられているが、溝状遺構もこの部分では東側と異なり、山土で埋められている。西端部底面の高さは東端より0.9m低い。西端部のすぐ西側には東西1m、南北1.5mほどの範囲で河原石



第43図 山田道第5次調査遺構実測図(1:500)

の集まる部分SX2806がある。SX2805およびSX2806の時期は埋土から遺物が出土しないために不詳だが、西端部の埠土である黄褐色山上から出土した土器からみて、7世紀後半以前と思われる。

調査区東半南辺部および西端10m部分で多くの土坑を検出した。東側の土坑はほぼ方形で、大きいものは一辺3mをこえ、深さは0.6～0.7mで、埠土に砂の人るものが多い。壁面は垂直あるいはえぐり込まれている。西側の土坑は不整形のものが多く、重複が著しい。調査区西端部はほぼ全面が土坑群で覆われる状況である。地山面が灰白色・灰褐色粘土であることから、粘土採取の穴である可能性がある。出土遺物は少なく、時期は不詳である。また西区の東北部分でし字状の落ち込みを検出したが、壁面が垂直にたちあがる状況や埋土の様子から、東区と同様の土坑の可能性が強い。

まとめ

今回の調査によって、雷丘のすぐ東側における土地利用の一端が明らかとなつた。第2・3次調査では幅2.5mの藤原宮期の東西溝SD2540を検出し、これを北側溝とする東西道路SF2607の存在が想定された（『概報』21）。今回検出したSD2800は、西でやや南に振れる方位をもつことからすると、SD2540の西延長線上にあたる可能性があり、また時期的にもSD2540と一致する。

SD2800底面で検出したSX2805は、7世紀後半以前の遺構である。谷筋にその西端があり、底面の高さも西が極めて低いことから、西北方向に向く谷への排水用の溝とも考えられる。しかし垂直に掘り下げた壁面や埋土の状況などから溝とは考えにくい点もあり、その性格については不明である。

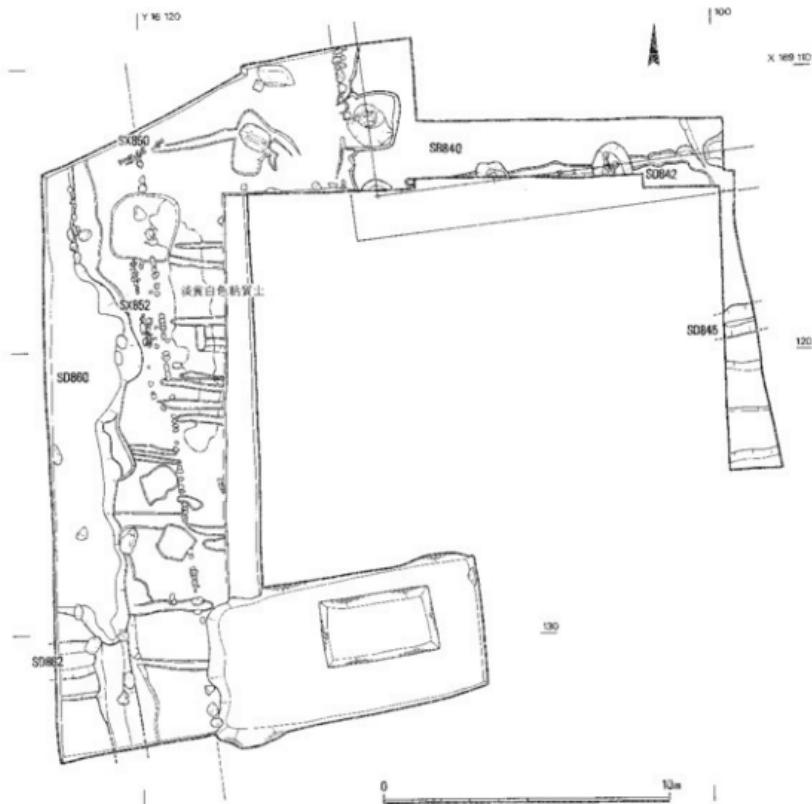
調査区中央部を中心として7世紀後半に整地の行われたことが明らかとなつた。時期的にみて、南接する出丘東方遺跡の造営と関連するものであろうか。

これまで第1次から第5次にわたって古道山田道を探る調査を行ってきた。調査区設定の制約などから、残念ながら藤原宮期を越る時期の遺構の存在についてはなお不明であるが、東西溝SD2800の検出により、少なくとも藤原宮期には雷丘の裾部までこの溝を側溝とする東西道路がのびていた可能性が強くなつた。今後周辺の調査によって藤原京京極の状況を解明することが必要である。

4、飛鳥寺の調査（1992-1次）

（平成四年七～九月）

この調査は住宅建設に伴う事前調査として、高市郡明日香村大字飛鳥で行ったものである。調査地は飛鳥寺の塔の真東にあたり、伽藍中軸線から140mほど離れた水田である。諸般の事情により調査区の設定にはかなりの制約をうけ、複雑かつ狭隘とならざるを得なかった。調査面積は270m²である。



第44図 飛鳥寺1992-1次調査遺構実測図（1:200）

寺域と周辺調査 これまでの数次にわたる調査によって飛鳥寺の寺域は東限を残してほぼ確定したといえる。まず昭和三十一～三十三年の当研究所による調査で、中心伽藍とともに南門とその南に広がる石敷広場および西門が確認され、寺域の南限と西限が判明した。これによって寺域は2町四方、また中心伽藍中軸線はその西3分の1に偏っていることなどが推定されるに至った（『飛鳥寺発掘調査報告』）。しかし安居院の北方220mの地点で行われた昭和五十二年の調査において東西塀SA500とそれに平行する外濠SD501、内濠SD503などが検出され、実際にはこれらが飛鳥寺の北を画する施設であったと判明し、寺域が従来の推定より北へ1町広がり、南北3町であることが明らかとなった（『概報』8）。次いでそこから東へ100mほどの地点で行われた昭和五十七年の調査では、SA500、SD503が南に曲折して南北塀SA600と南北溝SD601へ連なることが明らかとなり、これらが東限を画する施設であると考えられるに至った（『概報』13）。SA600は北で西に約8度振れ、SA500と直角には交わらない。寺域の西北隅想定位置からその交点までは213mあり、これは南北324m（3町）のほぼ三分の二（2町）になるが、南で東に開くことを考慮すると南端では東西2町以上となる。ただし東限については調査が北端部のみで行われており、このまま南へどれだけ延びるか明らかでない。

昭和五十七年の調査成果にしたがってSA600を延長した場合、今回の調査地のやや東を寺域の東限線が通ることになり、調査地全域が寺域の内部となる。しかし伽藍中軸線から西限までが70mで、東限までがその倍であると仮定した場合には、調査区内を東限線が通ることになるので、寺域の東限を画する施設が検出される可能性があった。また調査地の北部が西門の対称位置にあたり、東門の存在も予想された。

また昭和五十九年には今回の調査地のすぐ東側を通る農道の改修工事に伴って調査が行われ、7世紀前半代と考えられる瓦を多量に含んだ炭・焼土屑とそれを切り込む礎石落し込み穴を確認しており、この付近に礎石建ち建物が存在した可能性を示唆した。

遺構 調査区の層序は東と西でやや趣を異にする。東では上から順に耕土、床

土、灰褐色粘質土、黄灰色砂質土、赤褐色土（焼土層）、暗灰色粘質土、炭化物層、青灰色粘土となるのに対して、西では耕土、床土、黄褐色粘質土、灰褐色砂質土、暗灰褐色粘質土である。それぞれ赤褐色土と暗灰褐色粘質土の上面で遺構検出を行った。

検出した主な遺構は礎石建ち基壇建物1棟、石列1条、南北溝1条、東西溝2条である。また南辺では下層の調査を行い、暗灰褐色粘質土から下の層序は上から粘土混青灰色砂質土、暗灰色粘土、暗灰色砂質土、暗茶色腐食土の順で、その下の青灰色砂に至り無遺物層となることを確認した。

SB840は調査区北辺で検出した礎石建ち基壇建物で、北で西に8度の振れをもつ。基壇は0.5mの高さで、旧地表面から0.11mの深さまで掘り下げたのち、15cm前後に及ぶ版築を行って築成されている。版築上には建物の周囲に広がる焼土も用いられている。基壇の西面には石積みによる外装が残るが、南面の遺存状況は悪く、断割り調査によって掘り込み地業のみを確認した。調査区の制約から東・北両面を確認できなかったため基壇の規模は不明である。基壇上には東西3間、南北1間の礎石抜き取り穴を確認した。南北については少なくとも更に北に1間延びることは間違いない。全ての礎石抜き取り穴の壁面には風化した花崗岩が貼り付いていた。柱間寸法は東西が4.05m（13.5尺）等間で、南北は1間分を確認しただけであるが、柱間が等間であると仮定した場合2.85m（9.5尺）と考えるのが最も妥当と思われる。しかし南の1間が庇であった可能性も残されており、底部分が9尺、2間目の身舎部分が10尺以上を考えることもできる。いずれにせよ今回の調査成果だけで規模・構造等を推定することは困難である。基壇上面では東西の礎石抜き取り穴の間をつなぐ浅い溝SD842を検出した。溝中には多くの凝灰質砂岩小片が含まれており、地覆石の抜き取り溝であった可能性が強い。なお礎石掘付け掘形内からは7世紀後半の土器が出土している。

SX850はSB840西妻柱筋から西に8.1m（27尺）を隔ててある南北方向の石列である。上坑・溝等によって一部を欠くが、調査区の南から北まで20mに及んで確認した。SB840と同じく北で西に8度振れる。石列より東に淡黄白色粘質土

層が一部帯状に残っており、淡黄白色粘質土は築地塀積上の一部で石列が築地西側の基底石であったと考えることもできようが、石の面は西に揃っているとはいはず、東側に同様の石列、またはその抜き取り穴を確認することが出来ず、やや疑問が残る。むしろ現段階では、昭和六十年の西門（K地点）の調査の際に検出した石列と同様（『概報』15）、建物から溝に至るまでを犬走り状に整地したその見切りの石と考えた方がよいであろう。また石列の西0.7mに瓦列SX852が並行してあるが、わずかに遺存するだけで、両者の間が溝状をなしておらず、石列に伴う施設とは言い難い。

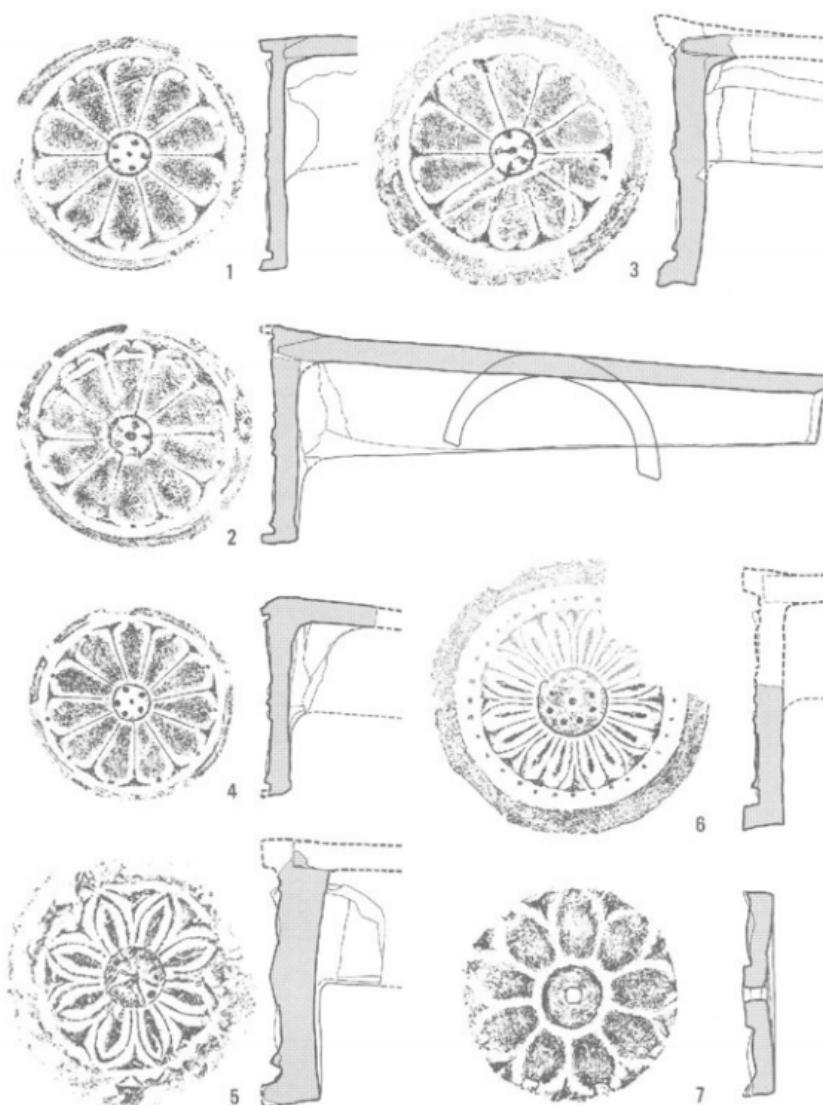
南北溝SD860はSX850の西に2.7m（9尺）を隔てて並行する溝である。調査区北端では溝の東岸に石組の護岸が一部残り、当初石組溝であったことがわかる。石組護岸の上端はSX850から0.2mほど低い。溝幅は調査区南端で確認でき、1.2mで、深さ0.6mを測る。溝の埋土からは上飾器の灯明皿、黒色上器など10世紀後半の上器が出土し、この頃まで機能していたことがわかる。

東西溝SD862はSD860と連なる幅1.3m、深さ0.25mの溝である。一部分だけを確認したにとどまり、SD860と合流する溝か分岐する溝か、また素掘り溝か石組溝かなどは明らかにし得なかった。

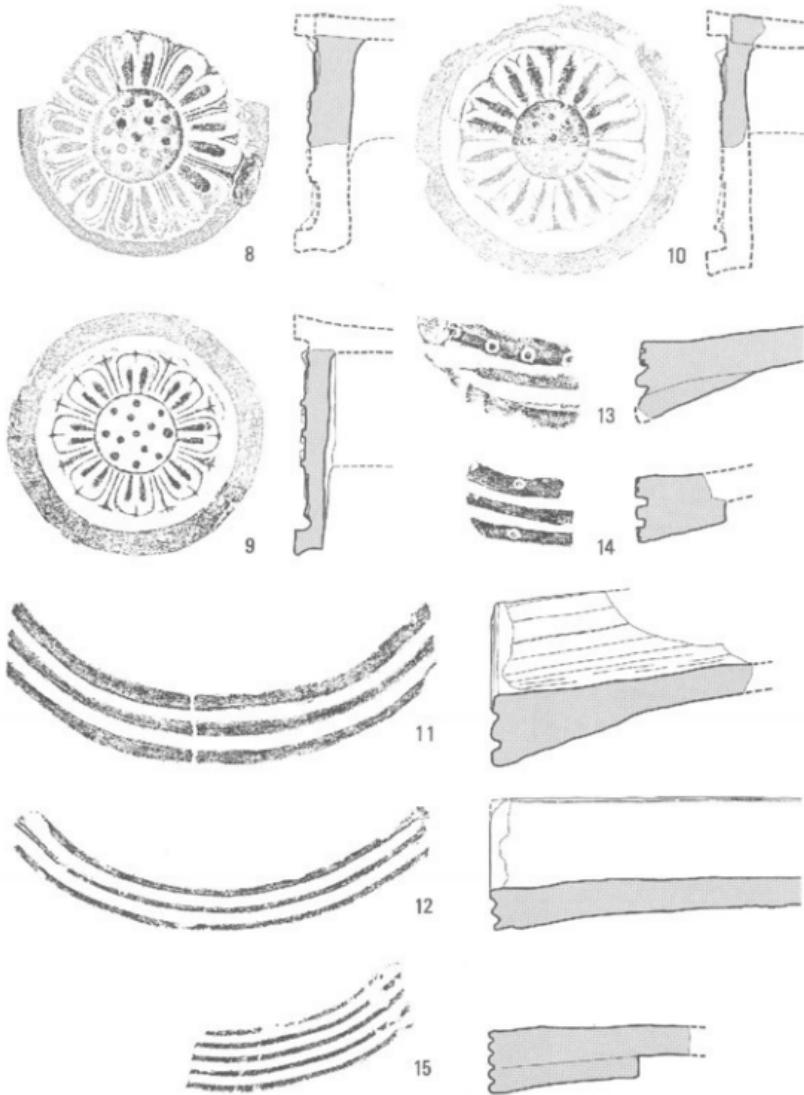
東西溝SD845は調査区東辺で確認した幅1m、深さ0.5mの素掘り溝である。溝内には多量の瓦が含まれ、その中には竹状模骨痕をもつ丸瓦も多量にあった。
遺物 瓦類、土器・上製品、木製品、石・金属製品がある。

瓦磚類 軒丸瓦、軒平瓦、樋先瓦（第45・46図）、鶴尾、熨斗瓦、面戸瓦、博のほか整理箱240杯分の丸瓦・半瓦が出土した。

軒丸瓦I型式には、瓦筋の傷みがほとんどないIa(1)、主に中房に傷みが生じたIb(2)、筋傷が最も進み外縁の広いIc(3)があり、瓦当はこの順で厚くなる。またIaは丸瓦の凸面だけを削って接合するが、Ibは凹面あるいは凹凸両面を削り、Icは凹凸両面と端面に刻みを入れて接合する。IIはVI型式で、今回の調査で出土したものによって中房蓮子は1+5であることがわかった。XIII型式も宍形に近いものが出土した(5)。外区内縁に線鋸歯紋と珠紋を組み合わせ、外縁は素紋である。複弁蓮華紋にはXIV型式とXVII型式(6)のほかに新



第45図 飛鳥寺1992-1次調査出土瓦① (1:4)



第46図 飛鳥寺1992-1次調査出土瓦② (1 : 4)

型式の併せて三つがある。XⅧ型式(8)は弁の形が法隆寺式軒丸瓦に似る。弁端は外縁に接し、中房蓮子は1+4+9である。これは浜津樺原寺跡と同範である。XⅨ型式(9)は弁端と間弁端が鋭く尖り、中房蓮子は1+4+8である。これは大和姫寺跡と同範である。XⅩ型式(10)は大きな子葉が特徴で、間弁はすべてつながり、中房蓮子は1+8+8である。これは姫寺跡、平城薬師寺と同範である。以上の3型式は外縁がともに素紋縁である。

軒平瓦はすべてが桶巻き作りの重弧紋である。三重弧紋のI型式にはA～Eの5種がある。IA(11)は厚手で弧線の太いものである。またIB(12)は弧線の細いもので、隅軒平瓦がある。IC(13)はIAに似て弧線が太く、上の弧線に竹管紋を押す。ID(14)は太い弧線の上下にまばらな竹管紋を押すもので、IEは細い弧線で竹管紋を押すものである。IDは段顎で、そのほかのものは直線顎である。III型式(15)は五重弧紋である。これは段顎で顎面に繩叩き目が残る。なお『飛鳥寺発掘調査報告』のII・III型式はともに四重弧紋なので、これ以後IIA・IIBに改める。

樅先瓦は素弁九弁の完形品が出土した(7)。堺は長さ37.5cm、幅24.5cm、厚さ5.5cmの型作り長方形塊である。片面に鎧で斜格子を刻む。

丸瓦は行基式の竹状模骨丸瓦が大量に出土した。これは縦位繩叩き桶巻き作り平瓦と組み合う。このほか飛鳥寺創建期の丸瓦・平瓦も多量に出土した。

土器・土製品 土器には土師器、須恵器、黒色土器の他に若干の綠釉陶器、灰釉陶器がある。

須恵器には漆の付着した杯・壺類、鏡に転用されたものがあり、土師器には灯明皿等が少量含まれている。また土製品には、土馬が1点、円面鏡2点、輪



第47図 飛鳥寺1992-1次調査出土鉢受材(1:5)

羽口等がある。

木製品 調査区南辺で行った下層の調査で、暗灰色砂質土中から多量の木材が出土した。明らかに加工の施されたものと、そうでない自然木とがある。前者は主に建築部材の類で、扉の軸受となる材（鼠走あるいは闕）等がある。軸受付はかなり小型で、少なくとも寺院の堂に使われたとは考え難い。木材の上層は創建瓦包含層が覆い、また暗灰色砂質土層以下の土層には木材以外の遺物がほとんど含まれない。

石・金属製品 石製品としては砥石、金属製品としては鉄釘などの鉄製品のほか鉱滓が出土している。

まとめ

今回の調査で検出したSB840は、昭和二十一～三十二年の発掘調査で塔、中・東・西の三金堂、講堂、中門、南・西門を確認して以来の礎石建ち基壇建物である。現段階で建物の性格を確定するには至っていないが、東西棟で、西側に犬走り・溝を伴い、またこれら一連の施設が飛鳥寺創建時までは遡らず7世紀後半の築造であることなどから、東門である可能性は低い。昭和五十七年の寺域東北隅の調査で確認した寺域の東限を画する堀SA600の延長線は今回の調査地の東を通り、SB840はそれより内側に位置する。SA600は北で西に8度の振れをもつが、今回検出したSB840、右列SX850、南北溝SD860も全く同じ振れをもっていることは興味深い。また犬走りの縁石と考えられるSX850が築地の基底石であった可能性も残されており、飛鳥寺の東南に築地、溝で両された一郭があったことも考えられる。7世紀後半に飛鳥寺東南で建てられた建物としては、壬戌年（662）三月に道照が建てたとされる禪院（『続日本紀』、『三代実録』）があるが、今回の調査成果だけでは断定するに至らない。

今回の調査成果は飛鳥寺の伽藍、寺域等を考える上で重要な資料を提供することとなった。しかし残念ながら様々な解釈の可能性と多くの問題点を残すこととなつた。今後周辺における調査の進展をまって、これらの施設の性格を検討していかねばならない。なおSA600の延長線、東門の確認など寺域東限の確定は今後の最重要課題であるといえよう。

5、飛鳥寺南方遺跡の調査（第1・2・3次）

（平成四年十二月～五年一月）

この調査は、明日香村飛鳥小字蔽ノ下に計画された広域下水道飛鳥川幹線管渠第27号発進立坑の掘削に先立ち、3次にわたり実施したものである。この工事計画の立案に際しては、飛鳥・藤原地域の埋蔵文化財の破壊を最小限にとどめるために協議を重ね、藤原京の条坊関連遺構や、飛鳥寺などの史跡指定地に立坑を設けることはできる限り避ける方針がとられた。その結果、第27号立坑の位置は、飛鳥寺の史跡指定地外で飛鳥寺瓦窯から南に約150m離れた地点が選ばれ、遺構の有無を探るために南北10m、東西6mの範囲を調査することとなった。ところがこの調査で7世紀末に遡る大規模な石組溝が発見されたため、関係諸機関と協議し、立坑の位置を南東へ移して遺構の保存を計るべく第2次調査を行った。第2次調査は、前回検出した石組溝の南延長部を確認するために、東西13m、南北8mの不整形の調査区を設けて実施したが、この調査区でも石組溝の続きと、それより古い石組暗渠を検出するに至った。第27号立坑予定地は、丘陵沿いで遺構密度が比較的低いのではないかとして選定されたのであるが、大規模な遺構が複雑に重複していることが確認されたのである。しかし迂回路や工事基地に必要な用地を確保できる場所がここ以外には求められないこともあって、立坑の位置を移し、遺構を保存することはきわめて困難な状況となつた。そこで再度協議を重ねた結果、次善の策ではあるが、当初の立坑予定地全域を調査し、発見された石組溝・暗渠などの重要な遺構の工事期間中の解体撤去と、工事終了後の復原という案が提出された。第3次調査は、立坑の掘削によって破壊される範囲全体を調査するために、第1次調査区と重複する東西9m、南北12mの発掘区を設けた。調査総面積は245m²である。

今回の調査地周辺は、飛鳥寺と伝飛鳥板蓋宮などの歴代の宮殿が営まれた重要な地域のほぼ中間にあたり、周辺における近年の調査成果と、「日本書紀」の記述等を総合すると、7世紀中葉以降の大がかりな都づくりがこの地域にも及んでいたことが明らかになりつつある。しかし、その遺構の実体については

未調査部分が多いために謎に包まれ、また適切な遺跡名も与えられていないのが現状である。小字名をつけるなどの案も考えられたが、遺構が小字蔽ノ下の範囲にとどまらない大規模なものと推定されたため、本概報ではとりあえず飛鳥寺南方遺跡と仮称することとした。その範囲は、北を飛鳥寺の寺域南限、南を伝飛鳥板蓋宮などの宮殿遺構の北限（未確定）、東を酒船石が所在する丘陵、西を飛鳥川によって開まれた平地部とし、そこに存在する7世紀代を中心とする遺構群の総称とする。したがって、今回検出した石組溝等は、この飛鳥寺南方遺跡の東を画す基幹排水路として位置づけられる。

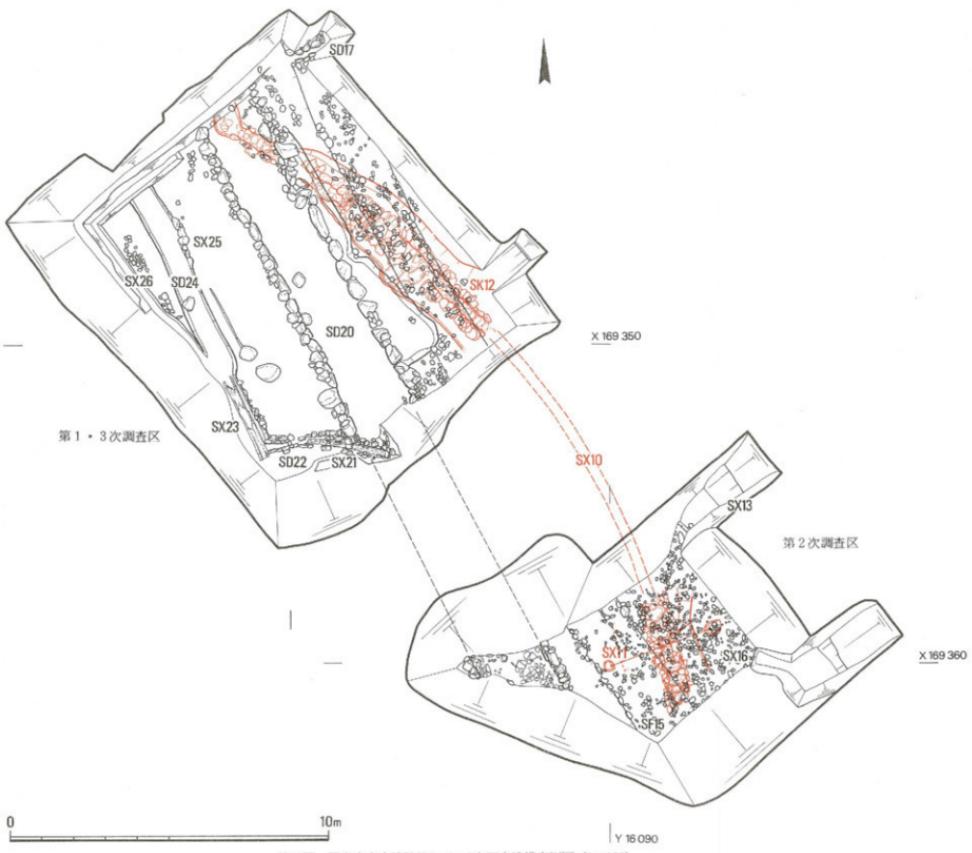
遺構

調査地は、酒船石や飛鳥寺瓦窯が存在する丘陵西斜面に接した村道と水田にまたがる。道路部分には厚い盛り土があり、これを除去して旧道と旧水田の耕土・床土に達した。床土の下には上から青灰色粘質土層と黄灰褐色粘質土層の厚い堆積があったが、ほとんど遺物を含まない。この下には石組溝の埋没後に堆積した大量の砂層があった。これを掘り下げて石組溝を、黄灰褐色粘質土層を取り除いて石敷舗道や石敷などを検出し、その下層で石組暗渠や柱列を検出した。今回検出した遺構は、7世紀中頃から平安時代初めにかけてのものであるが、大きくA～C期の3時期に分けられる。

A期 石組暗渠SX10と、東側の丘陵岩盤を削った傾斜面SX13がある。

石組暗渠SX10は、丘陵西斜面を大規模に削る土木工事をともなって構築されており、幅・高さともに約0.8m、全長24m以上で丘陵沿いに緩く弧を描きながら西北方向に延びる。工事は、まず丘陵から続く花崗岩岩盤を削って傾斜面SX13を設け、この傾斜面沿いの岩盤と地山の粘土層を掘り込んで幅約2m、深さ約0.8mの掘形をうがつ。ついで、その中に人頭大からひとかかえほどの大石を3段ないしは4段積んで両側石とし、蓋石を置いて大小の川原石を隙間に詰める。底には平らな玉石を1列から3列敷きつめるが、第3次調査区の中央部の1.5mほどの間は、削り出した岩盤を直接底とし、その北約1mの間は拳大の玉石を敷く。内法の幅と高さはともに0.5mほどで、内部には細かい粘土と砂が水平に堆積していた。各層ともに炭の碎片がかなり含まれ、また細長い木片が数

Y 16100



第48図 飛鳥寺南方遺跡第1・2・3次調査遺構実測図 (1:125)

片出土した以外に遺物は認められなかったが、最下層の粘土の微遺体分析を天理大学附属天理参考館の金原正明氏に依頼した結果、両層ともベニバナの花粉が大量に含まれていることが判明した（97頁の報告参照）。なお第2次調査区の石組暗渠は、柱列SX11の柱掘形によって蓋石が外されている以外、遺存状況は良好である。しかし第3次調査区では、その大部分が石組溝SD20の設置にともない破壊され、また土坑SK12によっても壊されており、中央部のごく一部で蓋石が残っていたにすぎない。その他の部分では側石や底石だけが残っていた。暗渠掘形と上を覆う整地層から7世紀前半の上器が少量出土しており、丘陵斜面の掘削と暗渠の設置が、7世紀中頃に遡ることを示している。

B期 石組溝SD20、木樋SX21・23、石組溝SD22、木樋抜き取り溝SD24、石列SX25、石敷SX26がある。

A期の石組暗渠は、花崗岩岩盤を掘り崩した黄褐色山上を用いた整地層で覆われている。その上には丘陵上から流れ込んだ土砂が堆積した状況が土層観察の結果得られた。B期の石組溝SD20は、この堆積層上面から掘り込み、幅4mほどの掘形を設けて側石を積む。深さは最大で0.8m、溝底の幅は広いところで2mほど、狭いところで約1.7mである。両岸には長さ1.1m～0.6mほどの大型の花崗岩を1段、またはひとかえ大から人頭大の玉石を2段から3段積んで護岸する。溝内に大小の石が大量に堆積していたので、石積みはさらに1段ほど高かった可能性がある。また第2次調査区では両岸から幅1mの間に砂岩切石や玉石を用いた底石が認められた。この溝の全長は21m以上に及び、ほぼまっすぐ伸びているが、このまま北進すれば丘陵にぶつかるので、今回の調査区の少し北で西北方向に曲がると推定される。この石組溝からは、7世紀末から8世紀初めにかけての土器が大量に出土しており、溝として機能していた時期の中心がその頃にあることを示している。なおこの溝はC期にも存続する。

木樋SX21・23は、玉石を並べて石組溝SD20の水をせき止め、木樋を利用して水を北へ流す暗渠である。木樋SX21は、幅15cm、厚さ11～13cm、長さ205cmの木樋Aと、幅14cm、厚さ9～10cm、長さ80cmの木樋Bの2本を連結して石組溝から木樋SX23に水を取り入れる施設。木樋Aの石組溝内に出る部分に蓋

板はなく、両側の立ち上がり部分も低い。木樋の両側は砂岩の切り石を並べて補強するが、木樋SX23と木樋Bの間約0.9mの間にには玉石を敷いて底石とし、両側に砂岩の切石を並べて幅0.1~0.2m、深さ約0.3mの石組溝SD22とした部分がある。蓋石らしいものは木樋Bに接した玉石1個しか認められず、この部分が開渠となっていたか、暗渠となっていたのかは確認できなかった。

木樋SX23は、幅30cm、厚さ22cm、長さ270cmの材に深さ11~12cm、底幅12~18cmの溝を穿ち、幅30cm、厚さ10cmの蓋板をのせたもので、石組溝と並行し北へ水を流す。石組溝SD22との接続部分には深さ11cm、上幅37cm、下幅7.5cmの逆台形の切り込みを設け水を取り入れるが、南側の小口を塞ぐ装置は認められなかった。北側の次の木樋との接続部分には、両側と底を浅く彫りくぼめた仕口があるが、別材を木樋の接続部分に当て、漏水を防ぐための工夫を見られる。また木樋の接続部分には玉石をいくつか敷いて不等沈下を防いでいる。木樋はさらに北へ延びていたと推測されるが、抜き取り溝SD24によって抜き取られている。なおこの木樋内の堆積土も金原氏に微遺体分析を依頼したが、寄生虫卵などは検出されなかった。

石列SX25は、ひとかかえから人頭大の玉石を並べたもので、大部分が失われているが、石組溝SD20の西約2mの位置に並行して設けられていたと思われる。石はやや傾斜をもって立てられているので、石組溝の西側に幅約2m、高さ0.3m程度の堤があったと推定される。その西側にある石敷SX26は抜き取り溝SD24と小溝群によって壊されているが、かつては石列SX25の西、つまり木樋SX23の上は石敷で完全に覆われていたと推測される。

柱列SX11は、△期の石組暗渠SX10の蓋石を一部壊してつくられた掘立柱の遺構である。柱間寸法は1.7m等間で、調査区内で柱根2箇所と柱痕跡1箇所を検出したが、建物になるのか廬になるのか不明である。

C期 石組溝SD20東の石敷舗道SF15と、小規模な石組溝SD17、第2次調査区で検出した石敷舗道の東にある石敷SX16がある。これらの遺構は、石組溝SD20の東側に丘陵からの土砂がかなり堆積してから設けられたものである。

石敷舗道は石組溝から約1m東にあり、幅約1.4mの間に玉石を敷きつめ、両

側に見切りの切石を並べたもの。石組溝SD17は、丘陵からの雨水を舗道を横断して石組溝SD20に流す施設である。石敷SX16は玉石を粗く敷いたものであり、凹凸が激しい。この石敷上から9世紀末から10世紀初めにかけての土師器が出土しており、この頃までこの石敷などが機能していたことが判明した。

遺物

土器・瓦・埴輪・土製品・木簡・砥石・砂岩の切石などがあるが、その大部分は石組溝から出土したものである。もっとも多いのは土器で、古墳時代から平安時代初めにかけての土師器・須恵器、平安時代の綠釉陶器などがある。量的に多く、まとまっているのは7世紀末から8世紀初めにかけてのいわゆる藤原宮期の土師器・須恵器であり、なかに漆が付着した上器が少量含まれる。奈良時代の土器はほとんどみられず、平安時代初めの土器が少量ある。瓦は、重弧文軒平瓦が2点と丸・半瓦が少量あり、重弧文軒平瓦のうち1点は川原寺や飛鳥寺所用のものと同じである。丸・半瓦の中には飛鳥寺所用と思われるものがある。土製品には土馬3点と、驥羽口がある。木簡は14点（うち削り屑9点）出土した。紀年を有するものはないが、文書木簡とみられるものが含まれている。砂岩の切石は、伝飛鳥板蓋宮や、最近では洒船石北方遺跡の石垣遺構に多数使われていることが判明したものと同質同形で、なかには斜面を削り出したものもある。石組溝SD20の砂層から破碎したものが多数出土したほか、第2次調査区で検出した石組溝SD20の底石には26cm四方の切石が使われている。

まとめ

今回の調査では、7世紀末から平安時代初めまで存続していた大規模な石組溝や、7世紀中頃に遡る石組暗渠などを検出した。全体の規模や用途は明らかでないが、石組溝は上流の雨水などをまとめて飛鳥川に流す施設、石組暗渠や木樋は、下水あるいは上水を流す施設と考えられる。飛鳥寺の西から南にかけては、木樋・土管・石組暗渠など、水の利用にかかわる多様な形態をもつ遺構が集中する特殊な地域と考えられてきた。今回検出した石組溝や石組暗渠はそのなかでも最大の規模があり、重要な役割を果たしたものと考えられる。特にB期の石組溝SD20は全長21m以上に及び、東の丘陵地帯から流れ出る雨水等

を集め、北へ排水するための基幹排水路として機能していたことが確認された。またまわりに石敷や石列をもつ堤、石敷舗道などが順次作られ、この地域の遺構群の東限を画す施設として長い間機能していたことも判明した。この石組溝SD20は、国土方眼方位に対して北で西に30度近く振れており、ほぼ真北方位をとる飛鳥寺や伝飛鳥板蓋宮跡関連の遺構とは大きく異なる。このまま北進すれば10m足らずで丘陵にぶつかるので、おそらくは大きく西に曲がり、飛鳥寺の寺域を避けてその南を通り、飛鳥川に水を導くものと推定される。今回の調査区の西北では石垣や底石をともなう池や石組溝が検出されており（飛鳥京跡第28次調査）、地形や構造から推定すると一連の遺構かと思われる。また今回発見した石組暗渠や石組溝は、基本的には自然地形にしたがって築かれており、これまで一部で想定されてきたような飛鳥地域の方格地割の存在が、少なくともこの地域には認められないことが確認されたことも成果のひとつに数えられるよう。さらにA期の石組暗渠SX10の堆積土からベニバナの花粉が大量に検出され、上流にベニバナから抽出した染料を利用して染織に関する工房の存在が考えられるようになった成果も大きい。周辺地域の調査の進展を期待したい。

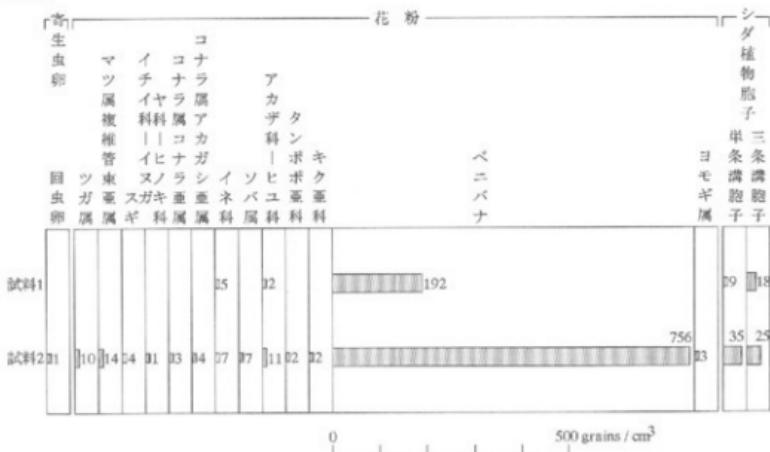
石組暗渠SX10内堆積土の微遺体分析

第2次調査区で検出した石組暗渠内下層の淡灰褐色粘土の南側部分（試料1）と、北側部分（試料2）の2試料について良好な分析結果が得られたので報告する。方法は金原「花粉分析および寄生虫」（『藤原京跡の便所遺構』）にしたがい、花粉と寄生虫卵を対象とした（第49図）。

寄生虫卵は試料2から回虫卵が1個検出されたが、通常の汚染範囲であり、遺構の性格を限定するものではない。花粉遺体はベニバナ *Carthamus tinctorius* Linn.の花粉が特徴的に多く、堆積土1cm³中に試料1で192個、試料2で756個という出現量を示す。他は試料2に食用となるソバ属の花粉があるのを除けば、通常出現する風媒花植物の花粉が少量含まれるのみである。

ベニバナ花粉は、花粉量が少なく分析に反映されにくい虫媒花であることを考慮すると、近くの畑などで栽培されていたもののからの供給とみなすには相対的に出現量が多すぎ、ベニバナの花序を多量に使用する染織の廃液など特殊な

供給源に求めるのが妥当であると考えられる。他にヒノキの木材組織片が多く含まれていた。（天理大学附属天理参考館 金原正明 環境文化研究所 金原正子）



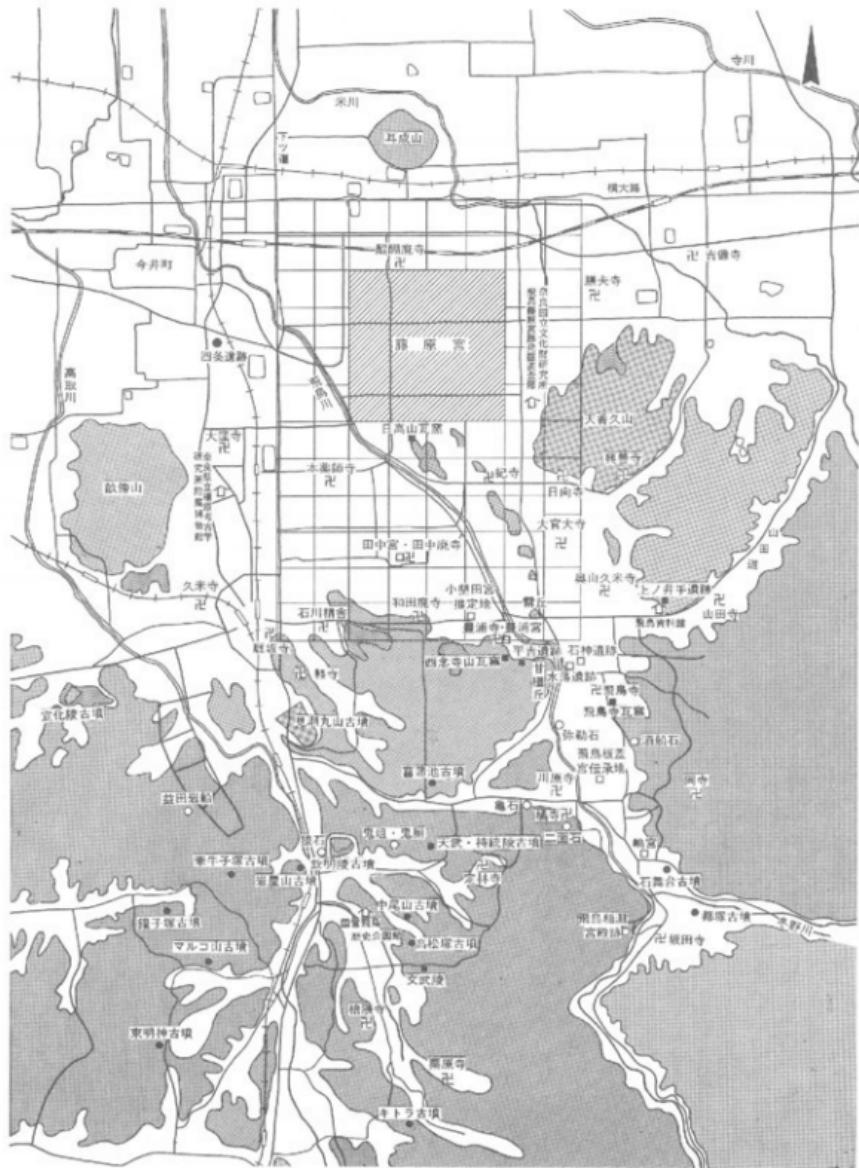
第49図 花粉・寄生虫卵組織図

6、小墾田宮の調査（1992-1次）

（平成四年九～十月）

この調査は倉庫改築工事に伴って明日香村農浦で実施したものである。調査地は小墾田宮推定地の一画にあたり、東西6m、南北3mの調査区を設定して調査を行った。なお今回の調査区の北に接して第1次（昭和四十五年）、西に接して第2次（昭和四十八年）の調査が行われている（『報告』1、『概報』4）。

調査区の土層は、上から盛土（厚さ0.4m）、旧耕土、床土、暗褐色土、茶褐色土とつづき、地表面から約1.1mで暗茶褐色砂礫土上面にいたる。調査では、この暗茶褐色砂礫土上面から掘り込まれた土坑状の落込みと、それよりも新しい斜行溝（幅約1m、深さ0.3m）を1条検出した。これらは7世紀後半頃の遺構であろう。なお中世の小溝などは、茶褐色土上面から掘り込まれていた。



第50図 飛鳥・藤原地域の遺跡（1：40000）

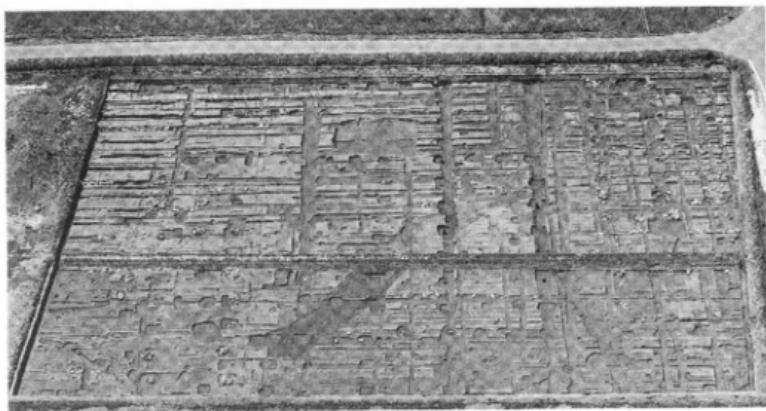


写真1 調査区全景（東から）

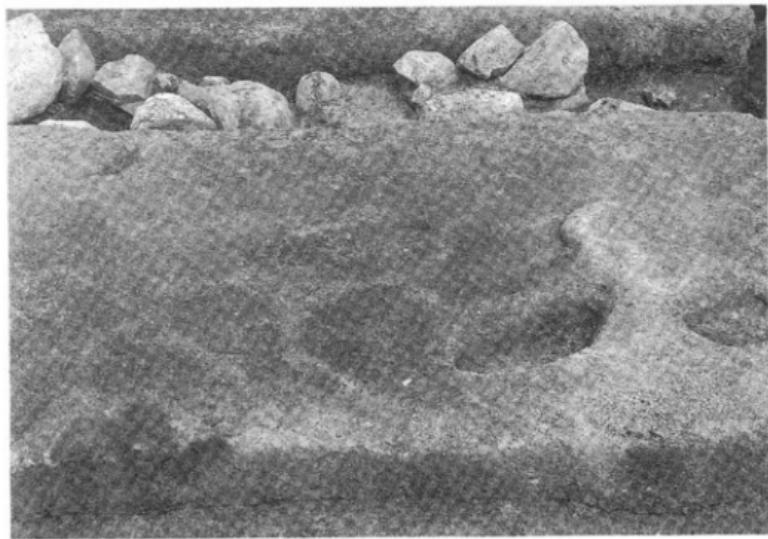


写真2 石敷の痕跡（東から）

藤原宮東方官衙地区（第67次調査）



写真3 藤原宮内裏西外郭地区（第70次調査、西から）

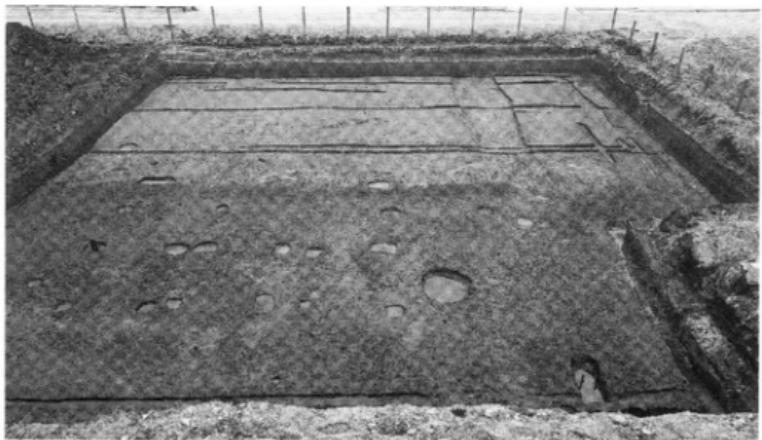


写真4 藤原京右京七条一坊（第66-12次調査、南から）



写真5 藤原左京九条四坊
石組暗渠SD2430・開口部SX2431
(第69-11次調査、北西から)



写真6 本薬師寺南辺調査区
(1991-1次調査、南から)



写真7 調査区全景（西から）



写真8 木幡抜取り溝SD1595
と石敷SX1706（北から）

石神遺跡（第11次調査）



写真9 基壇建物SB840
(西から)



写真10 調査区西半(南から)
飛鳥寺(1992—1次調査)

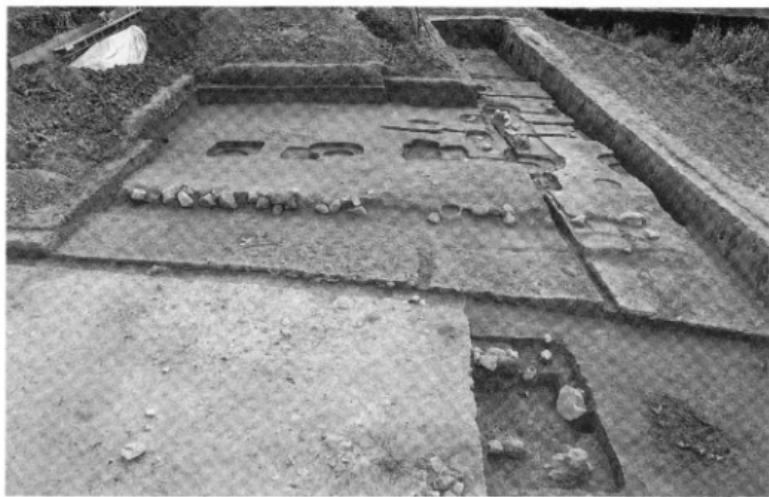


写真11 坂田寺
(第8次調査、東から)

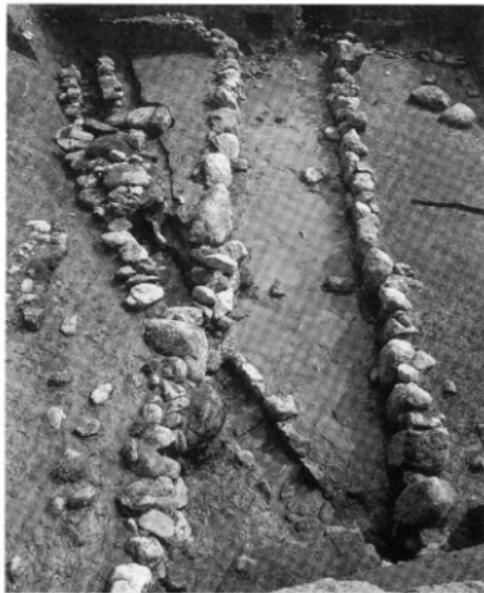


写真12 飛鳥寺南方遺跡
(第3次調査、北から)



飛鳥・藤原宮発掘調査概報 23

平成五年五月発行

編集：奈良國立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
発行

〒634 楢原市木之本町宮ノ森

Tel 07442-(4)-1122

Fax 07442-(4)-1742